シトゥ『三十頌註』研究：格助詞・累加副助詞・接続助詞・選択詞

班青東周・根本裕史

1　序

本研究は，前論文に続き，シトゥ『三十頌註』の読解に基づいて，チベット文字とチベット語に関するチベット人文法家の理解を明らかにするものである．本稿では特に『三十頌註』第 9 詩節から第 17 詩節（vv. 9c–17a）[1]に説かれる種々の助詞（tshig phrad）すなわち la 助詞，属格助詞，能格具格助詞，累加副助詞（ཀྱང་ kyang など），接続助詞（སྟེ་ ste など），選択詞（གམ་ gam など），奪格助詞の理論を扱う．

シトゥ・チューキ・チュンネ（Si tu chos kyi ’byung gnas: 1699/1700–1774）がチベット文法学に革命をもたらした人物であることは間違いない．シトゥがサンスクリット文法学の知識の活用により，独自のチベット語文法学を築き上げたこと，また，彼のチベット語文法は記述文法ではなく規範文法の性質を有することが既に明らかとなっている[2]．しかし，トゥミの『三十頌』の個々の詩節の読解において，シトゥの註釈家としての独創性がいかなる形で現れているかを検証する試みは十分になされていない[3]．以下では『三十頌』第 9 詩節後半から第 11 詩節（vv. 9cd–11）を取り上げ，シトゥが彼以前の註釈者達の解釈を批判的に分析し，独自の新たな読みを提案していること，とりわけナムリン・パンチェン・クンチョク・チュータク（Rnam gling paṇ chen dkon mchog chos grags: 1646–1718）の見解を批判して合理的な解釈を示していることを明らかにする．

2　『三十頌』第 9 詩節後半から第 11 詩節の解釈

2.1　シトゥの解釈

『三十頌』第 9 詩節後半から第 11 詩節に示されるのは，la 助詞（la don 助詞とも呼ばれる）の語形成とその意味的使用法である．シトゥの見解に従うと詩節を次のように訳すことができる．

རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་རྣམས་ལས། །གང་མིང་མཐའ་ན་བཅུ་པ་གནས། ། [9cd]
དེ་ལ་ཨཱ་ལི་གཉིས་པ་སྦྱར། །གང་མིང་མཐའ་ན་བརྒྱད་པ་གནས། ། [10ab]
དེ་ལ་གཉིས་པ་ཨུ་ཡང་སྦྱར། །གང་མིང་མཐའ་ན་གསུམ་པ་གནས། ། [10cd]
དེ་ལ་ཨཱ་ལི་གཉིས་པ་སྦྱར། །བཞི་པ་དགུ་པ་དངོས་ཀྱང་སྟེ། ། [11ab]
ལས་དང་ཆེད་དང་རྟེན་གནས་དང་། །དེ་ཉིད་ཚེ་སྐབས་ལ་སྒྲ་ཡིན། ། [11cd]

[i] 任意の語の最終要素（-ས་）の直後に起こる，十の後置字の中で第十〔の文字 ས་〕，そこに第二の āli（ ུ ）を結合したもの（སུ་），[ii] 任意の語の最終要素（-འ་ または後置字なし）の直後に起こる第八〔の後置字〕（-ར་），あるいはそこに第二の〔āli である〕母音記号-u（ ུ ）をさらに結合したもの（རུ་），[iii] 任意の語の最終要素（-ང་，-ད་，-ན་，-མ་，-ར་，-ལ་）の直後に起こる第三〔の後置字 ད་〕，そこに第二の āli（ ུ ）を結合したもの（དུ་），[iv] さらに，そのま

[1]詩節番号は Graf 2019: 447ff. に従う．

[2]Paṇ chen don grub 2019，班青東周 2019, 2020, 2021, 2022 を参照．

[3]シトゥ文法学の特色を解明した最新の研究である Graf 2019 は，シャル・ロツァーワ，ナムリン・パンチェン，タティ・リンチェン・トンドゥプなどの見解を多く取り上げ，それらの先行見解に対するシトゥの批判を考察しているが，『三十頌』詩節の読み方に関する検討は行なっていない．

まの語形で現れる第四〔の後置字 ན་〕と第九〔の後置字 ལ་〕，それらは〈行為対象〉，〈目的〉，〈場所〉，〈一体性〉，〈時間〉〔を表示する〕la 助詞である．

シトゥはここに一群の la 助詞（la don 助詞）の連声規則の存在を認めず，それぞれの助詞の語形成と，la 助詞の意味的機能のみを見出している．ここに列挙される la 助詞は སུ་ su，-ར་ -r（語の直後にツェクを置かずに加える）もしくはそれに代わる རུ་ ru，དུ་ du，独立助詞の ན་ na と ལ་ la である．後置字 - ག་ -g，-བ་ -b と再後置字 -ད་ -d の後に起こる ཏུ་ tu は『三十頌』に規定されないため，註釈者（あるいは読者）がそれを補うことで，全ての la 助詞のリストが完成する．それらは〈行為対象〉，〈目的〉，〈場所〉，〈一体性〉，〈時間〉を表示するために使用される．ただし，ལ་ la と ན་ na の二つは〈一体性〉の意味では用いられない[4]．以上がシトゥの見解である．

2.2 ming mtha' na に関する二つの解釈

語形成に関わる 9cd–11a について，シトゥは彼以前の多くの註釈者達が示していた解釈を斥け，自身の新たな読み方を提案している．以下に 9d–10a に対する新旧の二つの解釈をチベット語原文と共に提示する．

གང་མིང་མཐའ་ན་བཅུ་པ་གནས། །དེ་ལ་ཨཱ་ལི་གཉིས་པ་སྦྱར། །[5]

（旧解釈 9d–10a）任意の語の最終要素の**位置に**起こる第十〔の文字 ས་〕，**それと同じ文字に**第二の āli（ ུ）を結合したもの（སུ་）〔は〈行為対象〉などを表示する la 助詞である〕．

（新解釈 9d–10a）任意の語の最終要素の**直後に**起こる第十〔の文字 ས་〕，**そこに**第二の āli（ ུ）を結合したもの（སུ་）〔は〈行為対象〉などを表示する la 助詞である〕．

二者の大きな違いは gang ming mtha' na というチベット語をどのように読むかという点にある．旧解釈 9d–10a では「任意の語の最終要素の**位置に**」，新解釈 9d–10a では「任意の語の最終要素の**直後に**」[6]と理解される．na 助詞は存在領域を表し，その領域にはある程度の幅が認められるので，ming mtha' na を「最終要素の位置に」と読むことも，あるいはまた「最終要素の直後に」と読むことも文法的には許容されるであろう．語の最終要素（ming mtha'）がある所に，すなわちまさにそれと完全に同じ場所か，もしくはその近辺に第十後置字が置かれていれば，ming mtha' na という処格表現は成立する．

旧解釈 9d–10a に従うならば，gang ming mtha' na bcu pa gnas「任意の語の**最終要素の位置に**起こる第十〔の文字 ས་〕」は，例えば གཡས་ g-yas「右」のような語の末尾に存在する後置字 -ས་ -s を表していることになる．その場合，続く 10a の de la は「そこに」（＝語末の後置字 -ས་ -s に）ではなく，むしろ「それと同じ（後続する別の）文字（ས་）に」を意味するであろう．なぜなら，གཡས་ g-yas の後置字 -ས་ -s に母音記号（ ུ）が付けられて，*གཡསུ་ という語形が成立することはないからである．གཡས་སུ་ g-yas su「右に」という正しい語形を導くことのできる規則としてこれを読むためには，de la を上記のように解釈しなければならない．

---

[4]タティ・リンチェン・トンドゥプは la 助詞も〈一体性〉の意味を表示すると主張し，20 世紀の学者ムゲ・サムテンはその考えに従って例文を与えている（*Pra ti sum rtags* 30.3ff.; *Blo gsal 'jug ngogs* 28.12ff.; 班青東周 2019: 140f.）．しかし，シトゥはその主張を批判する．翻訳研究 [221.212.27a–g] を参照．

[5]Bacot (1928: 77): "Parmi les dix lettres sufixes, la dixième après tout mot où elle s'accorde, affectée de la deuxième voyelle"; Miller (1976: 9): "Among the ten afixed letters, when the tenth [*s*] is placed at the end of any word, to this the second vowel [*u*] is added"; 稲葉 (1986: 327):「十添後字の中，いづれか或る語の末尾に第十（ས）が置かれ，それに母音の第二（u）が結合せられる．」

[6]翻訳研究 [221.212.22d] を参照．

旧解釈と新解釈の相違は，前者がここに連声規則（後置字 -ས་ -s の後に助詞 སུ་ su が起こる）の存在を認めるのに対し，後者はそれを認めないという点にある．先行研究の内，Bacot (1928: 77) は “la dixième après tout mot où elle s’accorde, affectée de la deuxième voyelle”「それに見合う任意の語の後で（après），第二の母音を付せられた第十字は…」という仏訳を与えており，新解釈 9d–10a に合致する考えを示していると思われる．Bacot (1928) の解釈が後代の註釈に立脚したものであることを認めつつも，それはトゥミの『三十頌』の原意ではないと主張する Miller (1976: 9) は，“when the tenth [*s*] is placed at the end of any word, to this the second vowel [*u*] is added”「第十字［s］が任意の語の末尾に追われる時，ここに第二の母音［u］が追加される」という英訳を提案する．旧解釈 9d–10a に一致するようにも見えるが，to this「ここに」の意味が不明瞭であり，例えば*གཡསུ་という誤った語形の導入を可能にするような文言であるとも理解し得る．稲葉 (1986: 327) の和訳「十添後字の中，いづれか或る語の末尾に第十（ས）が置かれ，それに母音の第二（u）が結合せられる」も Miller (1976) と同様である．また，Miller (1976) の英訳と稲葉 (1986) の和訳は，連声規則のようにも見え，あるいは単なる語形成の情報のようにも見えるという曖昧さを残す形となっている．管見では，Bacot (1928) のみがシトゥの新解釈 9d–10a に一致するように思われる．

2.3 『三十頌』第 10 詩節 bc の旧解釈

旧解釈 9d–10a でも གཡས་སུ་ g-yas su「右に」のような正しい語形を導くことは可能であるので，そこには何ら問題はないように見える．しかし，同様の読み方を後続の 10bc にも適用するならば，次のような不都合が起こってしまう．

> གང་མིང་མཐའ་ན་བརྒྱད་པ་གནས། །དེ་ལ་གཉིས་པ་ཨུ་ཡང་སྦྱར། །[7]
>
> （旧解釈 10bc）任意の語の最終要素の位置に起こる第八〔の後置字 ར་〕，それと同じ文字に第二の〔āli である〕母音記号-u（ ུ ）もさらに結合したもの（རུ་）〔は〈行為対象〉などを表示する la 助詞である〕．

この連声規則を適用すると，例えば *ཤར་རུ་ shar ru という誤った語形が成り立ってしまうことになる．正しくは ཤར་དུ་ shar du「東に」である．旧解釈 10bc から導かれる規則が実際の用例に反することは明らかであるが，それにもかかわらず，この詩節はしばしば「後置字 -ར་ -r の後に助詞 རུ་ ru が起こる」という意味で理解されていたと言われている．ナムリン・パンチェンやシトゥによれば，「昔のほとんどの註釈者達」（’grel byed snga ma phal che ba）がこのような理解を示していたという[8]．

ただし，実際にいかなる註釈者が旧解釈 b を唱えていたかは明らかでない．ウパ・ロセル（Dbus pa blo gsal: 12 世紀），ナムカ・サンポ（Nam mkha’ bzang po: 14 世紀），シャル・ロツァーワ（Zha lu lo tsā ba: 1441–1527）などの手になる比較的早い時代に成立した『三十頌』註釈に「後置字 -ར་ -r の後に助詞 རུ་ ru が起こる」という説は見当たらない．シャル・ロツァーワの『開宝筐』（*Za ma tog*）には「後置字 -ང་ -ng，-ད་ -d，-ན་ -n，-མ་ -m，-ར་ -r，-ལ་ -l の後に助詞 དུ་ du が起こる」（nga da na ma ra la du）[9]という規則が与えられることから，少なくとも彼が旧解釈 10bc の支持者でなかったことは確かである．現段階で言えるのは，『三十頌』詩節を旧解釈 b のような仕方で理解した註釈者がいたという伝承がある，ということだけである．

---

[7]Bacot (1928: 77): “La huitiéme aprés tout mot oú elle s’accorde, affectée de la deuxième voyelle *u*”; Miller (1976: 9): “when the eighth [*r*] is placed at the end of any word, to this the second vowel *u* is added”; 稲葉 (1986: 327):「いづれか或る語の末尾に第八（ར）が置かれ，〔或はまた〕それに第二（u）をも結合せられる．」

[8]翻訳研究 [221.212.21a] および *Legs bshad snang byed* 18b6f. を参照．

[9]Laufer 1898: 580 (cf. *Legs bshad snang byed* 19a4) を参照．

2.4 ナムリン・パンチェンの代替案とその批判

いずれにせよ，ナムリン・パンチェンは旧解釈 10bc が抱える問題を深く認識し，詩節の文言に一部改変を行なった上で，次のような代替案を提示する[10].

> གང་མིང་མཐའ་ན་བརྒྱད་པ་གནས། །དེ་ལ་གཉིས་པར་ཨུ་ཡང་སྦྱར། །
>
> （旧解釈 10bc'）任意の語の最終要素の位置に起こる第八〔の後置字 ར་〕，**その後に，第二の〔前置字 ད-〕に母音記号-u（ ◌ུ ）をさらに結合したもの**（དུ་）〔は〈行為対象〉などを表示する la 助詞である〕.

詩節の改変は gnyis pa を gnyis par とした点である．ナムリン・パンチェンは gnyis pa を「第二の āli」ではなく「第二の前置字 ད- d-」と理解した上で，後置字 -ར་ -r で終わる語の後に助詞 དུ་ du が起こるという規則をここに読み込んでいる．確かにこのように解釈すれば，ཤར་དུ་ shar du「東に」などといった実際の使用例と適合する規則がここから導き出される．

しかし，シトゥは四つの理由を挙げて旧解釈 10bc' を批判する．第一に，『三十頌』に現れる一連の数字表現は後置字の番号と āli の番号を表しているにもかかわらず，この箇所でのみ gnyis pa が前置字の番号を表していると考えるのはあまりにも不自然である[11]．第二に，དུ་ du 助詞の導入規則は直後の gang ming mtha' na gsum pa gnas「任意の語の最終要素に続けて第三〔の後置字 ད་〕が起こる時」云々に現れるにもかかわらず，この箇所においてもそれを規定するのは不合理である[12]．第三に，もし旧解釈 10bc' が正しいならば，『三十頌』は རུ་ ru 助詞の導入規則を与えていないことになってしまう[13]．第四に，旧解釈 10bc' においては一連の文章の並列性（parallelism）が成り立たなくなるので，yang 助詞「も」が意味をなさなくなる．というのも，その直前では第十・第八・第二の後置字と母音記号-u（ ◌ུ ）との結合が語られていたのに対し，ここに限っては前置字 ད- d-と母音記号-u（ ◌ུ ）との結合が語られていることになるので並列性が成立せず，その場合，yang 助詞は「同一の区分基盤（khyad gzhi）における複数の区分項目（khyad chos）の並列的集約」という意味を表示していないことになるからである[14].

2.5 シトゥの『三十頌』第 10 詩節 bc 新解釈

以上の四つの理由から，シトゥは旧解釈を斥け，先に示した新解釈を提案する．すなわち，ming mtha' na を「最終要素の位置に」ではなく「最終要素の直後に」とし，gnyis pa を改変せずに「第二の āli」と読み，さらに，ここに -ར་ -r 助詞と རུ་ ru 助詞の語形成の併記を認めることで yang 助詞「さらに」にも意味を持たせた解釈である．

> གང་མིང་མཐའ་ན་བརྒྱད་པ་གནས། །དེ་ལ་གཉིས་པ་ཨུ་ཡང་སྦྱར། །

---

[10]翻訳研究 [221.212.21b] および *Legs bshad snang byed* 18b6ff. を参照．類似の解釈はナムカ・サンポの『三十頌』註釈に既に現れる．ただし，ナムカ・サンポは詩節の文言の改変をせずに，sngon 'jug lnga'i gnyis pa da dang ā li gnyis pa u yang sbyar「五つの前置字の内の第二字 ད- d-に，第二の āli である母音記号-u（ ◌ུ ）がさらに結合される」と註釈する（*Bstan pa'i sgron me* 103.1ff.）．ナムリン・パンチェンがナムカ・サンポの註釈を参照したかどうかは明らかでない．彼はここではナムカ・サンポの『三十頌』註釈には触れず，シャル・ロツァーワの『開宝筐』などを自説の根拠として挙げている．

[11]翻訳研究 [221.212.23b] を参照.

[12]翻訳研究 [221.212.23c] を参照.

[13]翻訳研究 [221.212.23d] を参照.

[14]翻訳研究 [221.212.23e] を参照.

（新解釈 10bc）任意の語の最終要素（-འ་ または後置字なし）の直後に起こる第八〔の後置字〕（-ར་），あるいはそこに第二の〔āli である〕母音記号-u（ ུ ）をさらに結合したもの（རུ་）〔は〈行為対象〉などを表示する la 助詞である〕.

これにより一連の文章の並列性が成立し，実際の用例と合致する語形成をここから導き出すことが可能となり，第二の āli の付加的導入も許容することを表した yang 助詞が意味をなすようになる．だが，先行研究は必ずしもシトゥの意を汲んだ解釈を提示するものではない．Bacot (1928: 77) は 10bc を “La huitième aprés tout mot oú elle s’accorde, affectée de la deuxième voyelle *u*”「それに見合う任意の語の後で，第二の母音を付せられた第八字は…」と訳す．gang ming mtha’ na を aprés tout mot oú elle s’accorde「それに見合う任意の語の後で」としている点ではシトゥの新解釈に近いものとなっており，これによって旧解釈 10bc が招くような問題を生じることはないが，10c の yang 助詞を無視した形となっている．Miller (1976: 9) の英訳 “when the eighth [*r*] is placed at the end of any word, to this the second vowel *u* is added” には，既に見た 9d–10a の英訳と同様の問題がある．その真意は明らかでないが，Miller (1976) の解釈は旧解釈 10bc に一致するようにも見える．稲葉 (1986: 327) の和訳「いづれか或る語の末尾に第八（ར）が置かれ，〔或はまた〕それに第二（u）をも結合せられる」では，9d–10a の和訳と同様に，「語の末尾に…置かれ」の意味する所が不明瞭である．例えば ཤར་ shar という語の末尾に後置字 -ར་ -r が置かれている状況を表しているようにも見える．しかし，10c の yang 助詞の意味を正確に捉えている点で，それは前二者と大きく異なる．10bc に -ར་ -r 助詞と རུ་ ru 助詞の語形成の併記を認める点においては，稲葉 (1986) の解釈はシトゥの新解釈 10bc に近いと言えるかもしれない．

3 結論

以上の検討により，『三十頌』第 9 詩節後半から第 11 詩節に対するシトゥの新解釈とその意義は，これまでの研究で明らかにされていなかったことが判明した．シトゥの新解釈は旧解釈に見られた問題の回避を可能にする点で優れている．ただし，一つ考慮すべきことは，シトゥの解釈によれば，『三十頌』は la 助詞（la don 助詞）の連声規則を全く与えていないということである[15]．そのため，シトゥは la 助詞の連声規則を，自身の註釈の中で補足せざるを得なかった[16]．

いずれにせよ，シトゥの註釈者としての独創性が，これらの詩節に対する彼の註解の中に現れていることは間違いない．シトゥはナムリン・パンチェンの註釈を深く読み込み，旧来の解釈に内在する諸問題を認識していた．そして，彼は『三十頌』が学者の著作作法（mkhas pa’i bstan bcos kyi lugs）[17]に則って書かれていることを強く信じる．トゥミの『三十頌』の言明が正しく意味をなすような形で，可能な限り合理的な解釈を施すことこそがシトゥの註釈上の重要な指針である．

---

[15]旧解釈に従って詩節を読んだ場合にも，la 助詞の連声規則の一部が『三十頌』において不明瞭な形で表されていることは否めない．なぜなら『三十頌』では དུ་ du 助詞の導入条件（後置字 -ང་，-ད་，-ན་，-མ་，-ར་，-ལ་で終わる語の後に起こる）が明示されないからである．『三十頌』に代わって la 助詞の連声規則を完全な形で与えるのは，ナムリン・パンチェンによって引用されるシャル・ロツァーワの『開宝筐』や，現代でもチベット文化圏の僧院や学校で学ばれるヤンチェン・ドゥプドル（Dbyangs can grub rdor: 1809–1887）の『善説樹王』（*Legs bshad ljon dbang*）などである．

[16]翻訳研究 [221.212.122.11] を参照．

[17]翻訳研究 [221.212.23b] を参照．

4　翻訳研究

[221.212]

གཉིས་པ་ལ་དོན་བཤད་པ་ལ། དངོས་དང་། མཐའ་དཔྱད་དོ། །

第二「la don 助詞の説明」に関して〔二点ある.〕[221.212.1] 本文の提示，[221.212.2] 考察.

[221.212.1]

དང་པོ་ལ། གཞུང་དོན་འགྲོལ་བ་དང་། སྦྱོར་ཚུལ་བཤད་པའོ། །

第一（本文の提示）に関して〔二点ある.〕[221.212.11] 本文の意味の解釈，[221.212.12] 使用方法についての説明.

[221.212.11]

དང་པོ་ནི།

> རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་རྣམས་ལས། །གང་མིང་མཐའ་ན་བཅུ་པ་གནས། །
> དེ་ལ་ཨཱ་ལི་གཉིས་པ་སྦྱར། །གང་མིང་མཐའ་ན་བརྒྱད་པ་གནས། །
> དེ་ལ་གཉིས་པ་ཨུ་ཡང་སྦྱར། །གང་མིང་མཐའ་ན་གསུམ་པ་གནས། །
> དེ་ལ་ཨཱ་ལི་གཉིས་པ་སྦྱར། །བཞི་པ་དགུ་པ་དངོས་ཀྱང་སྟེ། །
> ལས་དང་ཆེད་དང་རྟེན་གནས་དང་། །དེ་ཉིད་ཚེ་སྐབས་ལ་སྒྲ་ཡིན། །

ཞེས་པ་སྟེ།

第一（本文の意味の解釈）は次の通りである.

> **[i]** 任意の語の最終要素（-ས་）の直後に起こる，十の後置字の中で第十〔の文字 ས་〕，そこに第二の **āli**（ ු）を結合したもの（སུ་），**[ii]** 任意の語の最終要素（-འ་ または後置字なし）の直後に起こる第八〔の後置字〕（-ར་），あるいはそこに第二の〔**āli** である〕母音記号**-u**（ ු）をさらに結合したもの（རུ་），**[iii]** 任意の語の最終要素（-ང་，-ད་，-ན་，-མ་，-ར་，-ལ་）の直後に起こる第三〔の後置字 ད་〕，そこに第二の **āli**（ ු）を結合したもの（དུ་），**[iv]** さらに，そのままの語形で現れる第四〔の後置字 ན་〕と第九〔の後置字 ལ་〕，それらは〈行為対象〉，〈目的〉，〈場所〉，〈一体性〉，〈時間〉〔を表示する〕**la** 助詞である[18]．[9cd–11]

[221.212.111]

རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་དེ་རྣམས་ཉིད་ལས། གང་ཡང་རུང་བའི་མིང་གི་མཐའ་ན་ལ་དོན་གྱི་རྣམ་དབྱེ་སྦྱར་བའི་ཆེད་དུ་བཅུ་པ་ས་ཡིག་གནས་པ་དེ་ལ་ཨཱ་ལི་གཉིས་པ་ཨུ་ཡིག་སྦྱར་བས་སུ་ཞེས་གྲུབ་པ་དང་། དེ་བཞིན་དུ་ཚིག་བར་གཅིག་ཉིད་དུ་མིང་མཐར་བརྒྱད་པ་ར་ཡིག་སྦྱར་ཏེ་གནས་པ་ལྷག་པར་ལྟ་བུ་དང་། ཡང་ར་ཡིག་དེ་ཉིད་ཚིག་བར་ཕྱེས་པ་ལ་ཨུ་ཡིག་ཀྱང་སྦྱར་བས་རུ་ཞེས་པ་དང་། རྗེས་འཇུག་གསུམ་པ་ད་ཡིག་གནས་པར་ཨུ་ཡིག་སྦྱར་བས་དུ་དང་། རྗེས་འཇུག་བཞི་པ་

[18] 稲葉 (1986: 327) は「十添後字の中，いづれか或る語の末尾に第十（ས）が置かれ，それに母音の第二（u）が結合せられる．いづれか或る語の末尾に第八（ར）が置かれ，〔或はまた〕それに第二（u）をも結合せられる．いづれか或る語の末尾に第三（ད）が置かれ，それに母音の第二（u）が結合せられる．第四（ན）と第九（ལ）とは，しかし〔母音なく〕自體のまま〔置かれる〕．〔といふやうなそれらの場合，それらは〕業格と爲格と場所の於格と同性格と時の於格との「ལ་〔義〕の聲」である．」と訳す.

ན་དང་དགུ་པ་ལ་གཉིས་ནི་དབྱངས་ཀྱིས་མ་བརྒྱན་པའི་དངོས་པོ་ཉིད་དུ་གནས་པའང་སྟེ་དྲུག་པོ་དེ་དག་དང་། འདི་ནས་མ་གསུངས་ཀྱང་གོང་བཤད་སླར་བསྡུའི་སྐབས་ལྟར་དོན་གྱིས་ཐོབ་པའི་ཏ་ཡིག་ཨུ་ཞུགས་བཅས་ལ་དོན་བདུན་དུ་ངེས་ཤིང་།

任意の語の最終要素（-ས་）に続けて ལ་ la の意味を有する格接辞（la don gyi rnam dbye）を結合するために，上述のそれらの十の後置字の内で第十の文字 ས་ s が起こる時，そこに第二の āli である母音記号 -u（ ུ）を結合することによって སུ་ su という文字が成立する．同様に，同一の点字間（tsheg bar）の中では，単語の最終要素に〔十の後置字の内で〕第八の文字 ར་ r が結合され置かれる．例えば ལྷག་པར་ lhag par「特別に」などのようにである．さらに，点字間を分割する場合には，まさにその ར་ r という文字に母音記号-u（ ུ）を結合しても良く，それによって རུ་ ru が成立する．第三の後置字 ད་ d が置かれる場合には，母音記号-u（ ུ）を結合することによって དུ་ du〔が成立する〕．一方，第四の後置字 ན་ na と第九の後置字 ལ་ la の二者は，母音記号を伴わないそのままの語形で置かれる．また，本文には説かれていないが，上述の完結助詞の場合と同様に，意味の上から（don gyis）得られる ཏུ་ tu（「-u を内在する ཏ་ t」）をそれらの六つに加えると，la don 助詞は合計七つに確定される．

[221.212.112]

འདི་དག་ཀྱང་སྐྱབས་སུ་མཆིའོ་ལྟ་བུ་རྣམ་དབྱེ་གཉིས་པ་ལས་སུ་བྱ་བའི་དོན་ཅན་དུ་སྦྱར་ན་ལས་ཀྱི་སྒྲ་དང་། དབུལ་ཕོངས་ལ་སྦྱིན་པ་གཏོང་ལྟ་བུ་ཆེད་དུ་བྱ་བའི་དོན་ཅན་ཡིན་ན། དགོས་ཆེད་ཀྱི་སྒྲ་དང་། ཤར་ཕྱོགས་སུ་ཡོད་ལྟ་བུ་བདུན་པ་གནས་གཞིའི་དོན་ཅན་ཡིན་ན། རྟེན་གནས་ཀྱི་སྒྲ་དང་། འོད་དུ་གསལ་ལྟ་བུ་སྤྱིར་བཏང་ལས་ཀྱི་སྒྲ་ཡིན་པ་ལས། ཁྱད་པར་ལས་དང་བྱ་བ་ཐ་མི་དད་པའི་རང་གི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་སྟོན་པའི་དོན་ཅན་ཡིན་ན་དེ་ཉིད་ཀྱི་སྒྲ་དང་། ཉི་མ་ཤར་བ་ན་ཆོས་སྟོན། ལྟ་བུ་དུས་བརྗོད་པའི་བདུན་པ་ཡིན་ན་ཆེ་སྐབས་ཀྱི་སྒྲར་ཤེས་པར་བྱ་དགོས་ཤིང་། དེ་དག་ཐམས་ཅད་རྣམ་དབྱེར་སྦྱོར་བ་ན་ལ་སྒྲའི་འཇུག་པ་དང་ཕལ་ཆེར་མཐུན་པས་ལ་སྒྲ་ཞེས་ཀྱང་བརྗོད་པར་བྱ་བ་ཉིད་དོ། །ཞེས་སོ། །

これら〔七つの la don 助詞〕はいずれも [1] སྐྱབས་སུ་མཆིའོ་ skyabs **su** mchi'o「帰依する（＝避難所に赴く）」という場合のように〈行為対象〉の意味を持つ第二格接辞として使用されるならば〈行為対象〉を表示する語となり，[2] དབུལ་ཕོངས་ལ་སྦྱིན་པ་གཏོང་ dbul phongs **la** sbyin pa gtong「貧者に贈与物を与える」という場合のように〈目的〉の意味を持つ〔第四格接辞として使用される〕ならば〈目的〉を表示する語となり，[3] ཤར་ཕྱོགས་སུ་ཡོད་ shar phyogs **su** yod「東にある」という場合のように〈場所〉の意味を持つ第七格接辞として〔使用される〕ならば〈場所〉を表示する語となり，[4] འོད་དུ་གསལ་ 'od **du** gsal「光となって輝く」という場合のように，一般的には〈行為対象〉を表示する語であるにせよ，特殊的に行為対象（las）と行為（bya ba）とが無区別であって，その〔行為対象と行為〕自体の一体性を表示するものが担うべき意味を持つ〔接辞として使用される〕ならば〈一体性〉を表示する語となり，[5] ཉི་མ་ཤར་བ་ན་ཆོས་སྟོན་ nyi ma shar ba **na** chos ston「太陽が昇る時，説法する」という場合のように〈時間〉を表す第七〔格接辞として使用される〕ならば〈時間〉を表示する語となると知られるべきである．それらはいずれも格接辞として使用される場合には，la 助詞の起こる領域（'jug pa）とほとんど一致する〔領域で使用される〕ので，la 助詞と呼ぶこともまさに可能である．以上が詩節の意味である．

[221.212.12]

གཉིས་པ་ལ་སྒྲ་དང་དོན་གྱི་སྦྱོར་ཚུལ་གཉིས།

第二（使用方法についての説明）に関して二点ある．[221.212.121] 言葉の結合方法（連声規則），[221.212.122] 意味上の使用方法．

[221.212.121]

[221.212.121.1]

དང་པོ་ནི། སྐབས་འདིའི་གཞུང་གི་དངོས་བསྟན་དུ་རྣམ་དབྱེའི་རྐྱེན་གྱི་ངོ་བོ་ཙམ་ལས་དེ་དག་མིང་མཐའི་རྗེས་འཇུག་དང་སྦྱོར་ཚུལ་མི་གསལ་ཡང་ཤུགས་ཀྱིས་རྟོགས་ནུས་པའི་དབང་དུ་མཛད་པས་རྗེས་འཇུག་ག་བ་གཉིས་དང་ད་དྲག་ཅན་གྱི་མཐར་སྔར་བསྡུའི་སྐབས་སུ་བཤད་པ་བཞིན་འདིར་མ་བསྟན་ཀྱང་དོན་གྱིས་ཐོབ་པས་ཏ་ཡིག་ཨུ་ལྡན་སྦྱར་བ་དང་། ང་ད་ན་མ་ར་ལ་རྣམས་ཀྱི་རྗེས་སུ་དུ་དང་། ས་མཐར་སུ་དང་། འ་ཡིག་མཐར་ར་ཡིག་རྐྱང་པའམ་རུ་སྦྱར་བར་བྱ་ཞིང་། ལ་ན་དག་ནི་སྐབས་དང་བསྟུན་ཏེ་རྗེས་འཇུག་ཐམས་ཅད་ལ་བྱེ་བྲག་མེད་པར་ཅི་རིགས་སུ་སྦྱར་བར་བྱའོ། །

第一（言葉の結合方法［連声規則］）は次の通りである．この箇所の本文の直接表示内容（dngos bstan）としては格接辞の語形のみが明らかとなっており，それらが単語の最終要素のいかなる後置字と結合するかは明らかとなっていないが[19]，間接的に理解可能な事柄〔としてそれらの結合規則〕が考慮されている．それゆえ，後置字 -ག་ -g と -བ་ -b の二者と，再後置字 -ད་ -d を有する項目の後には ཏུ་ tu（「-u を伴う ཏ་ t」）が結合されるべきである．なぜなら完結助詞の箇所で説明したように，本文中に明示されないとしても，意味の上から得られるからである．〔後置字〕-ང་ -ng，-ད་ -d，-ན་ -n，-མ་ -m，-ར་ -r，-ལ་ -l の後には དུ་ du が結合され，〔後置字〕-ས་ -s の後には སུ་ su が結合され，〔後置字〕-འ་ -' の後には〔母音-a を持たない〕独立の -ར་ -r あるいは〔母音-u を伴った〕རུ་ ru が結合されるべきである．ལ་ la と ན་ na は適切な文脈を顧慮して，あらゆる後置字の後に区別なく任意に結合されるべきである．

[221.212.121.2]

དེ་རྣམས་ཀྱང་རིམ་པ་བཞིན་དཔེར་བརྗོད་ན། རྟག་ཏུ། རབ་ཏུ། ཀུནད་ཏུ། ཕ་རོལད་ཏུ། མཚརད་ཏུ། གང་དུ། ཐམས་ཅད་དུ། གཏན་དུ། ནམ་དུ། ཤར་དུ། དཔལ་དུ། གཡས་སུ། ལྷར། ལྷ་རུ། འོག་ལ། འོག་ན། སྟེང་ལ། སྟེང་ན། ཡོད་ལ། ཡོད་ན། འཛིནད་ལ། འཛིནད་ན། འཛེརད་ལ། འཛེརད་ན། སྩལད་ལ། སྩལད་ན། གྲུབ་ལ། གྲུབ་ན། ཁྱིམ་ལ། ཁྱིམ་ན། མཐའ་ལ། མཐའ་ན། ཤར་ལ། ཤར་ན། རབ་གསལ་ལ། རབ་གསལ་ན། གཡས་ལ། གཡས་ན། ལྟ་བུ་རྣམས་སོ། །

さらにまた，それらを順に例示すると〔以下の通りである〕．རྟག་ཏུ་ rtag tu「常に」，རབ་ཏུ་ rab tu「とても」，ཀུནད་ཏུ་ kund tu「全てにわたって」，ཕ་རོལད་ཏུ་ pha rold tu「向こう側に」，མཚརད་ཏུ་ mtshard tu「奇妙にも」，གང་དུ་ gang du「どこに」，ཐམས་ཅད་དུ་ thams cad du「全面的に」，གཏན་དུ་ gtan du「絶対に」，ནམ་དུ་ nam du「いつ」，ཤར་དུ་ shar du「東に」，དཔལ་དུ་ dpal du「美しく」，གཡས་སུ་ g-yas su「右に」，ལྷར་ lhar「神に」，ལྷ་རུ་ lha ru「神に」，འོག་ལ་ 'og la「下に」，འོག་ན་ 'og na「下に」，སྟེང་ལ་ steng la「上に」，སྟེང་ན་ steng na「上に」，ཡོད་ལ་ yod la「～があって」，ཡོད་ན་ yod na「～があるならば」，འཛིནད་ལ་ 'dzind la「つかまえて」，འཛིནད་ན་ 'dzind na「つかまえるならば」，འཛེརད་ལ་ 'dzerd la「言って」，འཛེརད་ན་ 'dzerd na「言うならば」，སྩལད་ལ་ stsald la「与えて」，སྩལད་ན་ stsald na「与えるならば」，གྲུབ་ལ་ grub la「成立して」，གྲུབ་ན་ grub na「成立するならば」，ཁྱིམ་ལ་ khyim la「家で」，ཁྱིམ་ན་ khyim na「家で」，མཐའ་ལ་ mtha' la「端で」，མཐའ་ན་ mtha' na「端で」，ཤར་ལ་ shar la「東で」，ཤར་ན་ shar na「東で」，རབ་གསལ་ལ་ rab gsal la「大きな窓で」，རབ་གསལ་ན་ rab gsal na「大きな窓で」，གཡས་ལ་ g-yas la「右で」，གཡས་ན་ g-yas na「右で」．

[221.212.121.3]

དེ་ལ་ཏ་ཡིག་ཨུ་ལྡན་སྦྱོར་བ་རྣམས་ནི་ཕོས་པོའི་མིང་མཐའ་འདྲེན་པའི་ལུགས་ཏེ་ཀློག་ཚུལ་ཟུར་མི་ཕྱིན་པ་རྣམས་ལ་ཅི་ཆ་ཡོད་ཀྱང་། རྗེས་འཇུག་ཞུགས་པའི་ཀློག་ཚུལ་ཟུར་ཕྱིན་པར་འདོན་པ་རྣམས་ལ་ནི་དེ་ཉིད་བརྗོད་བདེ་བའང་ཡིན་ནོ། །

[19] シトゥは当該詩節に la 助詞の連声規則は明示されていないと理解する．

その中で，ཏུ་ tu（「-u を伴う ཏ་ t」）の結合方法は，男性文字によって男性接辞を導くという方法[20]である．その発音方法は未習熟者には良く分からないであろうが，後置字を含めた発音方法に習熟して〔正しく〕発音できる者等にとっては，まさにそれは発音し易いものでもある．

[221.212.121.4]

དེ་བཞིན་དུ་ང་མ་འ་རྣམས་ལ་དུ་སོགས་སྦྱོར་བའི་ཚུལ་དེ་ནི་མོས་མོ་ཡིག་འདྲེན་པ་དང་། ད་མཐར་དུ་སོགས་སྦྱོར་བ་ནི་རྟགས་མཚུངས་སུ་སྦྱར་ན་བརྗོད་པ་མི་བདེ་བས་བརྗོད་བདེ་འདྲེན་པ་དང་། ལྷག་མ་ན་ར་ལ་རྣམས་ལ་དུ་སྦྱོར་བ་ནི་རྟགས་མཚུངས་དྲང་དུ་མེད་པས་བརྗོད་བདེ་འདྲེན་པའི་ལུགས་སུ་བྱས་ཤིང་། གོ་དོན་ཅུང་ཟད་སླར་བསྡུའི་སྐབས་སུ་སྨོས་པ་བཞིན་ཏེ། འཆད་འགྱུར་རྣམས་ལའང་ཅི་རིགས་སུ་སྦྱར་ཞིང་ཤེས་པར་བྱའོ། །

それと同じように〔後置字〕ང་ -ng，མ་ -m，འ་ -' の後に དུ་ du など[21]を結合する方法は，女性文字によって女性文字を導くという方法である．ད་ -d の後に続けて དུ་ -du など[22]を結合する方法は，同性結合では発音困難となるため，発音し易いものを導くという方法である[23]．それ以外の ན་ -n，ར་ -r，ལ་ -l に དུ་ du を結合する時には，発音し易いものを導くという方法が取られている[24]．なぜなら〔それらの場合においても〕同性文字を〔発音し易い形で〕導くことができないからである．理解される意味は完結助詞の箇所で幾らか説明した通りである．これから説明するものに関しても，様々に応用して〔結合方法を〕理解するべきである．

[221.212.122]

གཉིས་པ་དོན་གྱི་སྦྱོར་ཚུལ་ལ། འདིར་བསྟན་བཤད་པ་དང་། མ་བཤད་པ་ཁ་སྐོང་བ་གཉིས།

第二「意味上の使用方法」に関して二点ある．[221.212.122.1] 本書での説明事項に関する説明，[221.212.122.2] 明示されていない事項の補足．

[221.212.122.1]

[221.212.122.11]

དང་པོ་ནི། ལ་ན་གཉིས་དེ་ཉིད་ཀྱི་དོན་དུ་མི་འཇུག་ཅིང་གཞན་ལ་འཇུག་པ་དང་། སུ་ར་རུ་དུ་ཏུ་ལྔ་པོ་དེ་རྣམས་ལས་སོགས་དོན་ལྔ་ལ་མཚུངས་པར་འཇུག་པ་ཡིན་པས་དེ་རྣམས་ཇི་ལྟར་སྦྱོར་ན། བྱེད་པ་པོས་བྱ་བ་གང་ལ་བྱེད་པའི་ལས་ཀྱི་དོན་ཅན་དུ་འགྱུར་བ་རྣམ་དབྱེ་གཉིས་པ་ནི། ཤར་ཕྱོགས་སུ་འགྲོ། རྡོ་བར་གཟུགས་བརྙན་བྱེད། མཐའ་རུ་འཁྱོལ། རྒྱ་གར་དུ་འགྲོ། རྒྱབ་ཏུ་ཕྱོགས། ཕ་རོལ་ཏུ་ཕྱིན། གཟུགས་ལ་ལྟ། མདུན་ན་རྒྱུ། ཞེས་སོགས་མཐའ་ཡས་པར་བསྒྲེས་ནས་སྦྱར་བར་བྱའོ། །

第一（本書での説明事項に関する説明）は以下の通りである．ལ་ la と ན་ na の二つは〈一体性〉の

[20] ག་ -g，བ་ -b，ད་ -d は後置字・再後置字として用いられる場合には男性文字（rjes 'jug gi pho yig）である．ཏ་ -t-は基字として用いられる場合には男性文字（ming gzhi'i pho yig）である．

[21] 前述（[221.212.121.1]）のように，後置字 འ་ -' の後には -ར་ -r または རུ་ ru が起こる．

[22] 後置字 ད་ -d の後には དུ་ -du が起こり，再後置字 ད་ -d の後には ཏུ་ -tu が起こる．

[23] 後置字 ད་ -d は男性文字，基字 ད་ -d-は女性文字であるので性は一致しないが，シトゥによると，この二文字の結合から生まれる音は発音し易く（例：ཐམས་ཅད་དུ་ thams cad du），それに対して性一致の原理によって生まれる文字結合は発音しにくい（例：*ཐམས་ཅད་ཏུ་ thams cad tu）．ただし，再後置字の場合には性一致の原理による文字結合がなされる．すなわち，男性文字である再後置字 ད་ -d の後に，男性文字である基字 ཏ་ -t-が起こる．

[24] ན་ -n，ར་ -r，ལ་ -l は後置字として用いられる場合には中性文字（rjes 'jug gi ma ning gi yi ge）であるが，ད་ -d-は基字として用いられる場合には女性文字（ming gzhi'i mo yig）である．

意味では使用されず，それ以外の意味で使用される．他方，སུ་ su，ར་ -r，རུ་ ru，དུ་ du，ཏུ་ tu の五つは〈行為対象〉をはじめとする五つの意味で等しく使用される．では，それらはどのように使用されるのかと言えば，行為者がある行為対象に向けて行為をなす時，その行為対象の意味を表示するものが第二格接辞である．例：ཤར་ཕྱོགས་སུ་འགྲོ་ shar phyogs **su** ’gro「東に行く」，རྡོ་བར་གཟུགས་བརྙན་བྱེད་ rdo ba**r** gzugs brnyan byed「石に形を刻む」，མཐའ་རུ་འཁྱོལ་ mtha’ ru ’khyol「端に達する」，རྒྱ་གར་དུ་འགྲོ་ rgya gar **du** ’gro「インドに行く」，རྒྱབ་ཏུ་ཕྱོགས་ rgyab **tu** phyogs「後ろを向く」，ཕ་རོལ་ཏུ་ཕྱིན་ pha rold **tu** phyin「対岸に到達した」，གཟུགས་ལ་ལྟ་ gzugs **la** lta「色形を見る」，མདུན་ན་རྒྱུ་ mdun **na** rgyu「前に進む」．このように様々な例に応用して使用することができる．

[221.212.122.12]

དེ་བཞིན་དུ་བྱ་བ་གང་ཞིག་གིས་བྱ་བའི་ཡུལ་དེའམ། དེ་དང་འབྲེལ་བའི་ལས་ལ་ཕན་འདོགས་པར་འགྱུར་བའི་དོན་གྱིས་ཆེད་དུ་བྱ་བའི་ཡུལ་ལ་འཇུག་པ་རྣམ་དབྱེ་བཞི་པ་ནི། ཆོས་ཕྱོགས་སུ་དཀའ་བ་སྤྱད། དམན་པར་བརྩེ། བདུད་རྩི་རུ་བསྒྲུབ། ཤིང་གཅོད་དུ་སྟ་རེ་དགོས། གྲུབ་ཏུ་རེ། གར་ལྟ་བ་ལ་སྒྲོན་མེ་ཐོགས། ཤིང་ལ་ཆུ་འདྲེན། ཚོགས་ན་ནོར་འགྱེད། ལ་སོགས་པ་རྒྱ་ཆེར་སྦྱར་བར་བྱ་སྟེ། དེའི་ཆེད་དུ། དེའི་ཆེད་ལ། དེའི་དོན་དུ། དེའི་དོན་ལ། དེའི་ཕྱིར་དུ་ལྟ་བུ་དགོས་ཆེད་གསལ་བྱེད་ཀྱི་སྒྲ་དང་ལྡན་པ་རྣམས་ནི་ཆེད་ཀྱི་དོན་ཡིན་པ་སྨོས་མ་དགོས་སོ། །

次に，ある行為 x が，ある者によってなされる行為対象を扶助するか，もしくは，それと関係する行為 y を扶助するものとなる場合，そうした意味を理由として，〈目的〉という意味領域で使用されるものが第四格接辞である．例：ཆོས་ཕྱོགས་སུ་དཀའ་བ་སྤྱད་ chos phyogs **su** dka’ ba spyad「宗教的な事柄のために苦行を実践する」，དམན་པར་བརྩེ་ dman pa**r** brtse「下層民を慈しむ」，བདུད་རྩི་རུ་བསྒྲུབ་ bdud rtsi **ru** bsgrub「甘露のために実践する」，ཤིང་གཅོད་དུ་སྟ་རེ་དགོས་ shing gcod **du** sta re dgos「木の切断のために斧が必要である」，གྲུབ་ཏུ་རེ་ grub **tu** re「成就するように願う」，གར་ལྟ་བ་ལ་སྒྲོན་མེ་ཐོགས་ gar lta ba **la** sgron me thogs「舞踏を見るために灯火を手に持つ」，ཤིང་ལ་ཆུ་འདྲེན་ shing **la** chu ’dren「樹木のために水を引く」，ཚོགས་ན་ནོར་འགྱེད་ tshogs **na** nor ’gyed「集会参加者に金銭を分け与える」．このように様々に使用することができる．དེའི་ཆེད་དུ་ de’i ched **du**「そのために」，དེའི་ཆེད་ལ་ de’i ched **la**「そのために」，དེའི་དོན་དུ་ de’i don **du**「そのために」，དེའི་དོན་ལ་ de’i don **la**「そのために」，དེའི་ཕྱིར་དུ་ de’i phyir **du**「そのために」のように目的を表す語（ཆེད་ ched，དོན་ don，ཕྱིར་ phyir）を伴う諸々の〔la 助詞〕が〈目的〉を意味することは言うまでもない．

[221.212.122.13]

རྟེན་གནས་ཏེ་གང་ཞིག་གང་ལ་བརྟེན་པའམ་ཡོད་པའི་དོན་ཅན་དུ་འཇུག་པ་རྣམ་དབྱེ་བདུན་པ་ནི། ཤར་ཕྱོགས་སུ་འོད་སྣང་། མེར་མེ་ལྷ་གནས། ལྟེ་བ་རུ་རྫིང་བཅས། ལྷ་ཁང་དུ་མཆོད་རྟེན་ཡོད། ས་འོག་ཏུ་སྟོབས་ལྡན་གནས། གཟུགས་ཁམས་ན་ཚངས་པ། ལྕགས་ལ་གསེར་འབྱུག་ལྟ་བུ་སྟེ་གོ་བར་སླའོ། །

〈場所〉すなわち x が y に依拠すること，もしくは x が y に存在することを意味するものとして使用されるのが第七格接辞である．例：ཤར་ཕྱོགས་སུ་འོད་སྣང་ shar phyogs **su** ’od snang「東に光が立ち現れる」，མེར་མེ་ལྷ་གནས་ me**r** me lha gnas「火に火神が宿る」，ལྟེ་བ་རུ་རྫིང་བཅས་ lte ba **ru** rdzing bcas「中央に池がある」，ལྷ་ཁང་དུ་མཆོད་རྟེན་ཡོད་ lha khang **du** mchod rten yod「仏殿の中に仏塔がある」，ས་འོག་ཏུ་སྟོབས་ལྡན་གནས་ sa ’og **tu** stobs ldan gnas「地下世界には龍王バリカ（Balika）がいる」，གཟུགས་ཁམས་ན་ཚངས་པ་ gzugs khams **na** tshangs pa「色界には梵天がいる」，ལྕགས་ལ་གསེར་འབྱུག་ lcags **la** gser ’byug「鉄の上に金を塗る」．これらは理解し易い．

[221.212.122.14]

རྣམ་དབྱེ་གཉིས་པའི་བྱེ་བྲག་ཡུལ་གང་ཞིག་ལ་བྱ་བ་གང་ཞིག་བྱེད་པའི་ཚེ། ལས་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཀྱི་ངོ་བོར་གྱུར་པས་ལས་དང་བྱ་བ་ངོ་བོ་གཅིག་པ་ཡིན་པ་དེ་ལྟ་བུའི་ལས་ཀྱི་དོན་ལ་འཇུག་པ་ནི། མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་ཤེས། ལྷར་གསལ། སྲ་བར་བྱེད། བརྟན་པར་གྱུར། སྒྲོལ་མ་ཚེའི་ལྷ་རུ་བསྟེན། འོད་དུ་འཚེར། གཅིག་ཏུ་གྱུར། སོགས་སུ་ཤེས་པར་བྱ་སྟེ།

第二格接辞の内，ある種のものは，ある対象に向けてある行為が実行される時，その行為がまさにその行為対象の本体と等しくなることによって，行為対象と行為とが同体のものとなる，そのような〈行為対象〉の意味で使用される．〔その用例は〕མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་ཤེས་ mchog gsum la skyabs **su** shes「三宝を帰依処として知る」，ལྷར་གསལ་ lha**r** gsal「神として示現する」，སྲ་བར་བྱེད་ sra ba**r** byed「～を固くする」，བརྟན་པར་གྱུར་ brtan pa**r** gyur「～が堅強になった」，སྒྲོལ་མ་ཚེའི་ལྷ་རུ་བསྟེན་ sgrol ma tshe'i lha **ru** bsten「ターラー尊を長寿天として崇拝する」，འོད་དུ་འཚེར་ 'od **du** 'tsher「光となって輝く」，གཅིག་ཏུ་གྱུར་ gcig **tu** gyur「一つ／同じになった」などの例で知ることができる．

[221.212.122.15]

འདི་ཉིད་རྟོགས་དཀའ་བས་ཅུང་ཟད་བཤད་ན། མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་ཤེས་ཞེས་པ་ལྟ་བུ་ལ། སྤྱིར་བཏང་། སྐྱབས་སུ་ཤེས་པ་ནི་བྱ་བ། མཆོག་གསུམ་ནི་བྱ་བ་དེའི་ཡུལ་ཡིན་པས་དེ་ལ་ལས་ཀྱི་རྣམ་དབྱེ་སྦྱོར་བ་ཡིན་མོད། བྱེ་བྲག་ཕྱེ་ན་ལས་དང་བྱ་བ་ཐ་དད་མི་དད་ཀྱི་དབང་གིས་ལས་ཀྱི་རྣམ་དབྱེ་འཇུག་པའི་ཡུལ་གཙོ་ཕལ་གཉིས་ལས་གཙོ་བོ་ནི་དེ་ཉིད་དང་། ཕལ་བ་འདིར་བསྟན་དེ་ཉིད་ཀྱི་དོན་ཅན་ནི་བྱ་བ་ཉིད་ལ་ལས་དང་བྱ་བ་གཉིས་སུ་དབྱེ་བའི། ཤེས་པ་ནི་བྱ་བ། སྐྱབས་ནི་ཤེས་པར་བྱ་རྒྱུའི་ལས་ཡིན་པས་དེར་ལ་དོན་གྱི་རྣམ་དབྱེ་འཇུག་པ་དེ་ཉིད་དེ། སྐྱབས་དང་ཤེས་པ་གཉིས་སྤྱིར་ཐ་དད་ཡིན་ཡང་བྱ་བ་གཅིག་ལ་སྦྱོར་བ་འདི་འདྲའི་སྐབས་སུ་ཤེས་པ་ཉིད་སྐྱབས་ཡིན་ནོ་སྙམ་པའི་ངོ་བོར་སྐྱེས་པ་བརྗོད་པ་ཡིན་པས། ཤེས་པ་ཡུལ་ཅན་དང་སྐྱབས་ཡུལ་དུ་མི་གཟུང་བར། མཆོག་གསུམ་ཡུལ་དང་། སྐྱབས་དང་ཤེས་པ་བསྡོམས་པའི་ཚིག་ནུས་ཡུལ་ཅན་གྱི་ངོ་བོ་གཅིག་སྟོན་པ་ཡིན་ནོ། །

実にこれは難解であるから少し説明すると次の通りである．མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་ཤེས་ mchog gsum la skyabs su shes「三宝を帰依処と知る」のような例において，一般的な理解によれば སྐྱབས་སུ་ཤེས་པ་ skyabs su shes pa「帰依処と知る」は行為であり，མཆོག་གསུམ་ mchog gsum「三宝」はその行為の対象であるので，そこに行為対象を表示する格接辞が結合されるのであるけれども，厳密に分析すれば次のようになる．行為と行為対象が可分であるか不可分であるかに応じて，行為対象を表示する格接辞の適用領域には一次的適用領域と二次的適用領域がある[25]．その内，一次的領域とはまさにそれ（མཆོག་གསུམ་ mchog gsum「三宝」）のことである．二次的適用領域，すなわち目下の箇所で語られる〈一体性〉の意味を持つ格接辞と関係する領域は，その次のもの（སྐྱབས་སུ་ཤེས་ skyabs su shes「帰依処と知る」）において la don 格接辞が適用されているところのまさにそれ（སྐྱབས་ skyabs「帰依処」）である．なぜなら，まさにその行為（སྐྱབས་སུ་ཤེས་ skyabs su shes「帰依処と知る」）を行為対象と行為の二つに区分すると，ཤེས་པ་ shes pa「知る」が行為であり，སྐྱབས་ skyabs「帰依処」が知られるべき対象であるからである．ただし，སྐྱབས་ skyabs「帰依処」と ཤེས་པ་ shes pa「知る」の二者は一般的には可分であるが，ある一つの行為〔を表示する〕ために結合された今のような場合においては，まさに ཤེས་པ་ shes pa「知る行為」が，何かを སྐྱབས་ skyabs「帰依処」であると考える行為を本質とするものとして発生していること[26]を表現しているから，ཤེས་པ་ shes pa「知る」が

---

[25]行為からの分離が可能（tha dad）である行為対象は一次的適用領域（gtso bo）であり，行為からの分離が不可能（tha mi dad）である行為対象は二次的適用領域（phal ba）である．མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་ཤེས་ mchog gsum la skyabs su shes「三宝を帰依処と知る」の例では，མཆོག་གསུམ་ mchog gsum「三宝」が一次的適用領域，སྐྱབས་ skyabs「帰依処」が二次的適用領域である．

[26]སྐྱབས་སུ་ཤེས་ skyabs su shes「帰依処と知る」という表現において，知る行為と知られる内容（すなわち「A を B として知る」という場合の B 要素）は一体のものして理解される，というのがシトゥの見解である．

行為主体で སྐྱབས་ skyabs「帰依処」が行為対象であるとは理解されず，むしろ，མཆོག་གསུམ་ mchog gsum 「三宝」が行為対象であって，སྐྱབས་ skyabs「帰依処」と ཤེས་པ་ shes pa「知る」の二つは複合表現（bsdams pa’i tshig）となっており，意味的に連関する対象と関係した一体のもの（nus yul can gyi ngo bo gcig)[27]を 表現している〔と理解される〕のである．

[221.212.122.16]

དེས་ན་བྱ་ལས་ངོ་བོ་གཅིག་པའི་ཕྱིར་ལ་དོན་འདི་རིགས་ལ་གཞུང་འདིར་དེ་ཉིད་ཀྱི་སྒྲས་བསྟན་ཅིང་།　ངོ་བོ་གཅིག་ལ་བྱ་བ་དངོས་མི་འབྱུང་བས།　འཕགས་ཡུལ་པའི་བརྡ་སྤྲོད་པ་དག་གིས་ལས་ཀྱི་དོན་གཙོ་བོ་མ་ཡིན་པའམ་ཕལ་བ་ཞེས་ཟེར་རོ། །

それゆえ，行為と行為対象が同体であるので，このような類いの la don 助詞〔によって表示される意味〕を本書では〈一体性〉という術語で示している．同体になっているもの〔すなわち སྐྱབས་སུ་ཤེས་ skyabs su shes「帰依処と知る」という複合表現〕の内部では一次的な実現対象（bya ba dngos）が表示されることはないので，聖地（インド）の文法学者は〔そのような複合表現に含まれる行為対象を〕「主要でない行為対象」あるいは「二次的な行為対象」と称している[28]．

[221.212.122.17]

ལ་ན་དག་ནི་དོན་འདི་འདྲ་ལ་ནམ་ཡང་འཇུག་པ་མ་ཡིན་པས།　སྨྲ་སྒོར་ལ་ན་དག་གི་འཇུག་པ་འཆད་པའི་སྐབས་སུ་འདིར་འཇུག་པ་མ་བཤད་པ་དང་།

　　དུ་ལ་སོགས་པ་ལ་དང་མཐུན། །དེ་ཉིད་དག་ནི་ལྷག་པ་ཡིན། །

ཞེས་འབྱུང་བ་ནི་ལེགས་པར་བཤད་པའོ། །

ལ་ la と ན་ na の二つはこのような意味を表示する目的では決して使用されないので，〔スムリティジュニャーナキールティも〕『言語の門』で ལ་ la と ན་ na の使用法を説明する際に，この〔一体性という〕意味での使用には触れていない．また，〔『言語の門』の〕

> 「དུ་ du など〔の意味〕は ལ་ la のそれと一致する．〈一体性〉は〔la 助詞の意味に含まれない〕残余のものである．」[29]

---

[27]མཆོག་གསུམ་ mchog gsum という表現が「意味的に連関する対象」である．それと関係するསྐྱབས་ skyabs と ཤེས་ shes の二者は「一体のもの」として理解される．

[28]シトゥは མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་ཤེས་ mchog gsum la skyabs su shes「三宝を帰依処と知る」というチベット語表現を，サンスクリットの二重目的語構文の構造で理解している．例えば māṇavakaṁ dharmaṁ brūte「彼は少年に法を語る」という二重目的語構文において dharma「法」は，brū「語る」という行為の主要な行為対象（pradhānakarman）であり，māṇavaka「少年」は主要でない行為対象（apradhānakarman）である（川村 2017: 303）．ただし，パタンジャリは二重目的語構文の形成が許される動詞語根を八つに限定しており，その中に jñā「知る」などの認識行為を表す動詞語根は含まれていないので，仮に*ratnatrayaṁ śaraṇaṁ jānāti「彼は三宝を帰依処と知る」（＝彼は三宝という帰依処を知る）のようなサンスクリット文を想定しても，そこにおいてはシトゥが与えるような説明は成立しない．

[29]VMĀ D 281a4 からの引用．Cf. VMĀV D 300a7ff.: du dang su dang ru dang ra rnams la’i sgra dang mthun te | ’di la zhes bya ba la | ’di na zhes bya ba dang | ’di ru zhes bya ba dang | ’dir zhes bya ba dang | gang du zhes bya ba dang | dbus su zhes bya ba thams cad la’i sgra dang mthun pa sha stag go || de nyid du ston pa ni la’i don las lhag pa ste | thog dgu ’phar du phub | shing mig mangs res su btang | dbyibs gru bzhir brtsigs zhes ba lta bu la’i don las lhag par ston pa yin no ||（「du，su，ru，-r〔の意味〕は la 助詞のそれと一致する．’di **la**『ここで』という表現と同じ意味を表示するために，’di **ru**，’di**r** という表現がある．さらに，gang **du**『どこで』，dbus **su**『中央で』といった表現がある．その全て〔の助詞〕はいずれも la 助詞と〔意味的に〕一致するものに他ならない．〈一体性〉を表示する〔du 助詞などの意味〕は la 助詞の意味からは外れるものである．thog dgu ’phar **du** phub『九階の高さまで建てた』，shing mig mangs res **su** btang『木製の将棋盤で交替で遊んだ』，dbyibs gru bzhi**r** brtsigs『四角い形にして建てた』などの表現〔に含まれる du 助詞などは〕la 助詞の意味から外れて〔別の意味を〕表示するものである．」）

というのは理に叶った説明である．

[221.212.122.18]

ཚེ་སྐབས་ཏེ་རྣམ་དབྱེ་བདུན་པ་ཉིད་དུས་བརྗོད་པའི་དོན་ལ་འཇུག་པ་ནི། ཚེས་གཉིས་སུ་ཉི་མ་ཟློག །ཉི་མ་མ་ཤར་བར་ལྡང་། འཆར་ཁ་རུ་དུས་གདབ། རྒྱུན་དུ་ཁ་ཏོན་བྱེད། རྟག་ཏུ་བདེན་པར་སྨྲ། ནམ་ལངས་པ་ན་ཆོས་སྟོན། སྲོད་ལ་བདུད་བཏུལ། སོགས་མང་དུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

〔la don 助詞は〕まさに第七格の〔意味の中に含まれる〕〈時間〉（tshe skabs = dus）を表示するために使用される．ཚེས་གཉིས་སུ་ཉི་མ་ཟློག tshes gnyis **su** nyi ma zlog「二日間で太陽が逆行する」，ཉི་མ་མ་ཤར་བར་ལྡང་ nyi ma ma shar ba**r** ldang「太陽が昇らない内に起床する」，འཆར་ཁ་རུ་དུས་གདབ ’char kha **ru** dus gdab「夜明け時に会う約束をする」，རྒྱུན་དུ་ཁ་ཏོན་བྱེད rgyun **du** kha tod byed「常に読誦をしている」，རྟག་ཏུ་བདེན་པར་སྨྲ rtag **tu** bden par smra「常に正しく語る」，ནམ་ལངས་པ་ན་ཆོས་སྟོན nam langs pa **na** chos ston「夜が明ける時に説法する」などの多くの例を通じて知ることができる．

[221.212.122.19]

ཡང་སྐབས་འདིར་ལས་ཀྱི་དོན་སོགས་ལ་དགག་སྒྲ་དང་འབྲེལ་བས་ལས་ལ་སོགས་པ་སོ་སོའི་མཚན་ཉིད་དང་མི་ལྡན་པར་གྱུར་པ། གཟུགས་ལ་མི་ལྟ། སློང་བ་པོར་སྦྱིན་པར་མི་བྱ། གཟུགས་ཁམས་ན་དྲི་རོ་མེད། རྟེན་འཇིག་པར་མི་བྱེད། ལྟ་བུ་རྣམས་ཀྱི་ལ་དོན་དེ་དག་ལས་ལ་སོགས་པ་སོ་སོའི་རྣམ་དབྱེར་འགྱུར་རམ་སྙམ་ན། རིམ་པ་བཞིན། ལས་དང་། ཆེད་དུ་བྱ་བ་དང་། རྟེན་པ་དང་། དེ་ཉིད་ལས་གཞན་མིན་པའི་ལས་རྣམས་བཀག་པས། དེ་དག་གི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས་བཞག་པའི་རྣམ་དབྱེ་དེ་དག་དངོས་སུ་མི་འགྱུར་ཡང་། དགག་བྱའི་ཚིག་དེ་རྣམས་དང་འབྲེལ་བའི་དབང་ལས་རྣམ་དབྱེ་དེ་རྣམས་དང་རྗེས་སུ་མཐུན་པ་ཙམ་དུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

さらに，今の論題について〔次のような疑問がある〕．（問：）〈行為対象〉の意味〔を表示する語〕などに否定辞が結合することにより，〈行為対象〉などの各々の概念規定根拠が失われる場合がある．例えば གཟུགས་ལ་མི་ལྟ gzugs **la** mi lta「〔彼は〕色形を見ない」，སློང་བ་པོར་སྦྱིན་པར་མི་བྱ slong ba po**r** sbyin par mi bya「物乞いに布施をしないことにしよう」，གཟུགས་ཁམས་ན་དྲི་རོ་མེད gzugs khams **na** dri ro med「色界に香と味は存在しない」，རྟེན་འཇིག་པར་མི་བྱེད rten ’jig pa**r** mi byed「〔彼は〕拠り所を破壊しない」のような文における la don 助詞は，果たして〈行為対象〉などの各々の意味を持つ格接辞となり得るであろうか[30]．（答：）それらはまさしく〈行為対象〉，〈目的〉，〈場所〉，〈一体性〉に他ならない事柄をそれぞれ否定しているので，実質的にはそれらを根拠に措定される格接辞にはならないが，それらの否定辞との結合により，単にそれらの格接辞に準ずるものとなっていると理解するべきである．

[221.212.122.2]

[221.212.122.21]

གཉིས་པ་གཞུང་འདིར་དངོས་སུ་མ་བསྟན་ཀྱང་། བཤད་མ་ཐག་པའི་ལ་སྒྲ་རྣམས་ཀྱི་ནང་ནས་ན་ལ་གཉིས་པོ་དེ་ལ་དོན་གྱི་འཇུག་ཚུལ་གཞན་ཡང་ཡོད་དེ། ནའི་སྒྲ་དམིགས་ཀྱིས་དབྱེ་བའི་དོན་དུ་སྦྱར་བ། དངོས་སུ་ན། མདོར་བསྡུ་ན། ཡིན་གྲང་ན། སོགས་དང་། རྒྱུ་མཚན་གྱི་དོན་དུ་སྦྱར་བ། འདི་ཡོད་ན་འདི་འབྱུང་། མེ་ཡོད་ན་དུ་བ་འབྱུང་། ལྟ་བུ་དང་།

---

[30] 第一の例文では「見る」行為が実現されないので色形は実質的には〈行為対象〉になっていない．第二の例文では布施という行為が実行されないので，物乞いは〈目的〉（あるいは受者，二次的な行為対象，間接目的）として機能していない．第三の例文では香と味の存在が否定されるので，色界はその行為が起こる〈場所〉になっていない．第四の例文では破壊行為が実行されないので，主動詞’jig pa「破壊」と補助動詞 byed「～する」との間に〈同一性〉の関係が成立しない．

རྒྱུ་མཚན་དོན་གྱིས་བསྟན་པའི་དོན་དུ་སྦྱར་བ། འདིར་ཤིང་ཡང་མེད་ན་ཤིམ་ཤ་པ་ཇི་ལྟར་ཡོད། འདུས་མ་བྱས་ཡིན་ན་མི་རྟག་པར་རུང་ངམ། ལྟ་བུ་དང་།

第二（明示されていない事項の補足）．本書では明示的に語られていないが，直前に説明された諸々の la 助詞の内，ན་ na と ལ་ la の二つには他の意味での用法もある．[a1] na 助詞は〔第一に〕〈特定化〉の意味を表すために使用される．例：དངོས་སུ་ན་ dngos su **na**「実質的には」，མདོར་བསྡུ་ན་ mdor bsdu **na**「簡潔にまとめると」，ཡིན་གྲང་ན་ yin grang **na**「〜であるとするならば」など．[a2]〔na 助詞は〕〈根拠〉の意味を表すために使用される．例：འདི་ཡོད་ན་འདི་འབྱུང་ 'di yod **na** 'di 'byung「これがあるからこれが発生する」，མེ་ཡོད་ན་དུ་བ་འབྱུང་ me yod **na** du ba 'byung「火があるので煙が発生する」など．[a3]〔na 助詞は〕〈間接的に表示される根拠〉の意味を表すために使用される．例：འདིར་ཤིང་ཡང་མེད་ན་ཤིམ་ཤ་པ་ཇི་ལྟར་ཡོད་ 'dir shing yang med **na** shim sha pa ji ltar yod「ここには木が全くないというのに，どうしてシンシャパー樹（śiṁśapā）が存在するであろうか」，འདུས་མ་བྱས་ཡིན་ན་མི་རྟག་པར་རུང་ངམ་ 'dus ma byas yin **na** mi rtag par rung ngam「もしあるものが無為法であるならば，どうしてそれが非恒常的存在であり得ようか」など．

[221.212.122.22]

རྫ་མ་དེ་ལས་ཚིག་ཕྱི་མ་འགལ་བའམ་མ་ཡིན་པ་སོགས་སྟོན་པའི་དོན་དུ་སྦྱར་བ། འདི་སྔོན་དུ་སྡིག་པ་སྤྱོད་པ་ཞིག་ན་ད་ནི་དགེ་བ་ལ་ཡིད་འཇུག་པར་བྱེད་དོ། །འདི་སྔོན་ནོར་གྱིས་དབུལ་བ་ཡིན་ན། ད་ནི་དབུལ་པོ་མ་ཡིན་ནོ། །ཞེས་པ་ལྟ་བུ་དང་། འོས་པར་དཀའ་བ་སྟེ་མི་འོས་པའི་ཆག་གམ་ཚོད་འཛིན་པའི་སྒོ་ནས་ཚིག་དོན་ཕྱི་མ་ངེས་པར་བྱེད་པའི་དོན་དུ་སྦྱར་བ། ལྷས་བཏུད་ན་མིས་ལྟ་ཅི་སྨོས། རབ་བྱུང་རྣམས་ཁྱིམ་ལ་འཁྲེན་པར་བྱེད་ན་ཁྱིམ་པ་རྣམས་ལྟ་ཅི་སྨོས། ལྟ་བུ་དང་།

[a4]〔na 助詞は〕〈先行表現の内容 x からの後続表現の内容 y の超過・違反〉あるいは〈先行表現の内容 x と後続表現の内容 y の不一致〉などを表すために使用される．例：འདི་སྔོན་དུ་སྡིག་པ་སྤྱོད་པ་ཞིག་ན་ད་ནི་དགེ་བ་ལ་ཡིད་འཇུག་པར་བྱེད་དོ་ 'di sngon du sdig pa spyod pa zhig **na** da ni dge ba la yid 'jug par byed do「この人は以前は罪を犯す人であったが，今では善行に心を向けている」，འདི་སྔོན་ནོར་གྱིས་དབུལ་བ་ཡིན་ན་ད་ནི་དབུལ་པོ་མ་ཡིན་ནོ་ 'di sngon nor gyis dbul ba yin **na** da ni dbul po ma yin no「この人は以前は資産に乏しい者であったけれども，今ではもう貧者ではない」など．[a5]〔na 助詞は〕〈適合可能性が低い事例〉を表すために，すなわち，適合不可能性の程度や度合いを言及することによって後続表現の内容を確定するために使用される．例：ལྷས་བཏུད་ན་མིས་ལྟ་ཅི་སྨོས་ lhas btud **na** mis lta ci smos「神でさえも礼拝するのであるからには，人は言うまでもなく礼拝するはずだ」，རབ་བྱུང་རྣམས་ཁྱིམ་ལ་འཁྲེན་པར་བྱེད་ན་ཁྱིམ་པ་རྣམས་ལྟ་ཅི་སྨོས་ rab byung rnams khyim la 'khren par byed **na** khyim pa rnams lta ci smos「出家者達ですら家庭に愛着を覚えるのであれば，在家者達は言うまでもなくそうするはずだ」など．

[221.212.122.23]

འོས་པ་ནན་གྱིས་བཟུང་ནས་ཕྱི་ཚིག་ངེས་པར་བྱེད་པའི་དོན་དུ་སྦྱར་བ། ཁྱིམ་པ་ལྟ་འདོད་པ་ལ་སྲེད་ན་རབ་བྱུང་རྣམས་ཀྱང་འདོད་པ་ལ་སྲེད་པར་བྱེད་དོ། །དུད་འགྲོ་རྣམས་ལྷུན་པ་ཉིད་ན་མིའང་དེ་ལྟ་བུ་དག་མཐོང་ངོ་། །ལྟ་བུ་དང་། སློན་པའི་དོན་དུ་སྦྱར་བ། བདག་བྱང་ཆུབ་ཐོབ་ན་ཅི་མ་རུང་། སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་བདེ་བ་དང་ལྡན་ན་སྙམ་མོ། །ལྟ་བུ་དང་། ཐེ་ཚོམ་གྱི་གཞིའི་དོན་དུ་སྦྱར་བ། ས་བོན་ནི་བཏབ་ན། འདི་ལས་མྱུ་གུ་འབྱུང་ངམ་མི་འབྱུང་། ཆོས་ནི་བསྟན་ཟིན་ན་གཞན་གྱིས་རྟོགས་སམ་མ་རྟོགས། ལྟ་བུ་མང་དུ་འབྱུང་ཞིང་།

[a6]〔na 助詞は〕〈適合可能性〉を強調した後に後続表現の内容〔が同様に適合可能であること〕を確定するために使用される．例：ཁྱིམ་པ་ལྟ་འདོད་པ་ལ་སྲེད་ན་རབ་བྱུང་རྣམས་ཀྱང་འདོད་པ་ལ་སྲེད་པར་བྱེད་དོ་ khyim pa lta 'dod pa la sred **na** rab byung rnams kyang 'dod pa la sred par byed do「在家者が欲望対象を渇愛

するのは勿論のことであるが，実は出家者達も欲望対象を渇愛するのだ」，དུད་འགྲོ་རྣམས་བླུན་པ་ཉིད་ན་མིའང་དེ་ལྟ་བུ་དག་མཐོང་ངོ་ dud ’gro rnams blun pa nyid **na** mi’ang de lta bu dag mthong ngo「動物達が愚かであるのは勿論のこととして，実は人もそうしたものであることは経験的に知られている」など．[a7]〔na 助詞は〕〈祈願〉の意味を表すために使用される．例：བདག་བྱང་ཆུབ་ཐོབ་ན་ཅི་མ་རུང་ bdag byang chub thob **na** ci ma rung「私は正覚を獲得できますように」，སེམས་ཅན་ཐམས་ཅད་བདེ་བ་དང་ལྡན་ན་སྙམ་མོ་ sems can thams cad bde ba dang ldan **na** snyam mo「一切衆生が幸福であるようにと願う」など．[a8]〔na 助詞は〕〈疑問の前提条件〉の意味を表すために使用される．例：ས་བོན་ནི་བཏབ་ན་འདི་ལས་མྱུ་གུ་འབྱུང་ངམ་མི་འབྱུང་ sa bon ni btab **na** ’di las myu gu ’byung ngam mi ’byung「もし種が蒔かれたとするならば，果たしてここから芽は発生するであろうか，それとも発生しないであろうか」，ཆོས་ནི་བསྟན་ཟིན་ན་གཞན་གྱིས་རྟོགས་སམ་མ་རྟོགས་ chos ni bstan zin **na** gzhan gyis rtogs sam ma rtogs「もし既に法が説かれたとするならば，果たして他の人達は理解したのであろうか，それとも理解しなかったのであろうか」など．このように〔na 助詞には〕多くの用法がある．

[221.212.122.24]

ལའི་སྒྲའང་ཚིག་ལྷག་མ་འདྲེན་པ་ལྷག་བཅས་ཀྱི་དོན་དུ་འགྱུར་བ།　མཉམ་པར་བཞག་ལ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་སེམས།　ལག་པ་བསྙལ་ལ་ཟས་ཟ།　ལྟ་བུ་དང་།　ཚིག་སྔ་ཕྱི་མཚམས་སྦྱོར་བ་ཙམ་གྱི་དོན་དུ་འགྱུར་བ།　བདེ་བ་དང་ལྡན་ལ་གནོད་པ་མི་མངའ་བ།　གསལ་ཞིང་དྭངས་ལ་དྲི་མ་མེད་པ།　ཞེས་སོགས་རྒྱ་ཆེར་འབྱུང་བ་རྣམས་སོ། །

[b1] 一方，la 助詞は〈後続表現の導入〉すなわち〈接続〉の意味を表すために使用される．例：མཉམ་པར་བཞག་ལ་དེ་ཁོ་ཉིད་སེམས་ mnyam par bzhag **la** de kho nyid sems「入定して真実を思念する」，ལག་པ་བསྙལ་ལ་ཟས་ཟ་ lag pa bsnyal **la** zas za「手を伸ばして食べ物を食べる」など．[b2] さらに〔la 助詞は〕〈先行表現と後続表現の単純な結合〉の意味を表すために使用される．例：བདེ་བ་དང་ལྡན་ལ་གནོད་པ་མི་མངའ་བ་ bde ba dang ldan **la** gnod pa mi mnga’ ba「幸福であり危難がない」，གསལ་ཞིང་དྭངས་ལ་དྲི་མ་མེད་པ་ gsal zhing dwangs **la** dri ma med pa「明瞭清浄でけがれがない」など．このように様々に現れる〔la 助詞の用法がある〕．

[221.212.122.25]

འདིར་སྨྲ་སྒོ་ལས།

ན་ཞེས་བྱ་བའི་ཚིག་གི་དོན། །དམིགས་ཀྱིས་འབྱེད་དང་རྒྱུ་མཚན་དང་། །
རྒྱུ་མཚན་དོན་གྱིས་བསྟན་པ་དང་། །ལས་དང་ཆེད་དང་རྟེན་གནས་དང་། །
ཕྱི་ཚིག་དེ་གཞན་སོགས་སྟོན་དང་། །འོས་པར་དཀའ་བ་ཆག་འཛིན་ལས། །
ཕྱི་ཚིག་ངེས་པར་བྱེད་པ་དང་། །དེ་ལས་བཟློག་པ་ཉིད་དང་ནི། །
འགལ་བའང་མི་འགལ་སྟོན་པ་དང་། །སྨོན་དང་འདྲི་དང་ཐེ་ཚོམ་གཞི། །
ཚེ་སྐབས་རྣམས་ལ་འདི་མཐོང་ངོ་། །

ཞེས་དང་།

ལ་ནི་གཉིས་པ་བཞི་པ་དང་། །　བདུན་པ་སྟུད་དང་སྦྱོར་བ་དང་། །
སྨོན་དང་ཚད་འཛིན་གཞི་དང་ནི། །　ཚེ་སྐབས་དག་ཏུ་འདོད་པ་ཡིན། །

ཞེས་འབྱུང་བའི་དོན་འགྲེལ་པས་བཀྲལ་བ་ལས་འཐད་པའི་ཆར་འདུག་སྙམ་པ་རྣམས་བཀོད་ཀྱི།

これに関連して『言語の門』には

「na 助詞の意味は以下のものである．特定化，根拠，間接的に表示される根拠，行為対象，目的，場所，後続表現の内容との不一致などの表示，適合可能性の低さの程度への言及による後続表現の内容の確定，それの逆，対立の無効化の表示，祈願，質問・疑問の前提条件，時間．これらを表すためにこの〔na 助詞の使用〕が見られる．」[31]

「la 助詞は第二格接辞，第四格接辞，第七格接辞の意味や，複合，結合，祈願，程度の限定，場所，時間の意味を表すために〔使用される〕と認められる．」[32]

と説かれるが，〔スムリティジュニャーナキールティ自身の〕註釈に解説される〔na 助詞と la 助詞の〕意味の内で正しいと思われる部分のみを〔私はここに〕提示した．

[221.212.122.26]

ན་སྒྲ་འགལ་བའང་མི་འགལ་བར་སྟོན་པ་ལ་འཇུག་པ་ནི། དོན་དམ་དུ་དབྱེར་མེད་ན་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་དབྱེར་ཡོད་ལྟ་བུ་དཔེར་བརྗོད་པས། ཕྱི་ཚིག་དེ་གཞན་སོགས་སྟོན་དང་། །ཞེས་པའི་བསྟན་བྱ་དང་ཟློས་པར་འགྱུར་ཞིང་།

〈対立の無効化の表示〉のために使用される na 助詞は，དོན་དམ་དུ་དབྱེར་མེད་ན་ཀུན་རྫོབ་ཏུ་དབྱེར་ཡོད་ don dam du dbyer med **na** kun rdzob tu dbyer yod「究極的真理（勝義）の観点から見れば無区別であるが，遮蔽的真理（世俗）の観点から見れば有区別である」といった例文で示される[33]．それゆえ〔その意味は〕「後続表現の内容との不一致などの表示」という文言の表す内容と重なってしまうことになる．

[221.212.122.27]

འདྲི་བའི་གཞིར་འཇུག་པ་ནི། གཟུགས་གཟུགས་སུ་རུང་བ་ཡིན་ན་འདི་ཅིས་གཟུགས་སུ་རུང་ལྟ་བུ་དཔེར་བརྗོད་པས། དམིགས་ཀྱིས་འབྱེད་པའམ་ཐེ་ཚོམ་གྱི་གཞི་གང་རུང་ལས་བརྩམས་ཏེ་འདྲི་དགོས་པའི་ཕྱིར་དེ་དག་གི་དོན་ལས་ལོགས་སུ་དབྱེ་བ་དགོས་པ་མེད་པ་དང་།

〈質問の前提条件〉という意味での用法は，གཟུགས་གཟུགས་སུ་རུང་བ་ཡིན་ན་འདི་ཅིས་གཟུགས་སུ་རུང་ gzugs gzugs su rung ba yin **na** ’di cis gzugs su rung「もし物質とは壊れるものであるとするならば，どうしてこれが壊れるものであろうか」という例文によって示されている[34]．それゆえ，〈特定化〉された事柄か，もしくは〈疑問の前提条件〉のいずれかについての質問であるはずであるから，それらの意味とは別のものとして区別を立てる必要はない．

[221.212.122.28]

ལའི་སྒྲ་སྡུད་པ་དང་སྦྱོར་བ་དང་སྨོན་པ་རྣམས་ལ་འཇུག་པར་བཤད་པ་ནི་སོ་སོའི་དཔེར་བརྗོད་དང་སྦྱར་ནས་བརྟགས་ན་ལྷག་བཅས་ཉིད་དུ་གསལ་བས་སོ་སོར་དབྱེ་བ་དོན་མི་ཆེ་བ་དང་། ཚད་འཛིན་ལ་འཇུག་པར་བཤད་པ་དེ་ནི་ཚད་བརྗོད་པའི་དོན་ཅན་དུ་མི་འཇུག་པས་དེ་རྣམས་ནི་འདིར་མ་སྨོས་སོ། །

la 助詞は〈複合〉，〈結合〉，〈祈願〉の意味で使用されると説かれるが，各々の例文と合わせて検討してみると，それらが〈接続〉の意味に他ならないことは明らかであるから，別々のものとし

---

[31] VMĀ D 280b1ff. からの引用．

[32] VMĀ D 281a2f. からの引用．

[33] VMĀV D 297a7f.: ’gal ba yang mi ’gal bar ston pa ni mi mthun pa’i rgyan ston pa yin te | ’di ltar don dam par ni dbyer med na kun rdzo ba tsam du dbyer yod ces pa lta bu’o ||（「対立の無効化の表示．これは逆接的な修飾要素を示すものである．例：don dam par ni dbyer med **na** kun rdzo ba tsam du dbyer yod『究極的真理（勝義）の観点から見れば無区別であるが，単なる遮蔽的真理（世俗）の観点から見れば有区別である』など．」）

[34] VMĀV D 297b1f. を参照．

て区別することに大きな意味はない[35]．また，〈程度の限定〉の意味でも使用されると説かれるが，それは〔実際には〕程度の表示の意味を持つものとして使用されていない．それゆえ，以上挙げたものについて〔私は〕本書で言及しなかった．

[221.212.2]

གཉིས་པ་མཐའ་དཔྱད་ནི། སྐབས་འདིར་འགྲེལ་བྱེད་སྔ་ཕྱི་རྣམས་ལ་བཞེད་ཚུལ་མི་འདྲ་བ་འགའ་ཞིག་འདུག་པ་དེ་རྣམས་ཀྱི་མཐའ་དཔྱད་པས་འགྲེལ་ཚུལ་འདི་ཉིད་ལའང་ངེས་པ་རྙེད་པའི་རྒྱུར་འགྱུར་བའི་ཕྱིར། གཞན་བཞེད་ཀྱི་སྙིང་པོ་བསྡུས་ནས་ཅུང་ཟད་དཔྱད་ན།

第二「考察」．今の論題について古今の註釈者達は幾つかの異なった考え方を持っている．それらについての考察は，まさにこの〔本書で示したような〕解釈方法についてもさらなる確信を得るための要因となるので，以下では他者の考えの要点をまとめて少しばかり考察することにしよう．

[221.212.21a]

གང་མིང་མཐའ་ན་བཅུ་པ་གནས། །སོགས་ཀྱིས་བསྟན་པའི་མིང་མཐར་གནས་པའི་དོན་འགྲེལ་བྱེད་སྔ་མ་ཕལ་ཆེར་གྱིས་རྣམ་དབྱེ་སྦྱར་ཡུལ་མིང་མཐའི་རྗེས་འཇུག་དེ་ཉིད་དུ་འདོད་ཅིང་། རྒྱུ་མཚན་དེས། གང་མིང་མཐའ་ན་བརྒྱད་པ་གནས། །དེ་ལ་གཉིས་པ་ཨུ་ཡང་སྦྱར། །ཞེས་འབྱུང་བས་ར་མཐར་རུ་འཇུག་པ་མི་འདོད་བཞིན་དུ་ཁས་ལེན་པ་དང་།

（他説 1）gang ming mtha' na bcu pa gnas ||「任意の語の最終要素（-ས་）の直後に起こる，十の後置字の内で第十〔の後置字〕（ས་）云々」で言われる ming mthar gnas pa の意味について，昔のほとんどの註釈者は，格接辞の適用領域である語の最終要素であるまさにその後置字という意味であると考える[36]．そして，彼らはその同じ根拠によって，gang ming mtha' na brgyad pa gnas || de la gnyis pa u yang sbyar ||[37]という〔直後の〕言明に従い，後置字 -ར་ -r の後に རུ་ ru 助詞が使用されるということを承認している．〔実際の用例に従えば，そのようなことは〕認められないにもかかわらず[38]．

[221.212.21b]

འགའ་ཞིག་གིས། མིང་མཐར་གནས་པའི་དོན་སྔ་མ་བཞིན་དུ་འདོད་ཅིང་ར་མཐར་རུ་འཇུག་པ་མི་འདོད་པས། དེ་ལ་གཉིས་པར་ཨུ་ཡང་སྦྱར། །ཞེས་ར་ཡིག་བསྟན་ནས། གཉིས་ཞེས་པའང་སྔོན་འཇུག་གཉིས་པར་ངེས་བཟུང་སྟེ་ར་མཐར་དུ་སྦྱར་བའི་དོན་དུ་འཆད་པ་དང་། ཁ་ཅིག་གིས་རྟགས་མཚུངས་སྦྱོར་བར་རློམ་ནས་ད་མཐར་དུ་འཇུག་པར་འདོད་པ་དང་།

---

[35]VMĀV D 299b6: sdud par 'gyur ba ni lag pa bsnyal la zan bza' zhes pa lta bu'o || sbyor ba ni 'di na ni yod la 'di na ni med do zhes pa lta bu'o || smon pa ni bdag nam zhig na 'di lta bu zhig tu gyur la | gyur nas kyang zhes blta bu'o ||（「〈複合〉の例：lag pa bsnyal **la** zan bza『手を伸ばして食べ物を食べる』．〈結合〉の例：'di na ni yod **la** 'di na ni med do『ここには存在するが，ここには存在しない』．〈祈願〉の例：bdag nam zhig na 'di lta bu zhig tu gyur **la** gyur nas kyang『私はいつかこうなりますように．そしてもしこうなったら…』．」）

[36]シトゥは処格を表す助詞 na を「～の直後に」という意味で理解する．ところが，他説 1 を唱える者達は助詞 na を「～の位置に」という意味で理解する．他説 1 の解釈から導かれる規則の下でも，例えば གཡས་སུ་ g-yas su「右に」のような正しい連声を成立させることはできるが，次に説かれるように，ru 助詞の適用に関して問題が起こる．

[37]シトゥの解釈に従えば「任意の語の最終要素に続けて第八〔の後置字 ར་〕が起こる時，そこにも第二の〔āli である〕母音記号-u（ ུ）が結合して〔རུ་となる〕」と訳すことができる．一方，他説 1 によると「任意の語の最終要素の位置に第八〔の後置字 ར་〕が起こる時，それ〔と同じ ར་ という文字〕にも第二の〔āli である〕母音記号-u（ ུ）が結合した〔རུ་という助詞が起こる〕」となる．

[38]他説 1 に従うと，例えば*ཤར་རུ་ shar ru「東に」のような誤った連声が成立してしまう．正しくは ཤར་དུ་ shar du である．ナムリン・パンチェンもシトゥと同様の批判を展開し，「昔のほとんどの註釈者達」('brel [> 'grel] byed snga ma phal che ba）が唱えたとされる他説 1 を退けている（*Legs bshad snang byed* 18b6f.）．ナムリン・パンチェン自身の見解は次に現れる他説 2 に一致する．

（他説 2）ある者は ming mthar gnas pa の意味を第一の者達と同じように認めるが，〔後置字〕-ར་ -r の後に རུ་ ru 助詞が起こることは認めないので，de la gnyis pa**r** u yang sbyar「その後に第二の〔前置字 ད- d-〕に母音記号-u（ ུ）が結合した〔དུ་という助詞が起こる〕」というように ར་ -r という文字を付加して読み，さらに gnyis「二」を第二の前置字〔すなわち ད- d-〕の意味で理解し[39]，〔その文言は〕後置字 -ར་ -r の後には དུ་ du が結合するという意味であると説明する[40]．（他説 3）ある者は同性文字の適用〔が意図されている〕と誤解し，後置字 -ད་ -d の後には ཏུ་ tu が起こると考える[41]．

[221.212.21c]

ཕལ་ཆེར་གྱིས་ལ་སྒྲའི་འཇུག་ཡུལ་དེ་ཉིད་ཅེས་པ་དངོས་པོའི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་ངོས་བཟུང་བ་དང་། ཁ་ཅིག་གིས། དེ་ཉིད་ཅེས་པ་ངེས་གཟུང་གི་དོན་དུ་འདོད་པ་དང་།

（他説 4）ほとんど多くの人々は，la 助詞が適用される意味領域である de nyid「一体性」を，de kho na nyid「真実義」の意味に同定する．（他説 5）ある者は de nyid を「限定」の意味であると考える[42]．

[221.212.21d]

ལ་ལས་ལ་སྒྲ་ཟེར་བའི་རྒྱུ་མཚན་སུ་ལ་སོགས་པ་རྣམས་ལས་སོགས་དོན་ལྔ་ལ་མཚུངས་པར་འཇུག་པས་སོ་ཞེས་འདོད་ཅིང་རྒྱུ་མཚན་དེས། ལ་ན་དག་ཀྱང་དེ་ཉིད་ལ་འཇུག་པར་འདོད་པ་རྣམས་ཏེ། དེ་དག་འགའ་དང་འགས་རྗེས་ཟློས་ཀྱི་ཚུལ་དུ་སྨྲ་བར་བྱེད་ཅིང་། འགའ་དང་འགས་ཁྱད་ཆོས་སུ་ངོམ་པར་བྱེད་དོ། །

（他説 6）ある者は སུ་ su などが「la 助詞」と呼ばれる理由は，それらが〈行為対象〉などの五つの意味で等しく使用されるからであると考える[43]．そして，その理由により，ལ་ la も ན་ na も共に〈一体性〉の意味で使用されると考える．ある者達は彼らを真似するような仕方で論述を行ない，またある者達は〔それを自身の註釈の〕優れて際立った特色として誇示する．

---

[39]他説 2 によれば，gang ming mtha' na brgyad pa gnas || de la gnyis pa**r** u yang sbyar ||「任意の語の最終要素の位置に起こる第八〔の後置字 ར〕，**その後に，第二の〔前置字 ད- d-〕**に母音記号-u（ ུ）をさらに結合したもの（དུ་）は…」となる．

[40]以上はナムリン・パンチェンの見解である．*Legs bshad snang byed* 18b6ff.: 'dir 'brel (> 'grel) byed snga ma phal che bas | gang ming mtha' na brgyad pa gnas || de la gnyis pa u yang sbyar || zhes pa | ra'i mtha' ru 'byung ba'i dper brjod mdzad mod kyang gnyis par zhes pa ra yig rten bzhi'i (> gzhi'i) sgra yi ge pas nyams pa dang || don du'ang ra yig gi mtha' ru sbyar ba gang du'ang mi 'byung bas ra 'i mthar du sbyar ba 'thad pa 'grel pa rin po che'i za ma tog | mkhas pa'i rgyan | mkhas pa'i yid 'phrog rnams su bzhed pa legs bshad du mthong bas 'dir yang de'i rjes su 'brangs shing |（「ここで昔のほとんどの註釈者は gang ming mtha' na brgyad pa gnas || de la gnyis pa u yang sbyar || という文言を，後置字 -ར་ -r の後に རུ་ ru 助詞が起こる〔という意味で理解して，それについての〕例文を与える．しかし，gnyis pa**r** という〔読みが正しいにもかかわらず〕所依を表す-r 助詞が筆記者のせいで脱落している．実際の用例においても後置字 -ར་ -r の後に རུ་ ru が結合することは決してない．それゆえ，後置字 -ར་ -r の後には དུ་ du を結合するのが正しい．このことは『開宝篋』，『賢者荘厳論』，『賢者魅惑論』などの註釈で認められており，正当な説明であると考えられるので，本書でもそれに従った．」）

[41]この説は正しくない．実際には後置字 -ད་ -d の後には དུ་ du が起こる．例：ཐམས་ཅད་དུ་ thams cad **du**「全面的に」．

[42]ナムリン・パンチェンの見解は他説 5 に一致するかもしれない．なぜなら彼は de kho na nyid「真実義」という表現を以下のように分析するからである（ただし，ナムリン・パンチェンが行なっているのは，la 助詞の意味領域としての de kho na nyid についての分析ではなく，この表現についての一般的な分析である）．*Legs bshad snang byed* 19b1f.: de kho na nyid ces pa'i de ni 'das ma thag pa'am gzhan dang | kho ni tshig grogs | na dang nyid gnyis ka nges bzung gi don yin te |（「de kho na nyid という表現における de は直前の事例または他なる事例を意味し，kho は付属語であり，na と nyid は共に限定を意味する．」）

[43]タティ・リンチェン・トンドゥプは，まさしくこの理由により，la 助詞も〈一体性〉の意味を表示すると主張する（*Pra ti sum rtags* 30.3ff.）．

[221.212.22a]

དེ་ལ་འདོད་པ་སྔ་མ་དེ་ནི་ཤིན་ཏུ་འཁྲུལ་ཏེ། དེ་ལྟ་ན་རྗེས་འཇུག་ས་ར་ད་གསུམ་གྱི་མཐར་སུ་རུ་དུ་རྣམས་འཇུག་ཟེར་བ་ཉི་ཚེ་ཞིག་གཞུང་འདིས་བསྟན་པར་སོང་བས་རུ་དང་དུ་གཉིས་ཀྱི་འཇུག་ཡུལ་ད་དུང་གཞན་ཡང་ཡོད་ན་གཞུང་འདིས་མི་སྟོན་པའི་རྒྱུ་མཚན་འཐད་ལྡན་སྨྲ་དགོས་ཤིང་། རྒྱུ་མཚན་མེད་ན་ནི་གཞུང་གི་བསྟན་བྱ་མ་ཚང་བའི་སྐྱོན་དུ་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་དང་།

それらの内，最初のその主張（他説 1）は著しく誤っている．理由は以下の通りである．もしそれが正しいならば，後置字 -ས་ -s の後に སུ་ su，後置字 -ར་ -r の後に རུ་ ru，後置字 -ད་ -d の後に དུ་ du が起こるという限定的な規定（nyi tshe zhig）[44]がこの詩節で示されていることになる．それゆえ，རུ་ ru と དུ་ du の二者の使用領域がそれ以外に存在する[45]〔ということになってしまうが，もしそうである〕ならば，それらが本詩節に示されていないことに対する正当な理由を〔彼らは〕述べねばならない．もし理由がなければ，本詩節が語り得る事柄は全事例を網羅するものではないという過失が起こるはずである．

[221.212.22b]

ར་མཐར་རུ་འཇུག་པའང་ཤིན་ཏུ་བརྗོད་མི་བདེ་བས་མིང་མཐས་རྣམ་དབྱེ་འདྲེན་ཚུལ་གཞུང་འདི་དང་འགལ་བར་མ་ཟད། མེས་དབོན་གྱི་བཀའ་གཙིགས་ཞལ་བཤུས་དག་པ་རྣམས་དང་། ཁྲི་ལྡེ་སྲོང་བཙན་དུས་ཀྱི་ཞལ་བྱང་ཅན་བྲག་ལ་བརྐོས་པའི་ལྷ་དང་ཡི་གེ་ད་དུང་ཁམས་ཕྱོགས་སུ་སྣང་བ་རྣམས་དང་། རྡོ་རིང་གི་ཡི་གེ་དང་། གནའ་བོའི་གསུང་རབ་དག་པ་རྣམས་སོགས་གང་དུའང་མི་འབྱུང་བས་མི་འཐད་པར་ངེས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

また，仮に後置字 -ར་ -r の後に རུ་ ru 助詞が起こるとしても，その場合，発音が非常に困難となる．それゆえ，語末要素（例：-ར་ -r）が同形の接尾辞（例：རུ་ ru）を導くという理論は，〔実際の発音を考慮して作られた〕本書〔の理論〕と相容れない．のみならず，父祖王（mes dbon）[46]の正統なる遺言文の写しや，カム地方に現存が確認されるティデ・ソンツェン王の時代に岩に刻まれた題目付きの神像と〔そこに付せられた〕碑文群や，正統な古代文書などのいずれにおいても〔後置字-ར་ -r の後に རུ་ ru 助詞が使用される例は〕存在しないという理由からも〔その理論は〕正しくないと確定される．

[221.212.22c]

འོ་ན་ལ་དོན་འཆད་པའི་གཞུང་འདིས་སླར་བསྡུ་དང་འབྲེལ་སྒྲ་སོགས་འཆད་པའི་སྐབས་ལྟར་ཕྲད་དང་མིང་མཐའ་སྦྱོར་ཚུལ་ཞིག་སྟོན་རིགས་པ་ལ་མ་བསྟན་པར་ཐལ་བར་འགྱུར་རོ་ཞེ་ན། སྦྱོར་ཚུལ་དེ་ནི་གཞུང་འདི་ཉིད་ཀྱི་གོང་འོག་གཞན་དང་རྟགས་འཇུག་སོགས་ལས་ཀྱང་རྗེས་སུ་དཔག་ནུས་པར་དགོངས་ནས་གཞུང་ཟེར་ཡང་བའི་ཆེད་དུ་དངོས་སུ་མ་བསྟན་པར་ཟད་པས་སྐྱོན་དུ་ཅི་ཞིག་འགྱུར། དེ་བས་ཁྱེད་རང་གིས་གཞུང་འདིས་ཕྲད་དང་མིང་སྦྱོར་ཚུལ་བསྟན་པར་འདོད་པ་ཉིད་སྐྱོན་ཆེ་སྟེ། རྗེས་འཇུག་ས་ར་ད་གསུམ་པོ་ན་ལ་སྦྱོར་ཚུལ་བཤད་ཀྱི་གཞན་མ་བཤད་པ་དང་། དེ་གསུམ་བཤད་པས་སྦྱོར་ཚུལ་གཞན་གོ་བར་མི་ནུས་པའི་ཕྱིར་ཉན་པ་པོ་ལ་སླར་ཡང་ཐེ་ཚོམ་སྐྱེད་པར་མ་ཟད། གོང་དུ་སྨོས་པ་ལྟར་མཁས་པ་ལ་མ་གྲགས་ཤིང་། གཞུང་དོན་སྤྱིའི་མིང་མཐའ་འདྲེན་ཚུལ་དང་འགལ་བ་ཁས་ལེན་དགོས་པ་དེའང་ཞེ་འདོད་འདིའི་སྐྱོན་གྱིས་

---

[44]他説 1 から想定される連声規則は，一群の la 助詞の連声の全事例を網羅するものではないので「限定的」なものである．

[45]後置字 -ར་ -r の後に དུ་ du が起こる事例や，後置字 -ད་ -d の後に ཏུ་ tu が起こる事例があるが，他説 1 によれば，それらは本詩節で示されていないことになる．

[46]古代チベット王国の三人の王，ソンツェン・ガンポ（Srong btsan sgam po），ティソン・デツェン（Khri srong lde btsan），ティツク・レルパチェン（Khri gtsug ral pa can）を指す．ソンツェン・ガンポの遺言文については津曲 2010: 432f. を参照．

བསྐྱེད་པར་སྣང་བའི་ཕྱིར་རོ། །

（反論：）ならば，la don 助詞を説明するこの〔『三十頌』の〕文章は，完結助詞や属格助詞などについて説明する時と同じように，助詞と語末要素との結合法を何らかの形で示すべきであるが，それを示していないという不合理なことになってしまう．（答：）その結合法はまさに当該の文章の前後にある別の文章や『性入法』などからも推測できるはずだとお考えになって，〔トゥミは〕論書の分量の軽減のために，明示的には示さなかっただけのことである．それゆえ，一体何が過失になるであろうか．それよりもむしろ，あなたが「この文章は助詞と語〔末要素〕の結合法を述べている」と考えていることにこそ，より大きな過失がある．なぜなら，〔あなたの見解によればトゥミは〕後置字 -ས་ -s，-ར་ -r，-ད་ -d についてのみ結合法を説明している一方で他の後置字については説明していないことになるけれども〔もしそうであるならば〕その三つについての説明だけでは他の結合法は理解され得ないので，学習者にさらなる疑問を起こさせてしまうからである．また，それだけでなく，上述のように〔あなたによって想定された結合法はチベット語を熟知する〕賢者達に広く知られるものではなく，論書全体に共通に説かれる内容である語末要素の導入方法との矛盾を承認せねばならなくなるということも，この見解に含まれる過失によってもたらされると思われるからである．

[221.212.22d]

དེས་ན་མིང་མཐར་ས་ཡིག་སོགས་གནས་ཞེས་པ་དེ་མིང་མཐའ་ལ་སྔ་ནས་གནས་པའི་དོན་མིན་གྱི། དཔེར་ན། གཡས། ལྷ། ཤར་ལྟ་བུའི་མིང་མཐར་རྣམ་དབྱེའི་དོན་དུ་ས་ར་ད་རྣམས་བཀོད་དེ་གནས་པ་ལྟ་བུ་ལ་ཨུ་ཡིག་སྦྱར་རྒྱུའི་དོན་ཏེ། ལེགས་སྦྱར་ལའང་། དེ་བ་ཞེས་པར་སི་ཕྱིན་ཨི་ཕྱིས་དེཝས་ཞེས་གནས་པ་ལ་ཟེར་བ་ལྟ་བུར་ཤེས་དགོས་སོ། །

それゆえ，語の最終要素**において** ས་ という文字などが起こると〔『三十頌』に〕説かれるが，それは語の最終要素**の位置に**元よりある文字を意味するのではない．むしろ，例えば གཡས་ g-yas「右」，ལྷ་ lha「神」，ཤར་ shar「東」といった語の最終要素**の直後に**，格接辞の表示のために ས- s-，ར- r-，ད- d-が置かれ，さらにそこに置かれた要素に ུ -u が結合が結合するべきであるということを意味する[47]．サンスクリット〔文法学の論書〕でも，deva「神」に sI（主格・単数の接辞）を導入した後，I をゼロ化することにより devas「神は」（nom. sg. m.）という語形が成立するという〔ことをチベット語で表現する〕場合，gnas pa la「…が起こる時，その直後に」と言うのと同様であると理解するべきである．

[221.212.23a]

དེ་ལྟར་བསྟན་པས་འདོད་པ་གཉིས་པ་དེའི་ལོག་རྟོག་གི་རྩ་བ་སྲུན་འབྱིན་པར་ནུས་མོད། འོན་ཀྱང་གཞུང་བཅོས་ནས་དོན་མིན་དུ་བཤད་པ་ལ་བརྗོད་པར་བྱ་སྟེ། ཁྱེད་དག་གིས་རྩལ་དུ་བཏོན་པའི་བཤད་པ་དེ་ལ། གཉིས་པ་ཞེས་པ་སྔོན་འཇུག་གཉིས་པར་ངོས་འཛིན་པ་སྐབས་དང་མི་འབྲེལ་བ་དང་། གཉིས་པར་ཞེས་བཅོས་ནས་ད་ཡིག་ལ་ཨུ་སྦྱར་བའི་དོན་དུ་འདོད་པ་དགོས་པ་མེད་པ་དང་། དེ་ལྟར་འདོད་པས་གཞུང་གི་བསྟན་བྱ་གཞན་རྣམས་ཆད་པར་འགྱུར་བ་དང་། ཡང་སྒྲ་བརྗོད་པ་དོན་མེད་དུ་ཐལ་བའི་སྐྱོན་ཡང་ཡོད་དོ། །

以上のような説明によって，先の第二の考えに含まれる誤解の根源を抜き取ることができよう．とはいえ〔他説 2 を奉じる者達が〕文章を改変して本来の意味から外れた形で説明している点については次のことを言わねばならない．あなた方が力を込めて行なっているその説明には以下のような過失もある．[1]「第二」という語を前置字の第二字〔すなわち ད- d-〕を指すものとして同定す

[47] シトゥによれば，ming mtha' na という処格表現は「最終要素の位置に」ではなく，「最終要素の直後に」を意味する．

るのは文脈と整合しない．[2]〔gnyis pa を〕gnyis par「第二のものに」と改変した上で，〔当該詩節は前置〕字 ད- d-に母音記号-u（ ུ）が結合するという意味であると主張することには合目的性がない．[3] そのような主張により本文の他の記述内容が不足あるものとなってしまう．[4] yang という語の使用が無意味であることになる．

[221.212.23b]

དང་པོ་གྲུབ་སྟེ། སུམ་ཅུ་པའི་གཞུང་ཚིག་འདི་གྲས་རྣམས་ཀྱིས་རྗེས་འཇུག་དང་ཨཱ་ལིའི་གྲངས་སྟོན་པར་སྣང་བ་ལ། སྔ་ཕྱིའི་འབྲེལ་ཅིའང་མེད་པར་འདིར་བླ་རྫོལ་དུ་སྔོན་འཇུག་གི་གྲངས་སྟོན་པ་མཁས་པའི་བསྟན་བཅོས་ཀྱི་ལུགས་སུ་མི་རིགས་པའི་ཕྱིར།

第一点は成立する．なぜなら，当該の『三十頌』本文にある一連の〔数字を表す〕言葉は，後置字の番号と āli の番号を示していると思われるが，前後のつながりとは無関係に，ここで突飛な仕方で前置字の番号を示すというのは，学者の著作作法として不適切だからである．

[221.212.23c]

གཉིས་པ་གྲུབ་སྟེ། གང་མིང་མཐའ་ན་གསུམ་པ་གནས། །ཞེས་སོགས་ཁྱེད་རང་ཡང་དུ་སྒྲ་འཆད་པའི་གཞུང་དུ་འདོད་པ་གང་ཞིག་དེར་འཆད་པར་འགྱུར་བས་འདིར་བསྟན་པ་ལ་དགོས་པ་མེད་པའི་ཕྱིར། དེ་ནི་ད་མཐར་དུ་འཇུག་པའི་དོན་དང་། འདིར་ར་མཐར་དུ་འཇུག་པའི་དོན་ཡིན་པས་སོ་སོ་ལ་དགོས་པ་ཡོད་དོ་ཞེ་ན། དེའང་མི་འཐད་དེ། དེ་ལྟ་ན་ང་ན་མ་ལ་རྣམས་ཀྱི་མཐར་ཡང་དུ་སྒྲ་འཇུག་པས་དེ་རྣམས་རེ་རེ་ནས་འཆད་པའི་གཞུང་འབྱུང་བར་རིགས་པའི་ཕྱིར་ཏེ་ཅང་ཐལ་ལོ། །

第二点は成立する．なぜなら，gang ming mtha’ na gsum pa gnas「任意の語の最終要素に続けて第三〔の後置字 ད་〕が起こる時」云々という言明については，あなた自身も དུ་ du 助詞〔の導入規則〕を説明する文であると認めているからであり，しかも，そこで説明することになっているにもかかわらず，今ここで〔དུ་ du 助詞の導入規則を前もって〕示すことには合目的性がないからである．（反論：）それは後置字 -ད་ -d の後に དུ་ du 助詞が起こるという意味であるが，ここで〔意図されているのは〕後置字 -ར་ -r の後に དུ་ du 助詞が起こるという意味であるので，それぞれに合目的性がある．（答：）それも正しくない．なぜなら，後置字 -ང་ -ng，-ན་ -n，-མ་ -m，-ལ་ -l の後にも དུ་ du 助詞が起こるので，もしそれが正しければ，それらを個別的に説明する文章があってしかるべきである〔が実際にはそうではない〕から，過大適用の過失が起こる．

[221.212.23d]

གསུམ་པ་གྲུབ་སྟེ། ཁྱེད་འདོད་པ་དེ་ལྟ་ན། ལ་དོན་གཞན་རྣམས་ཀྱི་ཡ་གྱལ་ར་དང་རུའི་སྒྲ་དག་སྟོན་བྱེད་ཀྱི་གཞུང་ཆད་པར་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་ཏེ། སླར་བསྡུའི་སྐབས་སུ་རྒྱུ་མཚན་སྨྲོས་པ་བཞིན་ཏུ་ཡིག་ཨུ་ལྡན་ལྟ་བུ་འདིར་མ་བཤད་པ་སྐྱོན་དུ་མི་འགྱུར་ཡང་སྐབས་དོན་རྗེས་འཇུག་གི་ཡི་གེ་དང་སྦྱར་བའི་ལ་དོན་ཆད་ན་རྩོམ་པ་པོ་མཁས་པའི་གསུང་དུ་མི་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ། །

第三点は成立する．なぜなら，もしあなたの考えが正しいならば，la don 助詞の他の構成要素である -ར་ -r 助詞と རུ་ ru 助詞について教示する文章が欠損していることになるからである．完結助詞の箇所で既に示したような理由により，例えば ཏུ་ tu 助詞（「-u を伴う ཏ་ t」）が本書で言及されないことは過失にならないが，主題的内容である後置字と結合する la don 助詞〔のどれか一つ〕でも欠けるならば，学識ある作者の著作にはならないであろう．以上の理由から〔他説 2 は正しいとは言えない〕．

[221.212.23e]

བཞི་པ་གྲུབ་སྟེ། ཡང་ཞེས་པ་ཚིག་རྒྱན་གཉིས་དང་སྡུད་པའི་དོན་དུ་འཇུག་པ་ལས་ཚིག་རྒྱན་གྱི་དོན་མ་ཡིན་པ་ནི་རྟོགས་པར་སླ་བས་སྡུད་པའི་དོན་ལས་འོས་མེད་ཅིང་། སྡུད་པའི་དོན་ཡང་དབྱེ་གཞི་གཅིག་ལ་དབྱེ་བ་གཉིས་སམ་མང་པོ་མཐུན་པར་བསྡུ་བའམ། ཁྱད་གཞི་གཅིག་ལ་ཁྱད་ཆོས་གཉིས་སམ་མང་པོ་ལྷན་ཅིག་ཏུ་བརྗོད་དགོས་པ་ལྟ་བུར་འདོད་དགོས་པའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས། ཁྱེད་ལྟར་ན། ཨུ་ཡང་སྦྱར་ཞེས་པའི་ཡང་སྒྲ་དེས། གཞི་གང་ལ་གང་ཞིག་གང་དང་ལྷན་ཅིག་ཏུ་སྡུད་པའི་དོན་ཅིའང་མི་སྟོན་པར་འགྱུར་བས་མཁན་པོས་འདིར་ཡང་སྒྲ་གསུངས་པ་དགོས་པ་མེད་པར་ཐལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །དེས་ན་ཉེས་པ་འདི་ནི་གཞུང་འདིས་རུ་ཡིག་རྐྱང་བ་བསྟན་པར་འདོད་པ་རྣམས་ལའང་འབྱུང་བར་དོགས་སོ། །

第四点は成立する．理由は以下の通りである．yang は副助詞（tshig rgyan,「文修飾要素」）として二組の意味[48]を表示するか，または〈集合〉（sdud pa）の意味[49]を表示するために使用されるが[50]，〔当該の詩節では〕それらの内〔前二者の〕副助詞としての意味を持つものでないことが容易に理解できるので，それは〈集合〉の意味を持つとしか考えられない．では，〈集合〉の意味は何であるかと言えば，[1] 一つの区分基盤のもとに二つかそれ以上の区分項目を共通のものとして集約することか，もしくは，[2] 一つの区分基盤のもとに二つかそれ以上の区分項目を並置的に表示するといったこと[51]を〔その意味として〕認めなければならない．そのような根拠に基づくと，あなたの考えによれば，u yang sbyar「さらに加えて母音記号-u を結合した…」という文言にあるその yang 助詞は，ある一つの基体における二つ以上の要素の並列的集約という意味を全く表示していないことになるから，作者がここで yang 助詞を使用しているのは無意味であることになってしまう[52]．したがって，これと同じ過失は，目下の文言が རུ་ ru 助詞のみを示しているとする主張にも起こると疑われる[53]．

[221.212.24a]

འདོད་པ་གསུམ་པ་དེ་ཡང་འཐད་པར་མ་མཐོང་སྟེ། ད་ཡིག་རྗེས་འཇུག་ཕོ་ཡིན་པའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས་དེས་ཏུ་འདྲེན་པ་འཐད་དོ་སྙམ་པར་འདུག་ཀྱང་། དེ་ལྟ་ན། ས་ཡིག་ལའང་མཚུངས་པས། གཡས་ཏུ། སྔས་ཏུ། ལྟ་བུ་ཤིན་ཏུ་བརྗོད་མི་བདེ་ཞིང་མ་གྲགས་པ་མང་པོ་ཞིག་གསར་དུ་སྦྱར་དགོས་པར་འགྱུར་ཞིང་།

先の第三の考え（他説 3）も正しいとは思われない．理由は以下の通りである．-ད་ -d という文字が男性後置字であることを理由に，それが〔同じく男性の〕 ཏུ་ tu を導くというのは理に叶っていると〔彼らは〕考えているが，もしそうであるならば，-ས་ -s という文字の場合にも同じことが言えるので[54]，*གཡས་ཏུ་ g-yas tu「右に」や，*སྔས་ཏུ་ sngas tu「枕元に」 のように発声が非常に困難で

[48]yang 等の副助詞（kyang / yang / ’ang）は〈後続表現の内容との調和〉（tshig phyi ma mthun pa）および〈後続表現の内容との不調和〉（tshig phyi ma mi mthun pa）を表す．調和の例：gsal **yang** gsal「極めて明瞭である」．不調和の例：mdza**’ang** bslu「友好的であるのに騙す」．

[49]例：gzugs ’di ni mdzes shing ’od **kyang** ’phro 「この姿形は美しく，光も発している」．

[50]第 14 詩節 bc 句に説かれる．

[51]lhan cig tu brjod dgos pa lta bu「並置的に表示する（べきである）といったこと」．補助動詞 dgos を合理的に解釈することができない．難読箇所である．ここでは便宜的に補助動詞 dgos を省いて理解したが，なお検討を要する．

[52]他説 2 に従って詩節を読むと，一連の文章の並列性（parallelism）が成り立たなくなる．なぜなら，直前では第十・第八・第二の後置字と母音記号-u との結合が語られていたのに対し，ここに限っては前置字と母音記号-u との結合が語られていることになるからである．それゆえ，並列関係にある複数項目を結びつける yang 助詞の使用が適正でないことになる．

[53]シトゥの解釈によれば，『三十頌』第 10 詩節 bc は -ར་ -r 助詞と，それに代置可能な རུ་ ru 助詞の二つを示しており，རུ་ ru 助詞を追加する目的でトゥミは yang 助詞を用いたのだと理解できる．ところが，第 10 詩節 bc で རུ་ ru 助詞のみを示しているとするならば，yang 助詞の使用が意味をなさなくなってしまう．

[54]後置字として用いられる-ས་ -s は男性文字である．もし性一致の原理のみに基づいて助詞を後続させる

あり使用例のない多くの〔文字群〕を新たに結合せねばならないことになる.

[221.212.24b]

ས་མཐར་སུ་ཐོབ་པ་གཞུང་འདིས་དངོས་སུ་བསྟན་པའི་ལུགས་ཡིན་པས་སྐྱོན་མེད་དོ་སྙམ་པའང་མི་འཐད་དེ། དེ་ལྟ་ན་ད་མཐར་དུ་ཐོབ་པའང་གཞུང་འདིས་དངོས་བསྟན་དུ་འདོད་དགོས་པའི་ཕྱིར་ཏེ། དེ་གཉིས་རིགས་པ་མཚུངས་པའི་ཕྱིར་དང་། སྤྱིར་ཡང་ལུགས་དེ་མི་འཐད་པ་གོང་དུ་སྨོས་པ་ལྟ་བུའི་ཕྱིར་རོ། །

（反論：）-ས་ -s の直後に སུ་ su が起こるというのが目下の文章に明示される説であるから過失はない[55]．（答：）この考えも正しくない．なぜなら，もしその通りであるならば，-ད་ -d の直後に དུ་ du が起こるということも当該文章の明示的内容であると認めなければならないからである[56]．なぜなら，その両者の論理は共通であり，全体的に見てもその学説が正しくないことは先に述べた通りだからである．

[221.212.24c]

ཡང་ད་དྲག་གི་མཐར་དུ་ཐོབ་པའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས་སོ་སྙམ་ནའང་མི་འཐད་དེ། སྔར་བསྡུའི་སྐབས་སུ་བཤད་པ་བཞིན་ད་ཡིག་གི་འཇུག་ཡང་འཇུག་གི་མཐའ་གཉིས་ད་ཡིག་ཡིན་པ་ཙམ་དུ་མཚུངས་ཀྱང་ཀློག་ཚུལ་ལ་ཁྱད་པར་ཤིན་ཏུ་ཆེ་བས་ད་དྲག་གི་མཐར་ཏུ་སྒྲ་ཉིད་བརྗོད་བདེ་ཞིང་། གཅིག་ཤོས་ལ་དེ་བས་དུ་སྒྲ་ཉིད་བརྗོད་བདེ་བར་མངོན་སུམ་གྱིས་གྲུབ་ཅིང་། ཡོངས་སུ་གྲགས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

また，再後置字-ད་ -d で終わる項目の後に དུ་ du が得られるという理由により〔-ད་ -d の直後に དུ་ が起こるという解釈は成立する〕と考えるかもしれないが，以下の理由によりそれも正しくない．既に完結助詞の箇所で説明したように，後置字 -ད་ -d で終わる項目の最終要素と，再後置字 -ད་ -d で終わる項目の最終要素の二者は，共に -ད་ -d という文字である点では等しいが，発音方法については著しい違いがある．それゆえ，再後置字 -ད་ -d を有する項目の後は ཏུ་ -tu（/tū/）の音こそが発声し易いものであるが，他方の場合（後置字 -ད་ -d を有する項目の後）では，それよりも དུ་ du（/thu̱/）の音こそが発声し易いものである．このことは実際の観察例によって成立し，また広く周知されている．

[221.212.25a]

འདོད་པ་བཞི་པ་དེའང་མི་འཐད་དེ། སྤྱིར་ནའི་སྒྲ་འཆད་འགྱུར་ལྟར་དེ་ཉིད་ལ་མི་འཇུག་ཅིང་། ཁྱད་པར་ཁྱེད་ཀྱི་ལུགས་སུ་དེ་ཉིད་ཅེས་པ་དངོས་པོའི་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ལ་འདོད་པར་འདུག་པས་དེ་ལ་ནམ་ཡང་འཇུག་པ་མི་སྲིད་པའི་ཕྱིར་དང་།

先の第四の主張（他説 4）も正しくない．なぜなら，後述するように一般的に言って na 助詞は de nyid（同一性／真実義）[57]の意味を表示するために使用されないからであり[58]，また，個別的なこと

ことが許されるならば，男性基字である ཏ་ から形成される ཏུ་ tu を -ས་ -s で終わる項目の後に適用することが可能となってしまう．

[55]ここで反論者は修正見解を提示している．それによると，la don 助詞の選択は「性の一致」という条件に加えて，「文字の一致」というもう一つの条件を考慮してなされる．

[56]反論者が新たに提案する「文字の一致」という原理によれば，後置字-ད་ -d で終わる語と དུ་ du 助詞の結合が『三十頌』当該箇所で示されていることになる（実際の所，ཐམས་ཅད་དུ་ thams cad du のような文字結合は正しい連声規則に則ったものである）．しかし，そのような解釈を採用すると，最初に反論者が提案した「性一致」の原理が崩壊してしまう．

[57]他説 4 によれば de nyid は「真実義」を意味するが，シトゥ自身の見解では「一体性」を意味する．

[58]他説 4 を唱える者達は，de nyid を de kho na nyid「真実義」の意味で理解する．彼らは de kho na nyid という表現に含まれる na 助詞こそが de nyid「真実義」の意味を担っていると考えるかもしれないが，その

を考慮しても，あなたの見解で de nyid「一体性」という語が諸事物の真実義（de kho na nyid）を意味すると認められているからといって〔na 助詞が実際の場面で〕その意味で使用されることは決してあり得ないからである．

[221.212.25b]

ཁོ་ན་ཞེས་པའི་ན་ཡིག་ཁྱེད་འདོད་པའི་དེ་ཉིད་ཀྱི་དོན་ཡིན་ན་ཉིད་ཅེས་པའི་སྒྲ་ལ་མ་ལྟོས་པར་དངོས་པོའི་དེ་ཉིད་ལ་འཇུག་རིགས་པ་ལ། དེའང་མི་འཇུག་པའི་ཕྱིར་ཏེ། སྒྲ་སྒོ་ལས་ཁོ་ནའི་སྒྲ་དོན་དྲུག་ལ་འཇུག་པར་བཤད་པ་འཐད་ཅིང་དེ་རྣམས་ཐམས་ཅད་ངེས་གཟུང་གི་དོན་དུ་སྣང་བའི་ཕྱིར་དང་།

さらに，以下のような理由もある．もし仮に kho na という表現における na 助詞があなたの認めるような de nyid「真実義」の意味を持つならば，nyid という語に依存することなく，〔kho na という表現自体が〕諸事物の真実義の意味で使用されるというのが正しいことになるが，〔実際には〕それも〔真実義の意味を表示するために〕使用されることはない．なぜなら，『言語の門』で kho na という語が六つの意味で使用されると説明されている[59]のは理に叶っており，それらは全て〈限定〉の意味に相当すると思われるからである．

[221.212.25c]

དེ་ཁོ་ན་ཉིད་ཅེས་སྦྲེལ་ནས་བརྗོད་པའི་སྒྲའང་། དངོས་པོའི་དེ་ཉིད་ལ་འཇུག་པ་ནི་བདེན་མོད་ཀྱི་དེ་ལ་ངེས་ཁྱབ་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། དཔེར་ན་ལྷ་རྣམས་ཀྱི་ནང་ནས་སྲེད་མེད་བུ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མཐུ་ཆེའོ། །ལྟ་བུ་ངེས་གཟུང་ལ་འཇུག་པ་ཤིན་ཏུ་མང་བའི་ཕྱིར་ཏེ་ཞེ་འདོད་ཀྱི་དཔེར་བརྗོད་གཅིག་རྙེད་ཁུལ་དེའང་ཞེ་འདོད་དེར་མ་ངེས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

また，de kho na nyid という連結表現であれば，それが諸事物の「真実義」という意味を表すために使用されることがあるのは事実であるけれども，だからといって，その表現が必ずそれを意味するわけではない．なぜなら，例えば ལྷ་རྣམས་ཀྱི་ནང་ནས་སྲེད་མེད་བུ་དེ་ཁོ་ན་ཉིད་མཐུ་ཆེའོ་ lha rnams kyi nang nas sred med bu de kho na nyid mthu che'o「神々の中ではかのナーラーヤナ（Nārāyaṇa）こそが強力である」というように，〔de kho na nyid という連結表現が〕〈限定〉の意味を表すために使用される例は非常に多く存在するからでる．自己の意見に合う例文を一つ見つけるような恰好をしてみたところで，その意見が〔成立する〕という必然性はない．以上の理由から〔他説 4 は正しくない〕．

[221.212.25d]

དེས་ན་ཁོ་ན་ཞེས་པ་ཚིག་ཕྲད་གཅིག་ཡིན་པ་ལ་ཁོ་དང་ན་སོ་སོར་ཕྲལ་ནས་འཆད་པར་རློམ་པ་ནི། ལ་དོན་དེ་ཉིད་ལ་འཇུག་པར་བཤད་པ་དེ་རྣམ་དབྱེ་གཉིས་པ་དང་མ་འབྲེལ་བ་ཞིག་དགོས་པར་བཟུང་ནས་དཔེར་བརྗོད་བཙལ་ཀྱང་མ་རྙེད་པ་གཏིང་ཐུག་སྟེ་ཟེར་རྒྱུས་ཡོངས་པའི་རྟགས་ཟང་མར་བསྟན་པ་ཡིན་ནོ། །

それゆえ，kho na という表現が一つの助詞であるにもかかわらず，愚かにも kho と na とに分解して説明する者は，「la don 助詞は〈一体性〉の意味を表示するために使用される」というその〔『三十頌』の〕説明が，第二格接辞とは関連しないものであるはずだと理解して例文を探そうとするが見つけられずにいる人であり，限なく探しても主張の根拠は乏しいのだということの証拠をあ

考えは正しくない．

[59] VMĀ D 280b6f.: nges par gzung ba'i tshig gi don || gzhan mi ldan dang gzhan la min || lhan ba tsam du 'dzin ba dang || ma nges pa ni rnam pa gnyis || bden zhing mi slu ba nyid dang || kho na dag ni rnam pa drug ||（「kho na は六種の〈限定〉の意味を表示する語である．すなわち，*x* の *y* 以外の要素との非結合，*x* 以外の要素における *y* の非結合，*x* と *y* の結合の単純な把握，二種の不確定〔*x* の *y* 以外の要素との非結合の不確定，*x* 以外の要素における *y* の非結合の不確定〕，さらには真実性である．」）

らわに示すような人である．

[221.212.26a]

འདོད་པ་ལྔ་པ་དེའང་རིགས་པ་མ་ཡིན་ཏེ། ཁྱོད་ཉིད་ཀྱིས་བཀོད་པའི་འདི་ཐད་ཀྱི་དཔེར་བརྗོད་དུ། རྒྱ་གར་དུ་ཤེས། སྟོད་དུ་རིག །འོག་མིན་དུ་ཤེས། དཔལ་དུ་འདུག་ཅེས་འབྱུང་བ་རྣམས་ཀྱི་ལ་སྒྲ་ནི་ལས་དང་བྱ་བ་ངོ་བོ་གཅིག་པའི་ལས་ཀྱི་རྣམ་དབྱེ་ཡིན་པས་ངེད་འདོད་པའི་དེ་ཉིད་ཀྱི་དཔེར་རིགས་ཀྱང་ཁྱོད་རང་གི་ཞེན་དོན་དུ་མི་འགྱུར་ཏེ་དེ་དག་ངེས་གཟུང་གི་སྒྲ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དང་།

先の第五の主張（他説 5）も合理的ではない．理由は以下の通りである．あなた自身が提示するこれ（de nyid = 限定）に関する例文は次のものである．རྒྱ་གར་དུ་ཤེས་ rgya gar **du** shes「インドであると知る」，སྟོད་དུ་རིག་ stod **du** rig「上部であると識別する」，འོག་མིན་དུ་ཤེས་ ’og min **du** shes「色究竟天（akaniṣṭha）であると知る」，དཔལ་དུ་འདུག་ dpal **du** ’dug 「威厳ある状態にある」．しかし〔これらの例文における〕la 助詞はそれぞれ行為対象と行為とが一体のものとなっている所の〈行為対象〉を表示する格接辞であるので，私が考える〈一体性〉の例文としては相応しいが，あなたが思うような意味〔を表示する例文〕にはならない．なぜなら，それらは〈限定〉の意味を表す語ではないからである．

[221.212.26b]

ཀུན་ལ་དགའ། དེ་རུ་སྐྱིད། རྒྱབ་ཏུ་སྤྲོ། ཞེས་འབྱུང་བའི་ལ་སྒྲ་རྣམས་ནི་བྱ་བ་དང་ཐ་དད་པའི་ལས་ཀྱི་དོན་ཡིན་པས་འདིར་བསྟན་གྱི་ལས་ཀྱི་རྣམ་དབྱེ་དངོས་སུ་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་ངེས་གཟུང་མ་ཡིན་པ་དང་། རྟག་ཏུ་དགའ། ཕ་རོལ་ཏུ་འདུག་ཅེས་འབྱུང་བའི་ལ་དོན་སྔ་མ་དུས་བརྗོད་པའི་བདུན་པ་ཡིན་པས་འདིར་བསྟན་ཚེ་སྐབས་ཀྱི་སྒྲ་དང་། ཕྱི་མ་རྟེན་གནས་ཀྱི་བདུན་པ་དངོས་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དེ་དག་ལ་ངེས་གཟུང་གི་སྒྲའི་དོན་མེད་པས་སོ། །

さらに，次のような理由もある．ཀུན་ལ་དགའ་ kun **la** dga’「全てを喜ぶ」，དེ་རུ་སྐྱིད་ de **ru** skyid「それ愉快に思う」，རྒྱབ་ཏུ་སྤྲོ་ rgyab **tu** spro「後方を喜ぶ」[60]といった例文における la 助詞は，行為と一体のものではない〈行為対象〉の意味を表示するので，当該の〔『三十頌』〕に明示される〈行為対象〉を表す格接辞そのものであるから，〈限定〉の意味を表示するものではない．また，རྟག་ཏུ་དགའ་ rtag **tu** dga’「常に喜ぶ」，ཕ་རོལ་ཏུ་འདུག་ pha rol **tu** ’dug「対岸にいる」という例文の内，前者の la don 助詞は〈時間〉を表示する第七格接辞であるので，当該詩節で明示されている〈時間〉を表す語であり，後者の〔例文における la don 助詞〕は〈場所〉を表す第七格接辞そのものであるから，それらは限定詞としての意味を持つものではない．

[221.212.26c]

ཅི་སྟེ་དེ་དག་ནན་གྱིས་ངེས་གཟུང་དུ་འཛིན་ཅིང་ལ་དོན་འཇུག་ཡུལ་གྱི་དེ་ཉིད་ཀྱང་དེ་དག་ཏུ་འདོད་པ་མི་གཏོང་ན་ནི། མཁན་པོ་ཉིད་ལ་ཅོ་འདྲི་བར་ཆས་པ་སྟེ། དེ་ཉིད་གཅིག་པུ་བསྟན་པས་ཆོག་གི །ལས་དང་ཚེ་སྐབས་དང་རྟེན་གནས་རྣམས་ལ་འཇུག་ཚུལ་སོ་སོར་འཆད་པ་དགོས་པ་མེད་པར་ཐལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

もし〔他説 5 を奉じる者が〕頑なにそれらを〈限定〉の意味で理解し，さらには la don 助詞が起こる意味領域である de nyid「限定」の意味をそれら〔の例文に現れる la don 助詞〕に求める考えを捨てないならば，まさしく作者（トゥミ）に挑もうとして立ち向かっていることになる．なぜなら，〔もし他説 5 が正しいならば〕ただ唯一，de nyid「限定」のみを説示すれば十分であることになり，〈行為対象〉と〈時間〉と〈場所〉の意味での使用法をそれぞれ説明するのは無用である

[60] これら三つの例はナムリン・パンチェンの註釈で「一体性」（de kho na nyid）を表すものとして挙げられている（*Legs bshad snang byed* 20b5）．

ことになってしまうからである．

[221.212.26d]

དེས་ན་རྣམ་དབྱེ་འདི་དག་སོ་སོར་འཆད་པར་རློམ་བཞིན་དུ་དབྱེ་བྲག་མ་ཕྱེད་པ་དང་། ངེས་གཟུང་གི་སྐྲའང་ལན་དུ་མར་བསྐྱར་ཞིང་འཆད་བཞིན་དུ་དེ་མ་ཡིན་པ་ལ་དེར་འཁྲུལ་བ་སོགས་བློ་གྲོས་ཀྱི་བཞིན་རས་གསལ་བར་སྟོན་པའི་འགྲེལ་བཤད་སྣང་བྱེད་ཟེར་བ་འདི་ནི་ཤིན་ཏུ་ཡ་མཚན་པའི་གནས་སོ། །

それゆえ，これらの格接辞を個別的に説明しようと意図しながら区別を与えず，一方〔自分自身で他の〕限定詞について幾度も繰り返し説明しているにもかかわらず，それには該当しないものをそれとして混同するなど，智慧の尊顔をはっきりと見せてくれるこの『光明宝論釈』（*’Grel bshad snang byed*）[61]というものは実に驚嘆に値するものである．

[221.212.27a]

འདོད་པ་དྲུག་པ་དེའང་འཐད་པའི་ཕྱོགས་མ་ཡིན་ཏེ། དུ་ལ་སོགས་པ་ལྔའམ་དྲུག་པོ་ཐམས་ཅད་ལས་སོགས་དོན་ལྔ་ལ་ལ་ཡིག་དང་མཚུངས་པར་འཇུག་པ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཏེ། ལ་ན་གཉིས་དེ་ཉིད་ཀྱི་དོན་ལ་མི་འཇུག་པའི་ཕྱིར་ཏེ། ཁྱེད་རང་གིས་ཀྱང་དཔེར་བརྗོད་འགའ་ཞིག་བཀོད་ནས་འདི་རྣམས་ཕལ་ཆེར་ལ་ལ་ཡིག་སྦྱར་རུང་ངོ་ཞེས་སྨྲ་བ་ཙམ་ལས་དངོས་སུ་ལའི་དཔེར་བརྗོད་བཀོད་མ་ནུས་པ་དང་། ན་ཡིག་འཇུག་པའི་དཔེར་བརྗོད་ཀྱང་འཐད་ལྡན་འགོད་རྒྱུ་མ་རྙེད་འདུག་པའི་ཕྱིར་རོ། །

先の第六の主張（他説 6）も正しい立場に立つものではない．理由は以下の通りである．དུ་ du などの五つあるいは六つの全て〔の la don 助詞〕が，ལ་ la 助詞と同じく〈行為対象〉などの五つの意味を表すために使用されるということはない．なぜなら，ལ་ la と ན་ na の二つは〈一体性〉の意味を表すために使用されないからである．なぜなら，あなた自身も幾つかの例を提示した上で「これらのほとんどの〔例文〕において ལ་ la 助詞を〔代わりに〕使用しても良い」と述べるに留まっており，実際に ལ་ la を用いた例文を提示することができておらず，ན་ na 助詞が〔一体性を表すものとして〕実際に使用されている妥当な例文も見出すことができずにいるからである．

[221.212.27b]

དེའང་ཞིབ་མོར་བརྗོད་ན། འདུས་བྱས་སུ་གྲུབ། ཆོས་སུ་གནས། མི་བསླུ་བར་ངེས། ཆོས་ཉིད་དུ་གསལ། དགྲ་བཅོམ་དུ་གྲུབ། སོགས་བཀོད་པ་ནི་དེ་ཉིད་ཀྱི་དཔེར་རུང་ཡང་། དེ་དག་ལ་ལ་ཡིག་སྦྱར་དུ་མི་རུང་སྟེ། འདུས་བྱས་ལ་གྲུབ། ཆོས་ལ་གནས། མི་བསླུ་བ་ལ་ངེས། ཆོས་ཉིད་ལ་གསལ། དགྲ་བཅོམ་ལ་གྲུབ། ཅེས་སོགས་སྦྱར་བས་རྟེན་དང་བརྟེན་པའམ་བྱ་བའི་ཡུལ་དང་བྱ་བ་ཐ་དད་དུ་གསལ་བའི་ཚིག་ཏུ་འགྱུར་པའི་ཕྱིར་འགའ་ཞིག་རྟེན་གནས་དང་འགའ་ཞིག་ལས་དང་འགའ་ཞིག་དགོས་ཆེད་ཀྱི་སྒྲར་ཡང་འགྱུར་ཞིང་། བྱ་ལས་ངོ་བོ་གཅིག་པའི་དེ་ཉིད་ཀྱི་སྒྲར་མི་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ། །

さらに詳しく述べるならば以下の通りである．〔他説 6 の信奉者によって〕提示されている འདུས་བྱས་སུ་གྲུབ་ ’dus byas **su** grub「有為法として成立している」，ཆོས་སུ་གནས་ chos **su** gnas「真理として存立する」，མི་བསླུ་བར་ངེས་ mi bslu ba**r** nges「虚偽のないものであると確定している」，ཆོས་ཉིད་དུ་གསལ་ chos nyid **du** gsal「法性として光り輝く」，དགྲ་བཅོམ་དུ་གྲུབ་ dgra bcom **du** grub「阿羅漢果（arhattva）として成立している」などは〈一体性〉の例として適切であるが，それらの代わりに ལ་ la 助詞を使用することはできない．なぜなら，འདུས་བྱས་ལ་གྲུབ་ ’dus byas **la** grub「有為法の中に〜が成立して

[61] ナムリン・パンチェンの註釈の題目である．他説 5 の担い手はナムリン・パンチェンであることがここでようやく明らかにされる．

いる」，ཆོས་ལ་གནས་ chos **la** gnas「真理のもとに存立している」，མི་བསླུ་བ་ལ་ངེས་ mi bslu ba **la** nges「非虚偽性のために確定する」，ཆོས་ཉིད་ལ་གསལ་ chos nyid **la** gsal「法性の内に光り輝く」，དགྲ་བཅོམ་ལ་གྲུབ་ dgra bcom **la** grub「阿羅漢果のために〜が成立している」などのような文を仮に構成すると，それらは所依と能依，あるいは行為対象と行為を別々のものとして明示する表現になるので，あるものは〈場所〉を表す助詞であり，あるのものは〈行為対象〉を表す助詞であり，またあるものは〈目的〉を表す助詞であるから，行為と行為対象が一体化した状態たる〈一体性〉を表す助詞ではあり得ないからである．

[221.212.27c]

དེ་བཞིན་དུ་དེ་རྣམས་ལ་ན་ཡིག་ཀྱང་དེ་ཉིད་ཀྱི་དོན་དུ་སྦྱར་མི་རུང་ཞིང་། དཔེར་བརྗོད་དུ་དེ་རང་ན་འདུག་ཅེས་པ་ཙམ་བཀོད་ཀྱང་དེ་ནི་གནས་གཞིའི་དོན་ཅན་ཡིན་གྱི་དེ་ཉིད་ཀྱི་དོན་ལྟ་ཅི་སྨོས་ལས་ཀྱི་དོན་ཡང་མ་ཡིན་ནོ། །

それと同様に，それらの代わりに ན་ na 助詞を〈一体性〉の意味を表すために適用することも適切ではない．〔他説 6 の信奉者は〕例文として དེ་རང་ན་འདུག་ de rang **na** ’dug「全く同じ所にある」[62]という表現のみを提示しているが，それは〈場所〉の意味を持つものであって〈一体性〉の意味を持つものではなく，ましてや〈行為対象〉の意味を持つものでは決してない．

[221.212.27d]

འོ་ན་གཞུང་འདིར་ལ་ན་དག་དམིགས་སུ་མ་ཕྱེ་བར། ལས་དང་ཆེད་དང་རྟེན་གནས་དང་། །དེ་ཉིད་ཚེ་སྐབས་ལ་སྒྲ་ཡིན། །ཞེས་གསུངས་པ་ཅི་ཞེ་ན།

（問：）ならば，本書の当該箇所で〔トゥミが〕ལ་ la と ན་ na を特別視せずに，「それらは〈行為対象〉，〈目的〉，〈場所〉，〈一体性〉，〈時間〉〔を表示し〕，la 助詞〔と呼ばれる〕」とお説きになったのはなぜか．

[221.212.27e]

དེ་ལྟར་གསུངས་པ་ནི། ལ་སྒྲ་རྣམས་ལས་སོགས་དོན་ལྔ་པོ་ཕལ་ཆེར་ལ་མཚུངས་པར་འཇུག་པ་མང་བའི་དབང་གིས་སྤྱིར་བསྟན་པ་ཡིན་པས་སྐྱོན་མེད་ལ། ལ་སྒྲ་ཞེས་པའི་དོན་ཡང་ལས་སོགས་འཇུག་དོན་ཐམས་ཅད་ལ་ལ་ཡིག་དང་མཚུངས་པར་འཇུག་པས་མ་ཡིན་ཏེ། ཏུ་ལ་སོགས་པ་བདུན་ནམ་དུ་ལ་སོགས་པ་དྲུག་པོ་དེའི་ཐ་མ་ལ་ཡིག་ཡིན་པས་དེ་བཟུང་ནས་ཐམས་ཅད་ལ་ལ་སྒྲ་ཞེས་པའི་མིང་གིས་བཏགས་པ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

（答：）そのように〔トゥミが〕お説きになったことに過失はない，なぜなら，la 助詞は〈行為対象〉をはじめとする五つのほとんどの意味で等しく使用される場合が多いということを鑑みて，〔ལ་ la と ན་ na を特別視せずに〕一般化して述べているからである．また，la 助詞という名称の意味[63]も，〔それらの一群の助詞が〕〈行為対象〉などの全ての意味使用領域で ལ་ la 助詞と共通に使用されることによるものではない．なぜなら，その ཏུ་ tu で始まる七つ〔の助詞群〕あるいは དུ་ du で始まる六つ〔の助詞群〕の最終項目は ལ་ la 助詞であることから，それを取って全体を la 助詞と命名した〔に過ぎない〕からである．

[221.212.27f]

[62]de rang na ’dug を「そのままの状態にある」と解釈すれば na 助詞が〈一体性〉を表すとも考えられる．しかし，シトゥはこれを「全く同じ所にある」という意味でのみ理解し，そのような別解釈の可能性を考慮せずに他説を否定している．

[63]la sgra zhes pa’i don「la 助詞という名称の意味」．ここでの don「意味」は命名根拠を意味する．

དེ་ལྟར་འཐད་པའང་ཡིན་ཏེ་བརྡ་སྤྲོད་པའི་བསྟན་བཅོས་རྣམས་ན། བརྡ་ཆད་ཀྱི་སྐབས་སུ། ཙར། ཕལ། ལྟ་བུ་ཡི་གེ་བསྡུས་ནས་མིང་དུ་བྱས་པ་རྣམས་ལ་མིང་དེའི་ཁོངས་སུ་མིང་དེ་བྱ་བ་གང་གི་ཆེད་དུ་བཏགས་པའི་བྱ་བ་དེ་ལ་མི་མཁོ་བའི་ཡི་གེ་འགའ་ཞིག་ཀྱང་ཡོད་མོད་ཀྱི་མཁོ་བ་མང་བའི་ཆ་ནས་དེར་བཏགས་པ་མི་འགལ་བ་དང་། དམིགས་བསལ་ཐམས་ཅད་ལ་མ་ཁྱབ་ཀྱང་སྒྲུབ་པ་སྤྱིར་བཏང་བཤད་པ་མི་འགལ་བ་ལྟ་བུར་ངེས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

そのようにするのは理に叶ったことでもある．なぜなら〔サンスクリット〕文法学の論書で省略符（brda chad）[64]を用いる場合，caR[65]や phaL（sic.）[66]のように〔そこに含まれる〕音素を省略して形成された術語の範疇の中には，その術語の命名目的となっている働きにとって不要な音素も幾つか存在するが，必須の音素がより多いからという理由でそのように命名することに矛盾はないからである[67]．また，ある特殊事例が必ずしも全ての領域を満たさないとしても〔その事例をもって〕一般事項を説明することに矛盾はないといったことが確定しているからである．

[221.212.27g]

དེ་ལྟར་བློ་ལྡན་རྣམས་ཀྱི་བློ་གྲོས་ཀྱི་སྒོ་དབྱེ་བའི་ཕྱིར་མཐའ་དཔྱད་ཙུང་ཟད་སྤྲོས་ཀྱི། གཞན་གྱི་ནོར་བ་མཐའ་དག་ནི་དགག་པར་མི་ལང་ངོ་། །

以上，智者達の智慧という門を開くために少しばかり考察を展開したが，他の人々の誤謬〔はあまりに多いので〕それらを完全に批判し尽くすことはできない．

[221.212.28]

སྨྲས་པ།

> དོན་མིན་རྙོག་མ་མཐའ་དག་དགྲུང་བྱེད་ཅིང་། །དོན་གྱི་བཞིན་རས་ཡོངས་རྫོགས་གསལ་མཐོང་བ། །
> ནོར་བུ་ཀེ་ཏ་ཀ་ཡི་མེ་ལོང་དང་། །མཚུངས་པའི་གཏམ་འདི་བློ་ལྡན་དགའ་སྐྱེད་ཡིན། །

ཞེས་སོ། །

〔ここで次のことを〕言っておこう．

> あらゆる非真実という不浄物を濾過し，真実という尊顔の全体をはっきりと見せてくれるケータカ（ketaka）[68]の宝石よりなる鏡のようなこの論説は智者に喜びをもたらすものである．

[221.213]

---

[64] pratyāhāra「省略符」に相当する術語であると思われる．

[65] 無声無気の閉鎖音（c, ṭ, t, k, p）と無声の摩擦音（ś, ṣ, s）を指示する省略符である（Abhyankar 1961, s.v. car; Cardona 1997: 81f.）.

[66] サンスクリット文法学で用いられる省略符と思われるが不明．vaL，jhaL，śaL など，他の省略符と混同された可能性がある．

[67] 例えばパーニニ文典の規則 1.1.69: aṇudit savarṇasya cāpratyayaḥ「aṆ（母音と半母音と h 音）または指標辞 U を有する音は，接辞の場合を除いて，それ自身と同類音を指示する」における省略符 aṆは，理論上は「母音と半母音と h 音」の全てを指示し得るが，実際には半母音の内の r 音および h 音は規則 1.1.69 の適用対象としては意図されておらず，その意味においてここで言われる「不要な音素」の一例と見なすことができる（Deshpande 1975: 135–149）．パーニニ文法学の省略符については川村悠人博士（広島大学）よりご教示を受けた．

[68] 濁った水を浄化する働きを持つ宝石の名である（Krang dbyi sun [ed.], *Bod rgya tshig mdzod chen mo*, s.v. ke ta ka）．古典サンスクリット文献に現れる植物の名（V. S. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, s.v. ketaka）ではない．ここでは非真実という不純物を濾過する本書の論説がケータカに喩えられている．

གསུམ་པ་ཨི་ལྡན་གྱི་རྣམ་དབྱེ་འཆད་པ་ལ། མདོར་བསྟན་པ་དང་། རྒྱས་པར་བཤད་པ་གཉིས།

第三「-i を有する格助詞（属格助詞・能格具格助詞）の説明」に関して二点ある． [221.213.1] 概説，[221.213.2] 詳説．

[221.213.1]

[221.213.11]

དང་པོ་ནི།

> རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་ལ། །ཨི་དང་མཐུན་ལུགས་འདི་ཞེས་བྱ། །

ཞེས་པ་སྟེ།

第一（概説）は次の通りである．

> 十の後置字[69]に後続する**-i**〔を有する格助詞〕の適合法則は以下の通りである[70]． [12ab]

[221.213.12]

རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་དེ་དག་གང་རུང་རྗེས་སུ་ཞུགས་པའི་མིང་རྣམས་ལ། ཨི་ཡིག་དང་སྦྱར་བའི་རྣམ་དབྱེའི་སྒྲ་རྣམས་ཇི་ལྟར་མཐུན་པར་སྦྱོར་བའི་ལུགས་ནི་འདི་དང་འདིའོ་ཞེས་བསྟན་པར་བྱའོ། །ཞེས་སོ། །

任意の十の後置字を最終要素として持つ単語の後に，-i という音素と結びついた格助詞（属格助詞・能格具格助詞）がどのように適合した形で結び付けられるか，その法則について以下ではこれとこれであると説示することにしよう．以上が本文の意味である．

[221.213.2]

གཉིས་པ་ལ། འབྲེལ་སྒྲ་བཤད་པ་དང་། བྱེད་པ་པོའི་སྒྲ་བཤད་པའོ། །

第二（詳説）に関して〔二点ある〕．[221.213.21] 属格助詞に関する説明，[221.213.22] 能格具格助詞[71]に関する説明．

[221.213.21]

[221.213.211]

དང་པོ་ནི།

> དང་པོ་གཉིས་ལ་དང་པོ་མཐུན། །གསུམ་ལྔ་བཅུ་ལ་ཀྱི་དང་སྦྱར། །
> བདུན་པ་ཉིད་ལ་བདུན་པ་སྟེ། །ལྷག་མ་རྣམས་ལ་གྱི་སྦྱར་བ། །
> དེ་དག་ཨི་སྦྱར་འབྲེལ་བའི་ས། །

ཞེས་གསུངས་ཏེ།

---

[69]-ག་ -g，-ང་ -ng，-ད་ -d，-ན་ -n，-བ་ -b，-མ་ -m，-འ་ -’，-ར་ -r，-ལ་ -l，-ས་ -s の十文字である．

[70]稲葉 (1986: 330) は「十添後字〔の後〕に，i〔を有する助辭が，どのやうに〕相應し〔結合するかといふ〕法則は，これであると說くであろう．」と訳す．

[71]gis 等の助詞は能格（ergative）と具格（instrumental）の両機能を兼ね備える．本研究では能格と具格を区別して呼称し，それらの総称として「能格具格」という名称を用いる．

第一（属格助詞）については次のように説かれる．

> 最初の二つ（-ག་，-ང་）の後には第一（ག་）こそが適合する．第三（-ད་）と第五（-བ་）と第十（-ས་）の後には ཀྱ་ が結合される．まさに第七（-འ་）の後には第七（འ་）が結合され，その他〔の後置字〕(-ན་，-མ་，-ར་，-ལ་）の後には གྱ་ が結合される．それら〔ག་，ཀྱ་，འ་，ཡ་，གྱ་〕に母音記号 ི -i が結合したものは〈関係の拠り所〉である[72]．[12cd–13abc]

[221.213.212]

རྗེས་འཇུག་བཅུའི་དང་པོ་ག་དང་ང་གཉིས་གང་རུང་རྗེས་སུ་ཞུགས་པའི་མིང་རྣམས་ལ་ནི། རྗེས་འཇུག་དང་པོ་ག་ཉིད་མཐུན་ཞིང་། དེ་བཞིན་དུ་རྗེས་འཇུག་གསུམ་པ་ད། ལྔ་པ་བ། བཅུ་པ་ས་རྣམས་རྗེས་སུ་ཞུགས་པ་ལ་ཀྱ་དང་སྦྱར་བ་དང་བདུན་པ་འ་ཡིག་གི་མཐའ་ཅན་རྣམས་ལ་དངོས་སུ་འ་ཡིག་ཡོད་དམ་མེད་ཀྱང་རུང་བདུན་པ་འ་ཉིད་སྦྱར་བ་དང་།

十の後置字の内，最初の二つのもの，すなわち -ག་ -g と第二 -ང་ -ng のいずれかを最終要素として持つ単語の後には第一の後置字 ག་ g-こそが適合する．そして，第三の後置字 -ད་ -d と第五の後置字 -བ་ -b と第十の後置字 -ས་ -s を最終要素として持つ単語の後には ཀྱ་ ky-が結合される．第七の後置字 -འ་ -’ を最終要素として持つ単語の後には，འ་ ’a という文字が実際にあるか否かにかかわらず，まさに第七の後置字 འ་ ’(a)-が結合される．

[221.213.213]

འདིར་རྗེས་འཇུག་གི་ཡི་གེའི་བྱ་བ་གཙོ་བོར་བསྟན་པས་དངོས་སུ་མི་འབྱུང་ཡང་འ་ཡིག་གི་མཐར་ཀང་པ་ཁ་སྐོང་དགོས་པའི་ཚེ་ཡ་ཡིག་སྦྱར་བ་དང་། དེ་དག་ལས་གཞན་ལྷག་མ་ན་མ་ར་ལ་བཞི་པོའི་མཐའ་ཅན་རྣམས་ལ་ནི་གྱ་ཉིད་དང་སྦྱར་བ་མཐུན་པ་བཅས།

本書では主に後置字の機能が説示されるため明示されていないものの，〔韻文〕詩脚の音節数を補う必要がある時には，後置字 -འ་ -’(a) を最終要素として持つ単語の後に ཡ་ y- という文字が結合される．その他に，-ན་ -n，-མ་ -m，-ར་ -r，-ལ་ -l の四つのいずれかを最終要素として持つ単語の後には，まさに གྱ་ gy-が結合される．以上が適合法則である．

[221.213.214]

དེ་དག་ཐམས་ཅད་ལ་རིམ་པ་བཞིན་ཨི་ཡིག་སྟེ་གི་གུ་སྦྱར་བས། གི ཀྱི འི། ཡི། གྱི་རྣམས་སུ་གྲུབ་པ་དེ་རྣམས་གང་ཞིག་གང་དང་སྒྲ་མཐུན་པའི་མིང་མཐའ་སོ་སོ་དང་སྦྱར་བས། བདག་གི །གང་གི །ཐམས་ཅད་ཀྱི། རབ་ཀྱི། ཕྱོགས་ཀྱི། དེའི། དེ་ཡི། གཏན་གྱི། ལམ་གྱི། གསེར་གྱི། དཔལ་གྱི་སོགས་སུ་འགྱུར་ཏེ་དེ་དག་ནི་གཞུང་གཞན་དུ་རྣམ་དབྱེ་དྲུག་པ་ཞེས་འབྱུང་བ་རྟེན་དང་བརྟེན་པའམ་ཡན་ལག་དང་ཡན་ལག་ཅན་སོགས་མིང་དོན་ཕན་ཚུན་འབྲེལ་བ་བརྗོད་པའི་དོན་ཅན་གྱི་སྒྲ་ཡིན་པས་འབྲེལ་བའི་ས་ཞེས་བྱའོ། །ཞེས་པའོ། །

それら〔ག་，ཀྱ་，འ་，ཡ་，གྱ་〕の全てにそれぞれキク記号 ི -i が結合されることによって〔それらの文字群は〕གི་ gi，ཀྱི་ kyi，འི་ ’i，ཡི་ yi，གྱི་ gyi という形で成立する．そのいずれか〔の文字〕が〔自身の音と〕対応した音を有する最終要素で終わる単語と結合することによって以下のような表現となる．བདག་གི་ bdag **gi**「私の」，གང་གི་ gang **gi**「何の」，ཐམས་ཅད་ཀྱི་ thams cad **kyi**「一切の」，རབ་ཀྱི་ rab **kyi**「上位の」，ཕྱོགས་ཀྱི་ phyogs **kyi**「諸方の」，དེའི་ de**’i**「それの」，དེ་ཡི་ de **yi**「それの」，གཏན་གྱི་ gtan **gyi**「恒久の」，ལམ་གྱི་ lam **gyi**「道の」，གསེར་གྱི་ gser **gyi**「金の」，དཔལ་གྱི་ dpal **gyi**「栄光の」

[72] 稲葉 (1986: 330f.) は「第一（ག）と第二（ང）〔の後〕には第一（ག）が相應せられ，第三（ད）と第五（བ）と第十（ས）〔の後〕には ཀྱ が結合せられ，第七（འ）〔の後〕には第七（འ་）が〔結合せられ〕，その他（ན，མ，ར，ལ）〔の後〕には གྱ が結合せられ，それらに i が結合せられたもの，〔それは〕「關係」のあり方〔と名づけられる〕.」と訳す．

など．それらは他の論書では「第六格接辞」とも言われるものであり，所依と能依や，部分と全体などといった，単語同士の関係や対象同士の関係を表示するための語であるから〈関係の拠り所〉と呼ばれる．以上が本文の意味である．

[221.213.215]

འདིར་ཡིག་རྙིང་དག་པ་རྣམས་སུ་ད་དྲག་ཅན་གྱིས་ཀྱི་ཉིད་དྲངས་པ་མཐོང་མོད་ཀྱི་དེང་སང་ད་དྲག་མི་མཛད་པས་ཕལ་ཆེར་གྱི་ཉིད་སྦྱོར་བར་སྣང་ཡང་ཕྲད་གཞན་དང་བསྟུན་ན་ཀྱི་རང་འདྲེན་པ་བརྗོད་བདེ་ཞིང་ལེགས་པར་སེམས་པས། ཀུནད་ཀྱི། རབ་འབྱོརད་ཀྱི། བཀའ་སྩལད་ཀྱི། སོགས་སུ་སྦྱར་བར་བྱའོ། །

これに関して〔補足すると〕正しく書かれた古代の文献群の中には，再後置字 -ད་ -d を有する単語が ཀྱི་ kyi を導いている例が見られるのに対し，昨今では再後置字 -ད་ -d が用いられないため，多くの場合では実に གྱི་ gyi が結合されるように見受けられる．しかしながら，他の助詞〔の結合法則〕に適合させるならば，まさに ཀྱི་ kyi を〔再後置字 -ད་ -d を有する単語の後に〕導く方が発声し易いものとなり，妥当であると考えられる．したがって，ཀུནད་ཀྱི་ kun**d** **k**yi「一切の」，རབ་འབྱོརད་ཀྱི་ rab ’byor**d** **kyi**「スブーティ（須菩提）の」，བཀའ་སྩལད་ཀྱི་ bka’ stsal**d** **kyi**「勅命の」などのように〔ཀྱི་ kyi 助詞を〕結合するべきである．

[221.213.216]

འབྲེལ་སྒྲ་དེ་དག་ཚིག་གྲོགས་དང་ཇི་ལྟར་སྦྱོར་བའང་། བདག་གི་ནོར། གང་གི་དྲིན། ཐམས་ཅད་ཀྱི་དོན། རབ་ཀྱི་ཕུལ། ཕྱོགས་ཀྱི་གླང་པོ། དེའི་ཚུལ། དེ་ཡི་ཕྱོགས་སུ་ཅི་ཞིག་ལྷུང་། གཏན་གྱི་དོན། ལམ་གྱི་ཡོན་ཏན། གསེར་གྱི་རྒྱན། དཔལ་གྱི་བེའུ། ཀུནད་ཀྱི་མཆོག །རབ་འབྱོརད་ཀྱི་ཚུལ། བཀའ་སྩལད་ཀྱི་སྙིང་པོ་སོགས་ཏེ་རྟོགས་པར་སླའོ། །

また，それらの属格助詞がどのように共起語と結合されるかと言えば以下の通りである．བདག་གི་ནོར་ bdag **gi** nor「私の財産」，གང་གི་དྲིན་ gang **gi** drin「誰の恩恵か」，ཐམས་ཅད་ཀྱི་དོན་ thams cad **kyi** don「皆の目的」，རབ་ཀྱི་ཕུལ་ rab **kyi** phul「上等の献上品」，ཕྱོགས་ཀྱི་གླང་པོ་ phyogs **kyi** glang bo「諸方を守る象」，དེའི་ཚུལ་ de’**i** tshul「その様態」，དེ་ཡི་ཕྱོགས་སུ་ཅི་ཞིག་ལྷུང་ de **yi** phyogs su ci zhig lhung「その方角に何が落下したか」，གཏན་གྱི་དོན་ gtan **gyi** don「恒久の目的」，ལམ་གྱི་ཡོན་ཏན་ lam **gyi** yon tan「道の功徳」，གསེར་གྱི་རྒྱན་ gser **gyi** rgyan「金の装飾」，དཔལ་གྱི་བེའུ་ dpal **gyi** be’u「吉祥紐」，ཀུནད་ཀྱི་མཆོག་ kund **kyi** mchog「全ての中で最高のもの」，རབ་འབྱོརད་ཀྱི་ཚུལ་ rab ’byord **kyi** tshul「スブーティ（須菩提）の様態」，བཀའ་སྩལད་ཀྱི་སྙིང་པོ་ bka’ stsald **kyi** snying po「勅命の要所」．これらは容易に理解できる．

[221.213.217]

གི་ལ་སོགས་པ་དེ་རྣམས་རྣམ་དབྱེའི་དོན་མ་ཡིན་པ་གཞན་ལའང་འཇུག་པ་ཡོད་དེ། འདི་ནི་བདེན་གྱི་གཞན་ནི་གཏི་མུག་གོ །བདག་ཅག་གི་སྐྱབས་ནི་སྟོན་པ་སངས་རྒྱས་ཡིན་གྱི་དྲག་པོ་སོགས་མ་ཡིན་ནོ། ། འདི་ལྟར་འཐད་མོད་ཀྱི་འོན་ཀྱང་། ཞེས་པ་ལྟ་བུ་ཕྱི་ཚིག་འགལ་བའམ་མི་མཐུན་པར་སྟོན་པའི་ཚིག་གི་རྒྱན་ལའང་འཇུག་པའི་ཕྱིར་རོ། །

その གི་ gi などが格接辞の意味を表すために使用されずに，他の意味を表すために使用されることもある．འདི་ནི་བདེན་གྱི་གཞན་ནི་གཏི་མུག་གོ་ ’di ni bden **gyi** gzhan ni gti mug go「これは真実であるが，他は愚痴蒙昧の所産である」，བདག་ཅག་གི་སྐྱབས་ནི་སྟོན་པ་སངས་རྒྱས་ཡིན་གྱི་དྲག་པོ་སོགས་མ་ཡིན་ནོ་ bdag cag gi skyabs ni ston pa sangs rgyas yin **gyi** drag po sogs ma yin no「我らの帰依処は教主仏陀であって，ルドラ神などではない」，འདི་ལྟར་འཐད་མོད་ཀྱི་འོན་ཀྱང་ ’di ltar ’thad mod **kyi** ’on kyang「この通りで正しいけれども，しかし」）のように，後続表現〔の内容〕が〔先行表現の内容と〕対立すること，あるいは調和しないことを表す副助詞の〔意味を表す〕ために使用されるからである．

[221.213.22]

[221.213.221]

གཉིས་པ་བྱེད་པ་པོའི་སྒྲ་ནི།

> དེ་ཉིད་ལ་ནི་བཅུ་པ་སྦྱར། །བྱེད་པ་པོ་རུ་ཤེས་པར་བྱ། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第二「能格具格助詞」は次の詩節によって教示されている.

> まさにそれに第十〔の後置字〕(-ས་ -s) を結合したものは能格具格助詞であると知るべきである[73]. [13d–14a]

[221.213.222]

སྔར་བཤད་པའི་རྣམ་དབྱེ་དྲུག་པའི་སྒྲ་གི་ལ་སོགས་པ་དེ་དག་ཉིད་ལ་རྗེས་འཇུག་བཅུ་པ་ས་ཡིག་སྦྱར་བས། གིས། ཀྱིས། འིས། ཡིས། གྱིས་རྣམས་སུ་གྲུབ་པ་ནི་བྱེད་པ་པོས་བྱ་བ་ལ་སྦྱོར་བ་སྟོན་པས་ན་གཞུང་གཞན་དུ་རྣམ་དབྱེ་གསུམ་པ་ཞེས་འབྱུང་བ་བྱེད་པ་པོའི་ས་རུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །ཞེས་སོ། །

直前に説明された, まさにその第六格助詞 གི་ gi などに第十の後置字 -ས་ -s を結合することにより, 〔それらの文字群は〕གིས་ gis, ཀྱིས་ kyis, འིས་ 'is, ཡིས་ yis, གྱིས་ gyis という形で成立する. それらは行為者と行為との結合を表示するため, 他の論書では「第三格接辞」とも言われるが, 〈行為者の拠り所〉であると知るべきである. 以上が本文の意味である.

[221.213.223]

དེ་རྣམས་མིང་མཐར་སྦྱོར་ཚུལ་ནི་འབྲེལ་སྒྲའི་སྐབས་དང་མཚུངས་པས། བདག་གིས། གང་གིས། ཐམས་ཅད་ཀྱིས། རབ་ཀྱིས། ཕྱོགས་ཀྱིས། དེའིས། དེ་ཡིས། གཞན་གྱིས། ལམ་གྱིས། གསེར་གྱིས། དཔལ་གྱིས། ཀུནད་ཀྱིས། རབ་འབྱོརད་ཀྱིས། ཟིལད་ཀྱིས། ལ་སོགས་པར་འགྱུར་ཏེ་རྟོགས་པར་སླ་མོད།

それらを単語の後に結合する方法は属格助詞の場合と共通であるので, བདག་གིས་ bdag **gis**「私は」, གང་གིས་ gang **gis**「何が」, ཐམས་ཅད་ཀྱིས་ thams cad **kyis**「皆が」, རབ་ཀྱིས་ rab **kyis**「すぐれて」, ཕྱོགས་ཀྱིས་ phyogs **kyis**「地方によって」, དེའིས་ de'**is**「それによって」[74], དེ་ཡིས་ de **yis**「それによって」, གཞན་གྱིས་ gzhan **gyis**「他の人が」, ལམ་གྱིས་ lam **gyis**「道を通じて」, གསེར་གྱིས་ gser **gyis**「金を用いて」, དཔལ་གྱིས་ dpal **gyis**「輝かしく」, ཀུནད་ཀྱིས་ kund kyis「一切が」, རབ་འབྱོརད་ཀྱིས་ rab 'byord **kyis**「スブーティ(須菩提)が」, ཟིལད་ཀྱིས་ zild **kyis**「威光によって」などとなる. これらは容易に理解できる.

[221.213.224]

འོན་ཀྱང་འ་མཐར་འིས་ཞེས་པ་སྐད་གསར་བཅད་ཀྱི་ལུགས་ལ་མི་འབྱུང་བ་ནི་ཡི་གེ་ཟློར་ཡང་བའི་ཆེད་དུ་འ་མཐའ་ཕལ་ཆེར་བསྡུས་པ་བཞིན་འིས་ཞེས་པའི་འི་ཡིག་ཕྱིས་ནས་བསྡུས་པར་ཟད་ཀྱི་ཐོབ་ཐང་མེད་པས་ནི་མ་ཡིན་པར་ཤེས་དགོས་ཏེ་གཞུང་འདིར་བསྟན་པར་མ་ཟད་ཆོས་རྒྱལ་མེས་དབོན་དུས་ཀྱི་རྡོ་རིང་གི་ཡི་གེ་སོགས་ལའང་དེ་ལྟར་སྣང་བ་མངོན་སུམ་གྱིས་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་རོ། །

---

[73]稲葉 (1986: 332) は「それ(關係の聲)に第十(ས)が結合せられたもの,〔それは〕作具格(作者と作具の意味)であると知るべきである」と訳す.

[74]正規の表記法では དེས་ des となる. འི་ 'i の省略の問題については直後に論じられる.

しかしながら，-འ་ -’(a)〔で終わる単語〕の後に འིས་ ’is〔が結合される用例〕が新語制定法の規則の下で現れないのは，文字の簡略化のために多くの -འ་ -’(a) という最終要素が省略されるのと同じように[75]，འིས་ ’is における འི་ ’i を消去して省略しているために過ぎず，有効性（thob thang）がないからという理由で省略しているのでないのはないのだと理解せねばならない．なぜなら，本書で〔そのように〕教示されているからであり，のみならず父祖法王（chos rgyal mes dbon）時代の碑文などにもそのように〔表記されているのが〕見受けられることは，実際の観察例から確立しているからである．

[221.213.225]

བྱེད་པ་པོའི་སྒྲ་དེ་རྣམས་ཚིག་གྲོགས་དང་ཇི་ལྟར་སྦྱོར་བའང་། བདག་གིས་བསྟན། གང་གིས་བསྒྲུབས། ཐམས་ཅད་ཀྱིས་འདུད། རབ་ཀྱིས་བཀུར། ཕྱོགས་ཀྱིས་དབྱེ། དེའིས་མཚོན། ཞེས་སམ། སྐད་གསར་བཅད་ལྟར་ན། དེས་མཚོན། དེ་ཡིས་ཐམས་ཅད་དབང་དུ་བྱེད། གཞན་གྱིས་གསོས། ལམ་གྱིས་འཚོ། གསེར་གྱིས་བྱུག དཔལ་གྱིས་བརྒྱན། ཀུནད་ཀྱིས་སྐྱོད། རབ་འབྱོརད་ཀྱིས་གསོལ། ཟིལད་ཀྱིས་མནན། ཅེས་སོགས་རྒྱ་ཆེར་སྦྱར་ནས་ཤེས་པར་བྱའོ། །

それらの能格具格助詞がどのように共起語と結合されるかと言えば，以下の通りである．**བདག་གིས་བསྟན་** bdag **gis** bstan「私は言う」，**གང་གིས་བསྒྲུབས་** gang **gis** bsgrubs「何によって確立されているのか」，**ཐམས་ཅད་ཀྱིས་འདུད་** thams cad **kyis** ’dud「皆が頂礼する」，**རབ་ཀྱིས་བཀུར་** rab **kyis** bkur「丁重に崇拝する」，**ཕྱོགས་ཀྱིས་དབྱེ་** phyogs **kyis** dbye「地方によって分ける」，**དེའིས་མཚོན་** de**’is** mtshon「それによって例示する」――新語制定法に従えば **དེས་མཚོན་** des mtshon――，**དེ་ཡིས་ཐམས་ཅད་དབང་དུ་བྱེད་** de **yis** thams cad dbang du byed「彼は全てを支配下に置く」，**གཞན་གྱིས་གསོས་** gzhan **gyis** gsos「他人に育てられた」，**ལམ་གྱིས་འཚོ་** lam **gyis** ’tsho「道によって生きる」，**གསེར་གྱིས་བྱུག་** gser **gyis** byug「金で塗られた」，**དཔལ་གྱིས་བརྒྱན་** dpal **gyis** brgyan「栄光によって飾られた」，**ཀུནད་ཀྱིས་སྐྱོད་** kund **kyis** skyod「皆が揺らす」，**རབ་འབྱོརད་ཀྱིས་གསོལ་** rab ’byord **kyis** gsol「スブーティ（須菩提）が召し上がる」，**ཟིལད་ཀྱིས་མནན་** zild **kyis** mnan「威光で圧倒した」など．このように様々に〔単語と助詞を〕結合して〔その使用法を〕理解するべきである．

[221.213.226]

སྒྲ་སྒོ་ལས། གིས་ལ་སོགས་པ་འདི་རྣམས་མི་མཐུན་པའི་རྒྱན་ལ་འཇུག་པར་བཤད་ཀྱང་འཐད་པར་མ་མཐོང་སྟེ། དེའི་དཔེར་བརྗོད་དུ། དེ་ལྟ་ཡིན་མོད་ཀྱིས་ཞེས་དང་། འོན་གྱིས་ཀྱང་། ཞེས་བཀོད་པའི་སྔ་མའི་ཞེན་དོན་ལ་བརྟགས་ན། རྟག་པར་ཡོད་ཀྱིས། མི་རྟག་པར་མ་ཡིན་ནོ། །ཞེས་པ་ལྟ་བུ་ལ་བསམས་པར་སྣང་ཡང་། དེ་འདྲའི་ཀྱིས་སོགས་ཀྱི་སྒྲ་དེ་རྒྱུ་མཚན་གྱི་དོན་གྱི་བྱེད་པ་པོའི་རྣམ་དབྱེ་ཡིན་གྱི་མི་མཐུན་པའི་རྒྱན་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དང་།

『言語の門』では，これらの **གིས་** gis などが〈逆接〉の副助詞として使用されると説かれるが，正しいとは思われない．というのも，その具体例として **དེ་ལྟ་ཡིན་མོད་ཀྱིས་** de lta yin mod **kyis**「確かにそうであるかもしれないが」，**འོན་གྱིས་ཀྱང་** ’on **gyis** kyang「しかしながら」という表現が提示されるが，その内の前者で想定されている内容を考慮してみると，例えば **རྟག་པར་ཡོད་ཀྱིས་མི་རྟག་པར་མ་ཡིན་ནོ་** rtag par yod **kyis** mi rtag par ma yin no「恒常的なものとして存在するので，非恒常的なものとして存在するのではない」というような表現を念頭に置いていると思われるけれども，そのような〔例文における〕 **ཀྱིས་** kyis などの語は〈理由〉の意味を持つ具格助詞であって〈逆接〉の副助詞で

[75]例えば ཁ་ kha「口」の本来の形は ཁའ་ kha’，མ་ ma「母」の本来の形は མའ་ ma’ である．最終要素の འ་ ’(a) を省略することにより現在の形となる．གདའ་ gda’ や མཛའ་ mdza’「友好的な」などでは，新語制定以前の本来の形がそのまま現在でも使われている．བརྡའ་ brda’ と བརྡ་ brda「記号」のように，新旧二つの形が存在するという例もある．

はないからである．

[221.213.227]

ཕྱི་མ་དེའི་ཞེན་དོན་ལ་བརྟགས་ན་བསྒྲུབ་ཏུ་རུང་གིས་ཀྱང་མི་བསྒྲུབ་བོ། །ལྟ་བུ་ལ་བསམས་པར་སྣང་ཡང་དེ་འདྲའི་མི་མཐུན་པའི་རྒྱན་དུ་གྱུར་པའི་སྒྲ་ནི་ཀྱང་ཞེས་པ་ཡིན་གྱི་གིས་ཀྱི་སྒྲ་མ་ཡིན་ཏེ། དེའང་རྒྱུ་མཚན་གྱི་དོན་ཅན་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

次に後者で想定されている内容を考慮してみると，例えば བསྒྲུབ་ཏུ་རུང་གིས་ཀྱང་མི་བསྒྲུབ་བོ་ bsgrub tu rung **gis** kyang mi bsgrub bo「実行可能ではあるが，実行しないであろう」というような表現を念頭に置いていると思われるけれども，そのような〔例文における〕〈逆接〉の言葉はむしろ ཀྱང་ kyang という語であって ཀྱིས་ kyis という語ではない．なぜなら，それも〈理由〉の意味を有するものだからである．

[221.213.228]

དེས་ན་འདི་འདྲའི་རིགས་རྣམས་དང་། བྱེད་དུ་རུང་གིས་གྱིས་ཤིག་ལྟ་བུའི་བྱེད་པ་པོའི་སྒྲ་རྣམས་ནི་རྒྱུ་མཚན་གྱི་དོན་དུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །སྐབས་འདིར་འགྲེལ་བྱེད་ཁ་ཅིག་གིས། ཁྲུས་ཀྱིས་ལྟ་བུའང་བྱེད་པ་པོའི་སྒྲར་འཁྲུལ་བ་མཐོང་མོད་ཀྱི་བླུན་པོའི་ཉམས་སུ་རྟོགས་པར་སླ་བ་ཉིད་དོ། །

それゆえ，このような類い〔の具格助詞〕や བྱེད་དུ་རུང་གིས་གྱིས་ཤིག་ byed du rung **gis** gyis shig「実行して構わないから実行しなさい」というような例文にある具格助詞は〈理由〉の意味を持つものであると理解するべきである．今の箇所に関してある註釈者が ཁྲུས་ཀྱིས་ khrus **kyis**「（彼は今）沐浴している」といった表現〔にある ཀྱིས་ kyis という語〕も能格具格助詞であると誤解しているように見受けられるが，それが愚か者の様子を示すものであることは実に容易に理解できる．

[221.214]

[221.214.1]

བཞི་པ་རྒྱན་སྡུད་ཀྱི་སྒྲ་ནི།

ཨ་ལི་ཕྱིས་ནས་གཉིས་པ་སྦྱར། །ཚིག་རྒྱན་གཉིས་དང་སྡུད་པར་འགྱུར། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第四「累加副助詞」は次の詩節によって教示されている．

〔属格助詞 ཀྱི་ **kyi** および འི་ **’i** の〕**āli**（ ི **-i**）を消去して第二〔の後置字 ང་ **nga**〕を結合したものが二種の副助詞，並びに累加副助詞となる[76]．[14bc]

[221.214.2]

གོང་དུ་བཤད་པའི་འབྲེལ་སྒྲ་དེ་དག་ལས། ཀྱི འི། གཉིས་ཀྱི་ཨ་ལི་སྟེ་གི་གུ་ཕྱིས་ནས་སོ་སོར་རྗེས་འཇུག་གཉིས་པ་ང་ཡིག་སྦྱར་བས། ཀྱང་། འང་། ཞེས་པར་གྲུབ་པ་དང་། འདིར་མ་བསྟན་ཀྱང་དོན་གྱིས་ཐོབ་པའི་ཡང་གི་སྒྲ་དང་བཅས་གསུམ་པོ་དེ་རྣམས་ནི་ཚིག་ཕྱི་མ་མཐུན་པའམ་མི་མཐུན་པར་སྟོན་པའི་ཚིག་རྒྱན་གཉིས་དང་། གཞིའམ་དོན་གཞན་ཞིག་ལ་སྡུད་ཅིང་སྦྱོར་བའི་སྒྲར་འགྱུར་རོ། །ཞེས་སོ། །

---

[76]稲葉 (1986: 333) は「〔關係辭の〕母音が取り除かれて第二（ང）が結合せられたもの〔それは〕〔一致と不一致との〕二つの〔莊嚴〕と〔聚合〕となる」と訳す．

上述のそれらの属格助詞の内，ཀྱི་ kyi および འི་ ’i の二者が有する āli，すなわちキク記号（ ི -i）を消去してから，それぞれに第二の後置字 -ང་ -ng を結合することによって〔それらの文字は〕ཀྱང་ kyang および འང་ ’ang という形で成立する．また，本書では言及されていないが，意味の上から考えて得られる ཡང་ yang という語も併せると，合計三つとなる．それらは後続表現の〔先行表現との〕〈調和〉あるいは〈不調和〉を表示する〔機能を持つ〕二種の副助詞，並びに他の基体あるいは他の事例への〈累加結合〉を表す助詞となる．以上が本文の意味である．

[221.214.3]

དེ་རྣམས་མིང་མཐར་ཇི་ལྟར་སྦྱོར་བའི་ཚུལ་ནི། རྗེས་འཇུག་གི་ཕོ་ཡིག་ག་ད་བ་ས་རྣམས་དང་ད་དྲག་གི་མཐར་རྟགས་མཚུངས་བརྗོད་བདེ་གཉིས་ཀའི་སྒོ་ནས་སྒྲ་མཐུན་པ་ཀྱང་ཉིད་སྦྱར་ཞིང་། དེ་བཞིན་དུ་དངོས་སུ་ཡོད་མེད་ཇི་ལྟར་རུང་འ་མཐའ་ཅན་རྣམས་ལ། འང་དང་། ང་མ་དག་གི་མཐར་ཡང་གི་སྒྲ་འཇུག་པ་དང་། ན་ར་ལ་གསུམ་གྱི་རྗེས་སུ་བརྗོད་བདེ་ཁོ་ནའི་དབང་གིས་ཡང་ཉིད་འཇུག་གོ །ཚིགས་བཅད་ཀྱི་རྐང་པ་ཁ་སྐོང་དགོས་པའི་ཚེ་ནི་འ་མཐར་ཡང་། ཡང་གི་སྒྲ་སྦྱར་དགོས་སོ། །

それらが単語末尾の後にどのように結合されるかについては以下の通りである．後置字の内で男性文字である -ག་ -g，-ད་ -d，-བ་ -b，-ས་ -s，および再後置字- ད་ -d〔で終わる単語〕の後には，性の一致と発声の簡便さという二つのことを理由として，対応した音を有する ཀྱང་ kyang のみが結合される．さらに，表記上存在するか否かにかかわらず，-འ་ -’(a) を有する単語の後では འང་ ’ang が使用され，-ང་ -ng と -མ་ -m の二者のいずれかで終わる単語の後では ཡང་ yang という語が使用される．-ན་ -n，-ར་ -r，-ལ་ -l の三者のいずれかで終わる単語の後では，発声の簡便さという理由のみにより，まさに ཡང་ yang が使用される．韻文の詩脚の〔音節〕数を埋める必要がある場合であれば，-འ་ -’(a) で終わる単語の後であっても，ཡང་ yang という語が結合されるべきである．

[221.214.4]

དཔེར་ན། རྟག་ཀྱང་། བཅད་ཀྱང་། བཀབ་ཀྱང་། བྱས་ཀྱང་། བསྟནད་ཀྱང་། འབྱོརད་ཀྱང་། སྩལད་ཀྱང་། ལྷའང་། ལྷ་ཡང་དུས་སུ་ཆར་འབེབས་ཤིང་། གང་ཡང་། ལམ་ཡང་། ཡིན་ཡང་། ཆར་ཡང་། གསལ་ཡང་། ལྟ་བུ་རྒྱ་ཆེར་ཤེས་པར་བྱའོ། །

例えば རྟག་ཀྱང་ rtag **kyang**「恒常的であるけれども」，བཅད་ཀྱང་ bcad **kyang**「切断しても」，བཀབ་ཀྱང་ bkab **kyang**「かぶせたとしても」，བྱས་ཀྱང་ byas **kyang**「実行したとしても」，བསྟནད་ཀྱང་ bstand **kyang**「教示したとしても」，འབྱོརད་ཀྱང་ ’byord **kyang**「到達しても」，སྩལད་ཀྱང་ stsald **kyang**「与えたとしても」，ལྷའང་ lha**’ang**「神も」，ལྷ་ཡང་དུས་སུ་ཆར་འབེབས་ཤིང་ lha **yang** dus su char ’bebs shing「神もしかるべき時が来れば雨を降らせる」，གང་ཡང་ gang **yang**「何も」，ལམ་ཡང་ lam **yang**「道も」，ཡིན་ཡང་ yin **yang**「〜であるけれども」，ཆར་ཡང་ char **yang**「雨も」，གསལ་ཡང་ gsal **yang**「明らかであるが」といった例で広く知るべきである．

[221.214.5]

དེ་དག་དོན་ལ་ཇི་ལྟར་སྦྱོར་བའི་ཚུལ་ཡང་མཐུན་པའི་ཚིག་རྒྱན་དུ་སྦྱོར་ན། གསལ་ཡང་གསལ། མཛེས་ཀྱང་མཛེས། ལྟ་བུ་དང་། མི་མཐུན་པའི་རྒྱན་དུ་སྦྱོར་ན། བདུད་ཀྱང་ཁྲོ། མཛའང་བསླུ། ལྟ་བུ་དང་། སྡུད་པའི་དོན་དུ་སྦྱོར་ན། གཟུགས་འདི་ནི་མཛེས་ཤིང་འོད་ཀྱང་འཕྲོ། མིར་མ་ཟད་ལྷས་ཀྱང་བདུད་དོ། །འདི་ནི་ཨུཏྤ་ལའང་ཡིན་ལ་སྔོན་པོའང་ཡིན་ནོ། །ཁང་ཡང་ཕྱོགས་བཅུའི་བདེ་གཤེགས་ཐམས་ཅད་ལ། །ཞེས་སོགས་མང་དུ་བསྒྲེས་ནས་རྟོགས་པར་བྱའོ། །

さらに，それらの意味的な使用法については，以下のような多くの仕方で当て嵌めて知るべきである．〔先行表現と後続表現の〕〈調和〉を表示する副助詞として使用される場合には，གསལ་ཡང་

གསལ་ gsal **yang** gsal「極めて明瞭である」, མཛེས་ཀྱང་མཛེས་ mdzes **kyang** mdzes「この上なく美しい」となる．〔先行表現と後続表現の〕〈不調和〉を表示する副助詞として使用される場合には，བཏུད་ཀྱང་ཁྲོ་ btud **kyang** khro「（彼は）礼拝していながらも怒っている」, མཛའའང་བསླུ་ mdza**'ang** bslu「友好的であるのに欺く」となる．〈累加〉の意味を表すために使用される場合には，གཟུགས་འདི་ནི་མཛེས་ཤིང་འོད་ཀྱང་འཕྲོ་ gzugs 'di ni mdzes shing 'od **kyang** 'phro「この姿は美しく，光までも発している」, མིར་མ་ཟད་ལྷས་ཀྱང་བཏུད་དོ་ mir ma zad lhas **kyang** btud do「人だけでなく神も礼拝している」, འདི་ནི་ཨུཏྤ་ལའང་ཡིན་ལ་སྔོན་པོའང་ཡིན་ནོ་ 'di ni utpa la'ang yin la sngon po**'ang** yin no「これはウトパラ蓮華でありかつ青いものである」[77], གང་ཡང་ཕྱོགས་བཅུའི་བདེ་གཤེགས་ཐམས་ཅད་ལ་ gang **yang** phyogs bcu'i bde gshegs thams cad la「さらにまた十方の一切の善逝に」などとなる．

[221.214.6]

འདིར་ལ་ལ་ཞིག་གིས། མཐུན་པའི་རྒྱན་གྱི་དཔེར། ཨུཏྤ་ལའང་ཡིན་ལ་སྔོན་པོའང་ཡིན་ཞེས་དང་། གཅིག་ཤོས་ཀྱི་དཔེར། ཇི་ལྟར་པདྨ་ཆུ་ནང་དུ། །སྐྱེས་ཀྱང་ཆུ་ཡིས་གོས་པ་མེད། །དེ་བཞིན་འདི་ནི་འཇིག་རྟེན་དུ། །སྐྱེས་ཀྱང་འཇིག་རྟེན་གྱིས་མ་གོས། །ཞེས་སོགས་བཀོད་མོད། འཐད་པར་མ་མཐོང་སྟེ། སྔ་མ་ནི། གཞི་གཅིག་ལ་མཐུན་པའི་ཆོས་ཨུཏྤལ་དང་སྔོན་པོ་གཉིས་སྡུད་པའི་དོན་ཡིན་ལ། ཕྱི་མ་ནི་གཞི་གཅིག་ལ་མི་མཐུན་པའི་ཆོས་ཆུ་ནང་དུ་སྐྱེས་པ་དང་ཆུས་མ་གོས་པ་གཉིས་སྡུད་པ་སོགས་ཀྱི་དོན་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དེ་དག་སྡུད་པའི་དཔེར་འོས་ཀྱི། ཚིག་རྒྱན་གྱི་དཔེར་མི་འོས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

これについてある者は〈調和〉を表す副助詞の例として ཨུཏྤ་ལའང་ཡིན་ལ་སྔོན་པོའང་ཡིན་ནོ་ utpa la**'ang** yin la sngon po**'ang** yin no「ウトパラ蓮華でもあり， かつ青いものでもある」などを提示し，他方〔すなわち〈不調和〉を表す副助詞〕の例として ཇི་ལྟར་པདྨ་ཆུ་ནང་དུ། །སྐྱེས་ཀྱང་ཆུ་ཡིས་གོས་པ་མེད། །དེ་བཞིན་འདི་ནི་འཇིག་རྟེན་དུ། །སྐྱེས་ཀྱང་འཇིག་རྟེན་གྱིས་མ་གོས། ། ji ltar pad ma chu nang du || skyes **kyang** chu yis gos pa med || de bzhin 'di ni 'jig rten du || skyes **kyang** 'jig rten gyis ma gos ||「パドマ蓮華は池水の中から生えるけれども池水でけがされないのと同じように，彼は世間の中に生まれたけれども世間でけがされていない」などを提示するが，正しいとは思われない．前者〔の འང་ 'ang 助詞〕は同一の基体に「ウトパラ蓮華」と「青」という二つの調和する属性を累加するという意味を持つものであり，後者〔の ཀྱང་ kyang 助詞〕は同一の基体に「池水の中から生えること」と「池水でけがされないこと」という二つの調和しない属性を累加するといった意味を持つものであるので，それらは〈累加〉の例としては相応しいが,〔調和や不調和を表す〕副助詞の例としては相応しくないからである．

[221.214.7]

དེས་ན་ངེས་མེད་ཀྱི་དཔེ་དང་། སྨད་པའི་དཔེ་སོགས་སྙན་ངག་གི་རྒྱན་འགའ་ཞིག་ཚིག་རྒྱན་གཉིས་ཀྱི་དཔེར་སྨོས་པའང་དེ་དང་འདྲའོ། །

それゆえ,〈非限定の直喩〉（nges med kyi dpe, *aniyamopamā）[78]や〈非難を含んだ直喩〉（smad pa'i dpe, *nindopamā）[79]などのような幾つかの美文詩の装飾要素を二種の副助詞の実例とする論述があ

---

[77]サンスクリットの同格限定複合語（Kdh.）nīla-utpala「青いウトパラ蓮華」の分析文 nīlaṁ ca tad utpalaṁ ca をチベット語で表したものである．

[78]KĀ II 20: padmaṁ tāvat tavānveti mukham anyac ca tādr̥śam | asti ced astu tatkārīty asāv aniyamopamā ||; KĀ$_S$ 10b4ff.: re zhig khyod gdong padma yi || rjes 'gro gzhan **yang** de 'dra ba || gal te yod na de byed 'gyur || zhes pa 'di ni nges med dpe ||（「まずもってあなたのお顔は蓮華に似ています．次に，もし他にもそれ［蓮華］に似たものがあれば，それもそれと同じ働きをするに違いありません——これは非限定の直喩である.」）

[79]KĀ II 30: padmaṁ bahurajaś candraḥ kṣayī tābhyāṁ tavānanam | samānam api sotsekam iti nindopamā smr̥tā ||; KĀ$_S$ 11b2: padma rdul mang zla ba 'dzad || de dag las kyang khyod kyi bzhin || mtshungs pa la **yang** khyad par bcas || zhes pa smad pa'i dpe ru 'dod ||（「多くの花粉を持つ蓮華，衰え行く月．あなたのお顔は〔美

るが，それも先のものと同じく〔正しいとは思われない〕.

[221.214.8]

ཡང་སྒྲ་སྒོ་ལས།

ཡང་ཞེས་བྱ་བ་བསྣན་པའང་ཡིན། །

ཞེས་འབྱུང་བར་སྡེབ་བཅོས་ནས་བརྣན་པ་ཞེས་བརྗོད་དེ་ཁུངས་སུ་དྲངས་ནས། ཡང་དང་ཡང་དུ་གསུང་བ་གང་། །ཞེས་སོགས་བསྐྱར་བཟླམ་བརྣན་པའི་དོན་དུ་བཤད་མོད། བརྣན་པ་ནི་དམིགས་འཛིན་པའི་དོན་ཡིན་པས་བསྐྱར་བ་དང་གཅིག་པའི་སྐབས་མེད་ཅིང་། སྒྲ་སྒོའི་ཚིག་སྡེབ་མ་བཅོས་པ་དེ་ཉིད་དོན་ལ་གནས་པར། ཡང་ཡང་། སླར་ཡང་། དེ་ནས་ཡང་། ཡང་གསུངས་པ། ལྟ་བུ་རྣམས་བསྐྱར་བཟླམ་བསྣན་པའི་སྒྲར་འགྱུར་བ་ཡིན་ནོ། །འོན་ཀྱང་ཡང་གི་སྒྲ་དེ་འདྲ་དེ། སྐབས་འདིའི་ཀྱང་སོགས་ཀྱི་སྒྲ་དང་མཚུངས་པ་ནི་མི་སྲིད་དོ། །

また〔ある人は〕『言語の門』の

「ཡང་ yang という〔助詞〕は累加（bsnan pa）〔の意味を表示するもの〕でもある」[80]

という文言を一部改変して「強調〔の意味を表示するもの〕」（brnan pa）と読み，それを根拠にして ཡང་དང་ཡང་དུ་གསུང་བ་གང་ **yang** dang **yang** du gsung ba gang「繰り返し説かれている～は…」などという〔表現に現れる ཡང་ yang〕を〈反復〉または〈強調〉の意味を持つものとして説明している．しかし，brnan pa は〈強調〉を意味するので，それが〈反復〉と一致する可能性はなく，『言語の門』のその改変前の読みこそが意味的に適合する．そのようなことから，ཡང་ཡང་ **yang yang**「幾度も」，སླར་ཡང་ slar **yang**「またもや」，དེ་ནས་ཡང་ de nas **yang**「それからまた」，ཡང་གསུངས་པ་ **yang** gsungs pa「さらにお説きになった」などの〔用例に含まれる ཡང་ yang 助詞〕は〈反復〉または〈累加〉を表示する語となっている．しかしながら，そのような〔ある人々によって〈反復〉や〈強調〉の意味で理解される〕その ཡང་ yang 助詞が目下の〔『三十頌』の〕箇所にある ཀྱང་ kyang などの助詞と〔意味的に〕一致する可能性はない．

[221.215]

[221.215.1]

ལྔ་པ་ལྷག་བཅས་ཀྱི་སྒྲ་བཤད་པ་ནི། །

ལ་དོན་སུ་ལ་ཨུ་ཕྱིས་ནས། །དེ་ལ་གསུམ་པའི་དང་པོ་སྦྱར། །
དེ་ལ་ཨཱ་ལི་གསུམ་པ་སྦྱར། །དེ་ནི་ལྷག་དང་བཅས་པའོ། །

ཞེས་པ་སྟེ།

第五「接続助詞の説明」が以下に示される．

la don 助詞 སུ་ **su** が有する ◌ུ（**-u**）を消去した後，そこに第三群の第一要素（ཏ་ **t-**）を結合し，さらにそこ（སྟ་ **st-**）に第三の **āli**〔◌ེ **-e**〕を結合したもの（སྟེ་ **ste**）が接続助詞である[81]．

しさの点では〕それらに似ていますが，ずっと優れています——これは非難を含んだ直喩であると伝承されている．」）

[80]VMĀ D 280b6: yang zhes bya ba bsnan pa yin ||（「ཡང་ yang という〔助詞〕は累加〔の意味を表示するもの〕である．」）

[81]稲葉 (1986: 335) は「〔以前に説いた〕ལ་ 義助辭の སུ་ に於いて u が取り除かれ，それに第三〔群〕の第一（ཏ་）が結合せられ，それに母音の第三（e）が結合せられたもの，それは「具餘」と〔名付けられる〕」と訳す．

[14d–15c]

[221.215.2]

སྔར་བཤད་པའི་ལ་དོན་གྱི་ནང་ཚན་སུ་ཞེས་པ་དེའི་ཤུ་ཡིག་སྟེ་ཞབས་ཀྱུ་ཕྱིས་ནས་ས་ཞེས་གནས་པ་དེ་ལ་ཀཱ་ལི་སྡེ་བ་གསུམ་
པའི་དང་པོ་ཏ་ཡིག་སྦྱར་ཞིང་། དེ་ལ་སླར་ཡང་སྟེང་དུ་ཨཱ་ལི་གསུམ་པ་སྟེ་འགྲེང་བུ་སྦྱར་བས། སྟེ། ཞེས་གྲུབ་པ་ནི་མིང་
ཚིག་གང་གི་མཐར་སྦྱར་ཡང་བསྟན་བྱའི་ལྷག་མ་འདྲེན་པའི་དོན་དུ་འགྱུར་བས་ལྷག་མ་དང་བཅས་པའི་སྒྲ་ཞེས་བྱའོ། །ཞེས་
སོ། །

上述の la don 助詞の一種である སུ་ su という〔助詞〕が有する母音記号シャプキュ ུ(-u) を消去すると ས་ s-という〔文字〕が成立する．そこに kāli の第三群の第一要素である ཏ་ t-を結合し，さらにそこ (སྟ་ st-) に第三の āli である母音記号デンプ ེ (-e) を結合することによって སྟེ་ ste という〔文字〕が成立する．それは単語または文の後に適用されるのだが，そのいずれであっても，語られるべき残余 (lhag ma) の導入を目的とするものとなるので「接続助詞」[82]と呼ばれる．以上が詩節の意味である．

[221.215.3]

དེ་ལྟར་གཞུང་འདིའི་དངོས་བསྟན་ལ་སྟེ་སྒྲ་གཅིག་པུ་ལས་མི་འབྱུང་ཡང་། མིང་མཐའ་སོ་སོ་དང་སྦྱར་བའི་ཚེ་གོང་དུ་སྨོས་
པ་རྣམས་ཀྱི་རིགས་པས་བརྗོད་བདེ་བ་ཁོ་ན་སྦྱོར་གྱི་རྟགས་མཚུངས་ཀྱང་བརྗོད་མི་བདེ་བ་སྦྱོར་བ་མིན་པས། ཡི་གེ་རྣམས་
ཀྱི་ཟུར་ཕྱིན་པར་ཀློག་པའི་དབང་དུ་བྱས་ཏེ།

以上のように本書に直接示されているものとしては སྟེ་ ste という語しか現れないが，各単語の後に〔接続助詞を〕結合する際には，上述の理論に従って発音し易いものこそが結合されるのであって，たとえ性が一致していても発音しにくいものが結合されることはないので，複数の音と音が〔どのようにすれば〕完全な形で (zur phyin par) 発音されるかということを考慮して〔སྟེ་ ste，ཏེ་ te，དེ་ de の中で最も相応しい接続助詞が以下のような仕方で選択される〕．

[221.215.4]

གང་བ་མ་འ་རྣམས་ཀྱི་མཐར་སྟེ་ཡིག་ས་སྒྲ་དང་ལྡན་པ་དེ་བརྗོད་བདེ་བས་འཇུག་ཀྱང་། ན་ར་ལ་གསུམ་དང་ད་དྲག་གི་
མཐར་ནི་དེ་ཤིན་ཏུ་བརྗོད་མི་བདེ་བའི་ཕྱིར་དང་། ས་ཡིག་གི་མཐར་ནི་ས་སྒྲ་སྔ་མ་དེ་ཉིད་དང་སྟེ་ཡིག་གི་ས་སྒྲ་གཅིག་ཏུ་
འདྲེས་པས་སོ་སོར་མི་མངོན་པའི་ཕྱིར་དགོས་པ་མེད་པས། དེ་རྣམས་ཀྱི་མཐར་ས་ཡིག་ཕྱིས་ནས་ཏེ་རྐྱང་ཉིད་སྦྱར་བ་གཞུང་
འདིའི་དགོངས་པར་དོན་ཐོབ་ཏུ་གནས་ཤིང་།

-ག་ -g，-ང་ -ng，-བ་ -b，-མ་ -m，-འ་ ’(a) で終わる単語の後には〔頭字〕ས་ s-を伴う སྟེ་ ste という助詞が起こる．その理由は発音し易いためである．ところが，-ན་ -n，-ར་ -r，-ལ་ -l の三つ並びに再後置字 -ད་ -d で終わる単語の後に〔སྟེ་ ste を結びつけることに〕合目的性はない．なぜなら，それは〔-ན་ -n などの後に来ると〕非常に発音が困難であるからである[83]．また，-ས་ -s という〔後置〕字で終わる単語の後に〔སྟེ་ ste を結びつけることに〕も合目的性はない．なぜなら，まさにその直

[82]「接続助詞」を意味する lhag bcas (< lhag ma dang bcas pa’i sgra) の直訳は「残余 (lhag) を有する語」である．シトゥはここで lhag bcas の語義解釈を与えている．

[83]現代のラサ方言の発音では頭字の ས་- s-は発音されない (སྟེ་ ste は /tē/と発音される) ため，例えば བསྟན་ཏེ་ bstan te「〜を教えて」という正規形の代わりに *བསྟན་སྟེ་ bstan **ste** という表現を作ったとしても，発音上の困難は発生しない．おそらくシトゥの時代・地域では，例えば現代のアムド方言のように (སྟེ་ ste は/hte/と発音される) 何らかの仕方で頭字 ས་- s-が発音されるため，བསྟན་སྟེ་ bstan **ste** は発音上の困難を引き起こすのであろう．

前の -ས་ -s の音（/s/）と，སྟེ་ ste という文字に含まれる ས་ s-の音（/s/）が一つに合わさってしまうため，別々のものとして認識されないからである[84]．それらで終わる単語の後では〔སྟེ་ ste の〕ས་ s- が消去されて〔頭字を〕持たない ཏེ་ te のみが結合される．これが本書の意図する所であることは意味の上から成立する．

[221.215.5]

འཇུག་ཡུལ་གཞུང་འདིའི་དགོངས་པ་དང་། སྒྲ་སྒོ་རྩ་འགྲེལ་མཐུན་པར་སྣང་བས། དེར་དེ་སྒྲ་ལྷག་བཅས་ལ་འཇུག་པར་བཤད་པ། ལ་དོན་གྱི་སྐབས་སུ་ད་མཐར་དུ་སྦྱོར་བ་ལྟར་ད་ཡིག་གི་མཐར་སྦྱར་བར་རིགས་པའི་ཕྱིར་ན་རྗེས་འཇུག་གི་ཁྱད་པར་ལ་ལྟོས་པའི་ལྷག་བཅས་ཀྱི་སྒྲ། སྟེ། ཏེ། དེ། གསུམ་དུ་འགྱུར་བ་ཡིན་ནོ། །

〔接続助詞の〕適用領域に関して本書（『三十頌』）の考えと『言語の門』およびその自註〔の考え〕は一致すると思われるので，同書（『言語の門』）で དེ་ de 助詞は接続〔の意味を表す〕ために適用されると説示されることや[85]，la don 助詞の場合に -ད་ -d で終わる単語の直後に དུ་ du が結合されることを考慮するならば，-ད་ -d で終わる単語の直後に〔དེ་ de 助詞が〕結合されるというのが理に叶っている．以上のことから，後置字の違いを考慮〔して適用されるべき〕接続助詞は སྟེ་ ste，ཏེ་ te，དེ་ de の三つとなる．

[221.215.6]

གོང་དུ་སྨོས་པའི་ལ་དང་འཆད་འགྱུར་གྱི་ནས་དག་ལྷག་བཅས་ལ་འཇུག་པ་ནི། རྗེས་འཇུག་གི་ཁྱད་པར་ལ་མི་ལྟོས་པའི་ཕྱིར་ཕྲད་རང་དབང་ཅན་དུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

上述の ལ་ la や後述の ནས་ nas が接続の〔意味を表す〕ために使用される際には後置字の違いに依存しないので，それらは独立助詞であると理解するべきである．

[221.215.7]

དེས་ན་སྟེ་ལ་སོགས་པ་གསུམ་མིང་ཚིག་ཅི་རིགས་པའི་མཐར་ཇི་ལྟར་སྦྱོར་བའི་དཔེར་བརྗོད་པའང་། བཞག་སྟེ། བྱུང་སྟེ། བཀབ་སྟེ། ལམ་སྟེ། བྱ་སྟེ། ཁྱོད་ཀྱི་སྟེ། མདུན་དུ་སྟེ། ཡིན་ཏེ། འགྱུར་ཏེ། གསལ་ཏེ། བུམ་པར་ཏེ། བསྟན་སྟེ། གྱུརད་ཏེ། བསལད་ཏེ། བྱས་ཏེ། བསྐྱབས་ཏེ། དེ་ཡིས་ཏེ། ཡོད་དེ། བཤད་དེ། ལ་སོགས་པ་རྣམས་ཏེ་རྟོགས་སླ་བར་ཟད་དོ། །

それゆえ，སྟེ་ ste などの三つを単語または文のいずれかの後に結びつける仕方を示す用例は以下のものである．བཞག་སྟེ་ bzhag **ste**「置いて」，བྱུང་སྟེ་ byung **ste**「発生して」，བཀབ་སྟེ་ bkab **ste**「覆い被せて」，ལམ་སྟེ་ lam **ste**「道であって」，བྱ་སྟེ་ bya **ste**「鳥であって」，ཁྱོད་ཀྱི་སྟེ་ khyod kyi **ste**「君のものであって」，མདུན་དུ་སྟེ་ mdun du **ste**「前に，であって」，ཡིན་ཏེ་ yin **te**「〜であり」，འགྱུར་ཏེ་ ’gyur **te**「〜

[84]正規形の གནས་ཏེ་ gnas te「〜に住して」の代わりに*གནས་སྟེ་ gnas **ste** という表現を想定すると，そこでの སྟེ་ ste の使用は合目的性を持たない．なぜなら実際の発音においては གནས་ gnas に含まれる後置字 -ས་ -s の音と，སྟེ་ ste に含まれる頭字 ས་ s-の音（直前の脚註を参照）が重なるため，聞き手にはその二つの /s/ が別々のものとして識別されないからである．ここでも前註に示したような問題が見受けられる．現代のラサ方言では後置字 -ས་ -s は発音されず，母音のウムラウト化と声門閉鎖音の追加をもたらすので གནས་ gnas は/nɛ̃ʼ/と読まれ，現代のアムド方言でも同様に後置字 -ས་ -s は発音されず，གནས་ gnas は/hne/と読まれるが，シトゥは後置字-ས་ -s が/s/と発音されるという前提のもとで以上の議論を行なっているようである．シトゥの時代・地域では実際にそのように発音されていたか，もしくは彼が理想と考える発音体系では後置字-ས་ -s も/s/と発音されるべきであると考えられるのであろう．

[85]VMĀ D 280a5f.: de zhes bya ba’i tshig gi don || tha snyad dngos dang dus ’jug gsum || ’das dang rnam grangs gzhan can dang || lhag ma dag dang bcas pa’o ||（「de という語の指示対象は〔既述の〕表現，事物，時の三つである．〔第一のものは〕過去のもの，他の事例，接続を表す．」）

になって」，གསལ་ཏེ་ gsal **te**「明瞭であって」，བུམ་པར་ཏེ་ bum par **te**「壺に，であり」，བསྟནད་སྟེ་ bstand **ste**「示して」，གྱུརད་ཏེ་ gyurd **te**「～になっており」，བསལད་ཏེ་ bsald **te**「排除して」，བྱས་ཏེ་ byas **te**「実行して」，བསྒྲུབས་ཏེ་ bsgrubs **te**「実現して」，དེ་ཡིས་ཏེ་ de yis **te**「それによって，であり」，ཡོད་དེ་ yod **de**「～があり」，བཤད་དེ་ bshad **de**「説示して」．これらは非常に理解し易い．

[221.215.7]

སྨྲ་སྒོ་ལས།

> སྟེ་ནི་ལྷག་མ་ཡོད་པ་སྟེ། །མཚམས་སྦྱོར་བ་དང་དམ་བཅའ་དང་། །
> གཞན་འདྲེན་པ་དང་གསུམ་དུ་འདོད། །བྱེད་དང་བྱ་བའང་ཡང་ན་ནི། །
> བྱ་བ་ཉིད་དུ་སྦྱོར་བ་གང་། །ཚིག་གཉིས་རིམ་མམ་དུས་གཅིག་ཏུ། །
> སྦྱོར་བར་བྱེད་པ་མཚམས་སྦྱོར་ཡིན། །གང་ཞིག་གིས་ནི་སྔ་མ་ལ། །
> གསལ་བར་བྱེད་པ་དམ་བཅའ་བ། །ལྷག་མ་ཡོད་ཙམ་སྟོན་འགྱུར་ཞིང་། །
> དེ་ལས་གཞན་གྱུར་གཞན་འདྲེན་པའོ། །

ཞེས་འབྱུང་བ་ནི་ཚིག་དོན་ལྷག་མ་འདྲེན་ཚུལ་གྱི་དོན་གྱི་དབྱེ་བ་བཤད་པ་ཡིན་ཞིང་། ཕལ་ཆེར་ལེགས་བཤད་དུའང་འདུག་པས་འདིར་སྨོས་ན། སྟེ་ལ་སོགས་པ་དེ་རྣམས་ལྷག་མ་འདྲེན་ཚུལ་གྱི་སྒོ་ནས་དབྱེ་ན་གསུམ་དུ་འགྱུར་ཏེ། མཚམས་སྦྱོར་དང་། དམ་བཅའ་དང་། གཞན་འདྲེན་ནོ། །

『言語の門』に現れる

> 「སྟེ་ ste は〈残余の存在〉を表し，〈連結〉と〈断定〉と〈他の導入〉の三つを意味すると認められる．段階的に起こる実現手段と実現対象を結合するもの，段階的に起こる二つの実現対象を結合するもの，同時的な二つの実現対象を結合するもの，これらが〈連結〉である．先行の事柄を明示するものが〈断定〉である．それ以外のもので残余の存在のみを表示するものが〈その他の導入〉である．」[86]

という文言は，残余の表現および残余の意味内容を導入する様式の内で，意味内容〔の導入〕に関わる区分を説き明かしたものである．これも概ね妥当な説明であるので，詳しく説明すると以下の通りである．その སྟེ་ ste などを，残余導入様式の観点から区分すると三種に分かれる．すなわち，[1]〈連結〉，[2]〈断定〔に後続する要素の導入〕〉，[3]〈その他の導入〉である．

[221.215.71]

དང་པོ་ལ། ཚིག་སྔ་མ་བྱེད་པ་དང་ཕྱི་མ་བྱ་བར་སྦྱོར་བས་འདྲེན་བྱེད་དང་འདྲེན་བྱ་དུས་རིམ་པར་འཇུག་པ་ཞིག་དང་། སྔ་ཕྱི་གཉིས་ཀ་བྱ་བར་སྦྱོར་ཞིང་དུས་རིམ་གྱིས་འཇུག་པ་ཞིག་དང་། དེ་ཉིད་ལ་དུས་སྔ་ཕྱི་མེད་པ་ཞིག་སྟེ་གསུམ་འབྱུང་བའི། སྔ་མ་ནི། མདའ་འཕངས་ཏེ་ཕོག །ལྷ་བསྒྲུབས་ཏེ་གྲུབ། ལྟ་བུ་དང་། གཉིས་པ་ནི། ལྷ་མཆོད་དེ་ལས་བྱ། ཕྱག་འཚལ་ཏེ་བཤད། ལྟ་བུ་དང་། ཕྱི་མ་ནི། འཛུམ་དམུལ་ཏེ་མདངས་ཕྱུང་། འཕར་ཏེ་འགྲོ། ཚིག་སྒྲ་དང་བཅས་ཏེ་འབར། ལྟ་བུ་སྟེ་དེ་རྣམས་ནི་ནས་དང་ཅིང་སོགས་ཀྱི་ཕྲད་དང་ཡང་འཇུག་པ་མཐུན་ནོ། །

第一のもの（連結）には三つある．[1-1] 実現手段（byed pa）を表す単語を先行要素とし，実現されるべき事柄（bya ba）を表す単語を後続要素として結合することにより，導入要素と被導入要素が段階的に発生することを〔表す用法〕，[1-2] 先行要素と後続要素の両者を共に実現されるべき事柄として結合し，それらが段階的に発生することを〔表す用法〕，[1-3] まさにその両者が同時的に

[86] VMĀ D 280b3ff. からの引用．

発生することを〔表す用法〕という三つのものがある．[1-1] 第一のものは མདའ་འཕངས་ཏེ་ཕོག་ mda’ ’phangs **te** phog「矢を射ると命中した」，ལྷ་བསྒྲུབས་ཏེ་གྲུབ་ lha bsgrubs **te** grub「神を念想したら〔願い事が〕成就した」などである[87]．第二のものは ལྷ་མཆོད་དེ་ལས་བྱ་ lha mchod **de** las bya「神を供養してから仕事をしよう」，ཕྱག་འཚལ་ཏེ་བཤད་ phyag ’tshal **te** bshad「敬礼してから講説をしよう」などである[88]．第三のものは འཛུམ་དམུལ་ཏེ་མདངས་ཕྱུང་ ’dzum dmul **te** mdangs phyung「微笑みながら目を見開いた」[89]，འཕར་ཏེ་འགྲོ་ ’phar **te** ’gro「飛んで行く」，ཚེག་སྒྲ་དང་བཅས་ཏེ་འབར་ tsheg sgra dang bcas **te** ’bar「パチパチという音を立てて燃える」などである[90]．それら〔の用法〕は ནས་ nas 助詞や ཅིང་ cing 助詞などの用法とも一致する．

[221.215.72]

དམ་བཅའ་ཞེས་པ་ནི་ཚིག་སྔ་མ་དམ་བཅས་པ་དེའི་གསལ་བྱེད་དམ་སྒྲུབ་བྱེད་དུ་ཚིག་ཕྱི་མ་འདྲེན་པ་སྟེ། དེའང་དབྱེ་བ་འདྲེན་པ་དང་། གཏན་ཚིགས་འདྲེན་པ་དང་། ངེས་ཚིག་འདྲེན་པ་དང་། རྒྱས་བཤད་འདྲེན་པ་སོགས་ནང་གསེས་མང་པོར་འགྱུར་རོ། །དཔེར་ན། དངོས་པོ་ནི་གསུམ་སྟེ། བེམ་པོ་དང་ཤེས་པ་དང་ལྡན་མིན་འདུ་བྱེད་དོ། །རྟག་པ་ཡིན་ཏེ། ཡོད་པ་གང་ཞིག་འདུས་བྱས་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར། སངས་རྒྱས་ཏེ་མ་རིག་པའི་གཉིད་སངས་པ་དང་ཤེས་བྱ་ལ་བློ་གྲོས་རྒྱས་པའོ། །བསླབ་པ་ཀུན་གྱི་གཞི་འཛིན་ཅིང་། །ཞེས་གསུངས་ཏེ། བསླབ་པ་ནི་ལྷག་པ་ཚུལ་ཁྲིམས་དང་ལྷག་པ་སེམས་དང་ལྷག་པ་ཤེས་རབ་ཀྱི་བསླབ་པ་གསུམ་དུ་ནང་པ་ལ་གྲགས་པ་དང་། ཕྱི་རོལ་པ་ལའང་ཚངས་པར་སྤྱོད་པའི་བརྟུལ་ཞུགས་ཀྱི་བསླབ་པ་མང་དུ་འབྱུང་བས། ཞེས་སོགས་རིམ་པར་སྦྱར་བར་བྱའོ། །

〈断定〉とは，断定された先行表現の内容を明らかにするために，あるいはそれを論証するために後続表現を導入することである．さらに，それは〈分類項目の導入〉，〈論拠の導入〉，〈語義解釈の導入〉，〈詳説の導入〉などの多くの下位項目からなる．順序に従って例示すると，［分類項目の導入］དངོས་པོ་ནི་གསུམ་སྟེ། བེམ་པོ་དང་ཤེས་པ་དང་ལྡན་མིན་འདུ་བྱེད་དོ། ། dngos po ni gsum **ste** | bem po dang shes pa dang ldan min ’du byed do ||「効果的存在は三つある．すなわち，物質と認識と心不相応行である」，［論拠の導入］རྟག་པ་ཡིན་ཏེ། ཡོད་པ་གང་ཞིག་འདུས་བྱས་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར། rtag pa yin **te** | yod pa gang zhig ’dus byas ma yin pa’i phyir |「それは恒常的なものである．存在し，かつ原因によって形成されないもの（無為）であるゆえに」，［語義解釈の導入］སངས་རྒྱས་ཏེ་མ་རིག་པའི་གཉིད་སངས་པ་དང་ཤེས་བྱ་ལ་བློ་གྲོས་རྒྱས་པའོ། ། sangs rgyas **te** ma rig pa’i gnyid sangs pa dang shes bya la blo gros rgyas pa’o ||「かの者を仏陀（sangs rgyas）という．すなわち，無明という眠りから目覚め（sangs）知られるべき対象に対して智慧が広がっている（rgyas）者である」，［詳説の導入］བསླབ་པ་ཀུན་གྱི་གཞི་འཛིན་ཅིང་། །ཞེས་གསུངས་ཏེ། བསླབ་པ་ནི་ལྷག་པ་ཚུལ་ཁྲིམས་དང་ལྷག་པ་སེམས་དང་ལྷག་པ་ཤེས་རབ་ཀྱི་བསླབ་པ་གསུམ་དུ་ནང་པ་ལ་གྲགས་པ་དང་། ཕྱི་

[87]第一の例文では「矢を射る行為」（mda’ ’phangs pa）が実現手段であり，「矢の命中」（mda’ phog pa）が実現されるべき事柄である．第二の例文では「神を念想する行為」（lha bsgrubs pa）が実現手段であり，「成就」（grub pa）が実現されるべき事柄である．いずれの例文においても先行要素（＝導入要素）と後続要素（＝被導入要素）の段階的発生が接続助詞 ཏེ་ te によって表されている．

[88]第一の例文では「神への供養」（lha mchod pa）と「仕事の実行」（las byed pa）が共に実現されるべき事柄であり，第二の例文では「敬礼」（phyag ’tshal ba）と「講説」（bshad pa）が共に実現されるべき事柄である．いずれの例文においても先行要素（＝導入要素）と後続要素（＝被導入要素）の段階的発生が接続助詞によって表されている．

[89]mdangs phyung は文字通りには「輝きを発している」を意味するが，『アヴァダーナ・シャタカ』の用例に基づいて「目を見開いた」（utphulladṛṣṭi = mdangs phyung）と理解した（Negi 1993–2005, s.v. mdangs phyung）．

[90]第一の例文では「微笑む行為」（’dzum dmul ba）と「目を見開く行為」（mdangs phyung ba）が共に実現されるべき事柄であり，第二の例文では「飛ぶ行為」（’phar ba）と「行く行為」（’gro ba）が共に実現されるべき事柄であり，第三の例文では「パチパチという音を立てる行為」（tsheg sgra dang bcas pa）と「燃える行為」（’bar ba）が共に実現されるべき事柄である．いずれの例文においても先行要素（＝導入要素）と後続要素（＝被導入要素）の同時的発生が接続助詞によって表されている．

རོལ་པ་ལའང་ཚངས་པར་སྤྱོད་པའི་བརྟུལ་ཞུགས་ཀྱི་བསླབ་པ་མང་དུ་འབྱུང་བས། bslab pa kun gyi gzhi ’dzin cing || zhes gsungs **te** | bslab pa ni lhag pa tshul khrims dang lhag pa sems dang lhag pa shes rab kyi bslab pa gsum du nang pa la grags pa dang | phyi rol pa la’ang tshangs par spyod pa’i brtul zhugs kyi bslab pa mang du ’byung bas |「あらゆる学処の礎を理解し，と説かれる．学処とは増上戒学・増上心学・増上慧学の三学として仏教徒の間で広く知られるものである．異教徒にも梵行という律儀の学処が多く存在するので…」などである．このように〔接続助詞を〕適用するべきである．

[221.215.73]

གཞན་འདྲེན་ནི་མཚམས་སྦྱོར་དང་དམ་བཅའ་གཉིས་སུ་མི་གཏོགས་པའི་ལྷག་མ་ཡོད་པ་ཙམ་སྟོན་པའི་སྒྲ་གཞན་རྣམས་ཏེ། ཤར་གྱི་ཕྱོགས་ན་དབང་པོ་སྟེ། །ལྷོ་ཡི་ཕྱོགས་ན་འཆི་བདག་གོ །ཁྱོད་ནི་དཔལ་ཏེ་ཁྱོད་ནི་མགོན། །ལྟ་བུ་རྣམས་སོ། །

〈その他の導入〉とは〈連結〉と〈断定〉の二者のいずれにも属さず，残余の存在のみを表示するその他の〔接続の〕語である．ཤར་གྱི་ཕྱོགས་ན་དབང་པོ་སྟེ། །ལྷོ་ཡི་ཕྱོགས་ན་འཆི་བདག་གོ ། shar gyi phyogs na dbang po **ste** || lho yi phyogs na ’chi bdag go ||「東方にはインドラ神がおり，南方には死神ヤマがいる」，ཁྱོད་ནི་དཔལ་ཏེ་ཁྱོད་ནི་མགོན། ། khyod ni dpal **te** khyod ni mgon ||「御身は誉れある者であり，御身は導き手である」などのようにである．

[221.215.8]

སྐབས་འདིར་འགྲེལ་བྱེད་ཁ་ཅིག་གིས། ལྷག་བཅས་ཀྱི་སྒྲ་སྟེ་ཁོ་ནར་འདོད་པ་ནི་མི་འཐད་དེ། གོང་སྨོས་ལྟར་རྗེས་འཇུག་འགའ་ཞིག་ལ་སྟེ་སྦྱར་བ་ཀློག་དཀའ་བའི་སྐྱོན་དང་། དེ་ཡིག་ལྷག་བཅས་ཀྱི་དོན་ཅན་འཇུག་པའི་སྐབས་མི་འབྱུང་བའི་སྐྱོན་དང་། སྔོན་གྱི་གླེགས་བམ་དག་པ་རྣམས་ལ་ཡོངས་སུ་གྲགས་པ་དང་འགལ་བའི་སྐྱོན་ཡང་ཡོད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

この論題に関して，ある註釈者が接続助詞は སྟེ་ ste のみであると主張しているのは正しくない．なぜなら，上でも述べたようにある後置字に སྟེ་ ste を結合すると発音が困難となるという過失があり[91]，དེ་ 助詞は〈接続〉の意味を持つ助詞として全く使用されない〔ことになる〕という過失があり，広く知られる昔の正統なる文書〔に現れる用例〕との矛盾という過失があるからである．

[221.216]

[221.216.1]

དྲུག་པ་འབྱེད་སྡུད་ནི།

> རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་ལ། །དྲུག་པ་སྦྱར་ན་འབྱེད་སྡུད་ཡིན། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第六「選択詞（区分・集約）」が以下の詩節によって教示されている．

> 十の後置字に第六〔の後置字 -མ་ **-m**〕を結合するならば〔それは〕区分・集約〔を表す選択詞〕である[92]．[15d–16a]

[221.216.2]

རྗེས་འཇུག་གི་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་དེ་རྣམས་ལ་དེ་ཉིད་ཀྱི་དྲུག་པ་མ་ཡིག་སྦྱར་བས། གམ། ངམ། དམ། ནམ། བམ།

[91] 221.215.4 を参照．

[92] 稲葉 (1986: 337) は「十添後字に第六（མ་）が結合せられるならば「開攝」である」と訳す．

མམ། འམ། རམ། ལམ། སམ། རྣམས་སུ་གྲུབ་པ་དེ་དག་དང་། སྔ་མ་རྣམས་ཀྱི་རིགས་པས་དོན་གྱིས་ཐོབ་པའི། ཏམ། བཅས་བཅུ་གཅིག་པོ་རྣམས་ནི། ཚིག་དོན་སོ་སོར་འབྱེད་པའམ་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་སྡུད་པའི་སྒྲར་འཇུག་པ་ཡིན་ནོ། །ཞེས་སོ། །

かの十の後置字にまさにその〔後置字群の〕中の第六の文字である -མ་ -m を結合することによって〔それらの文字群は〕གམ་ gam，ངམ་ ngam，དམ་ dam，ནམ་ nam，བམ་ bam，མམ་ mam，འམ་ ’am，རམ་ ram，ལམ་ lam，སམ་ sam という形で成立し，さらにそこに，上述の論理によって意味の上から得られる ཏམ་ tam を加えた計十一のものは，表現または意味内容を別々に区分する語として，あるいは表現または意味内容を一つに集約する語として使用される．以上が詩節の意味である．

[221.216.3]

དེ་རྣམས་མིང་ཚིག་གང་གི་མཐར་ཡང་རུང་སྦྱར་བསྡུའི་སྐབས་དང་མཚུངས་པར་སྤྱིར་བཏང་རྗེས་འཇུག་སོ་སོར་རང་རང་ལ་མ་ཡིག་སྦྱར་བ་ཉིད་འཇུག་པ་མཐུན་པ་ཡིན་ཡང་། དམིགས་བསལ་ད་དྲག་ཅན་རྣམས་ཀྱི་མཐར་ཏམ་ཡིག་སྦྱོར་ཏེ། དེ་དག་རིམ་པས་དཔེར་བརྗོད་ན། རྟག་གམ། མཐོང་ངམ། ཡོད་དམ། ཡིན་ནམ། སྒྲུབ་བམ། སྒོམ་མམ། རིགས་ཀྱི་བུའམ། འདི་ཉིད་དུའམ། གསེར་རམ། མཚལ་ལམ། བྱས་སམ། ཁྱོད་ཀྱིས་སམ། འཛིནད་ཏམ། གྱུརད་ཏམ། འཚལད་ཏམ། སོགས་སོ། །

それらが単語の後に使用される場合と，文の後に使用される場合のいずれにおいても，一般的にはそれぞれの後置字の後に，それと一致する〔文字〕に -མ་ -m という文字を結合したものが等しく使用される，例外的に再後置字 -ད་ -d を有する単語の後には ཏམ་ tam という文字が結合される．完結助詞の場合と同様である．それらを順に例示すると རྟག་གམ་ rtag **gam**「恒常的であるか」[93]，མཐོང་ངམ་ mthong **ngam**「目撃したか」，ཡོད་དམ་ yod **dam**「存在するか」，ཡིན་ནམ་ yin **nam**「～であるか」，སྒྲུབ་བམ་ sgrub **bam**「達成するか」，སྒོམ་མམ་ sgom **mam**「修習するか」，རིགས་ཀྱི་བུའམ་ rigs kyi bu**’am**「善男子または…」，འདི་ཉིད་དུའམ་ ’di nyid du**’am**「まさにここで，もしくは…」，གསེར་རམ་ gser **ram**「金または…」，མཚལ་ལམ་ mtshal **lam**「朱色または…」，བྱས་སམ་ byas **sam**「実行したか」，ཁྱོད་ཀྱིས་སམ་ khyod kyis **sam**「君または…が～」，འཛིནད་ཏམ་ ’dzind **tam**「理解しているか」，གྱུརད་ཏམ་ gyurd **tam**「～になったか」，འཚལད་ཏམ་ ’tshald **tam**「懇願するか／知っているか」などとなる．

[221.216.4]

དེ་དག་དོན་ལ་ཇི་ལྟར་སྦྱོར་བའི་ཚུལ་ཡང་། དབྱེ་གཞི་གཅིག་ལས་བྱེ་བྲག་གཉིས་སམ་མང་པོར་འབྱེད་པ། ཆོས་ནི་གཉིས་ཏེ། འདུས་བྱས་སམ། འདུས་མ་བྱས་སོ། ། ཕུང་པོ་ནི་ལྔ་སྟེ། གཟུགས་སམ། ཚོར་བའམ། འདུ་ཤེས་སམ། འདུ་བྱེད་དམ། རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ཕུང་པོའོ། ལྟ་བུ་དང་། ཚིག་དོན་གཉིས་སམ་མང་པོ་དོན་གཅིག་ཏུ་སྡུད་པ། འདུས་བྱས་སམ་འདུས་མ་བྱས་ནི་ཆོས་སོ། །གཟུགས་སམ་ཚོར་བའམ་འདུ་ཤེས་སམ་འདུ་བྱེད་དམ་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ནི་ཕུང་པོའོ། ། ལྟ་བུ་རྒྱ་ཆེར་ཤེས་པར་བྱའོ། །

さらに，それらを意味的にどのように結合するかと言えば，次の通りである．一つの被分類項目を二つあるいはそれ以上の特殊項目に分類するものがある．例：ཆོས་ནི་གཉིས་ཏེ། འདུས་བྱས་སམ། འདུས་མ་བྱས་སོ། ། chos ni gnyis te | ’dus byas **sam** | ’dus ma byas so ||「法には二種ある．すなわち，有為法と無為法とがある」，ཕུང་པོ་ནི་ལྔ་སྟེ། གཟུགས་སམ། ཚོར་བའམ། འདུ་ཤེས་སམ། འདུ་བྱེད་དམ། རྣམ་པར་ཤེས་པའི་ཕུང་པོའོ། ། phung po ni lnga ste | gzugs **sam** | tshor ba**’am** | ’du shes **sam** | ’du byed **dam** | rnam par shes pa’i phung po’o ||「蘊には五種ある．すなわち，色蘊，受蘊，想蘊，行蘊，識蘊である」など．ま

[93]後述されるように（221.216.5），シトゥは疑問文を形成する終助詞 གམ་ gam 等も〈区分〉を表す選択詞の一種とみなしている．

た，二つあるいはそれ以上の言葉または意味内容を一つに集約するものがある．例：འདུས་བྱས་སམ་འདུས་མ་བྱས་ནི་ཆོས་སོ། །「有為と無為は法である」，གཟུགས་སམ་ཚོར་བའམ་འདུ་ཤེས་སམ་འདུ་བྱེད་དམ་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ནི་ཕུང་པོའོ། ། ’dus byas **sam** ’dus ma byas ni chos so ||「有為法もしくは無為法が法である」，གཟུགས་སམ་ཚོར་བའམ་འདུ་ཤེས་སམ་འདུ་བྱེད་དམ་རྣམ་པར་ཤེས་པ་ནི་ཕུང་པོའོ། ། gzugs **sam** tshor ba**’am** ’du shes **sam** ’du byed **dam** rnam par shes pa ni phung po’o ||「色蘊，受蘊，想蘊，行蘊，識蘊は蘊である」など．以上のように広く知るべきである．

[221.216.5]

འཇིག་རྟེན་མཐའ་དང་ལྡན་ནམ་མི་ལྡན། རྟག་གམ་མི་རྟག །ལྟ་བུ་དྲི་བ་དང་ཐེ་ཚོམ་གྱི་ཚིག་ཅན་རྣམས་ཀྱང་དོན་གྱི་ཁྱད་པར་བརྟག་ཅིང་འབྱེད་པའི་དོན་ཅན་ཡིན་པས། དེ་འདྲའི་འམ་ལ་སོགས་པའི་སྒྲའང་འབྱེད་པའི་སྒྲ་ཉིད་དུ་ངེས་སོ། །

འཇིག་རྟེན་མཐའ་དང་ལྡན་ནམ་མི་ལྡན་ ’jig rten mtha’ dang ldan **nam** mi ldan「世界に終わりはあるのか，それともないのか」のような疑問を表す語を含む表現や，རྟག་གམ་མི་རྟག་ rtag gam **mi** rtag「恒常的であるか，それとも非恒常的であるか」のような疑惑を表す語を有する表現もまた，意味上の相違について吟味して区別を与えるためのものであるので，そのような場合の འམ་ ’am などの語も〈区分〉を表す語として確定される．

[221.216.6]

ཁ་ཅིག་སྐབས་འདིར་ཡང་། རྗེས་འཇུག་ད་བ་ས་རྣམས་ཀྱི་རྗེས་སུ་ཏམ་འཇུག་པར་འདོད་ཀྱང་རྟགས་མཚུངས་འདྲེན་པའི་རིགས་འགྲེ་ཐལ་ཆེས་པར་ཟད་དོ། །

ある者はこの場合にも，後置字 -ད་ -d，-བ་ -b，-ས་ -s で終わる単語の後に ཏམ་ tam が使用されると主張しているが，性の一致に基づく導入という論理を適正な範囲を超えて適用しているに過ぎない．

[221.217]

བདུན་པ་འབྱུང་ཁུངས་ལ། དངོས་དང་། དེ་དགར་སྡུད་ལ་འཇུག་པའི་ཚུལ། མ་བཤད་པ་ཁ་སྐོང་ཞིང་འདོད་པ་གཞན་ལ་ཅུང་ཟད་དཔྱད་པ་སྟེ་གསུམ།

第七「奪格助詞」に関して三点ある．[221.217.1] 本論，[221.217.2] それが〈区分〉と〈境界設定〉の意味を表すためにどのように使用されるか，[221.217.3] 明示されていない事項の補足と他説に関する若干の考察．

[221.217.1]

[221.217.11]

དང་པོ་ནི།

> རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་ཡི། །བཞི་པ་དགུ་པ་ལ་བཅུ་པ། །
> སྦྱར་བ་འབྱུང་ཁུངས་ས་ཡིན་ཏེ། །

ཞེས་པས་བསྟན་ལ།

第一（本論）は以下の詩節によって教示されている．

十の後置字の第四（ན་）および第九（ལ་）に第十〔の後置字〕（-ས་）を結合したもの（ནས་ お

よび ལས་）が奪格助詞であり…[94]．[16bcd]

[221.217.12]

རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་དེའི་བཞི་པ་ན་དང་དགུ་པ་ལ་གཉིས་ལ་སོ་སོར་བཅུ་པ་ས་ཡིག་སྦྱར་བས། ནས། ལས། ཞེས་གྲུབ་པ་ནི་ཆོས་གང་ལས་གང་ཞིག་བྲལ་བའམ་བྱུང་བ་སྟོན་པའི་དོན་དུ་མཚུངས་པར་འཇུག་པས་གཞུང་གཞན་དུ་རྣམ་དབྱེ་ལྔ་པ་ཞེས་བཤད་པ་འབྱུང་ཁུངས་ཀྱི་ས་ཡིན་ནོ། །ཞེས་སོ། །ཏེ་ཞེས་པའི་ཚིག་ལྷག་མ་འདྲེན་པའི་དོན་ཏོ། །

先述の十の後置字の第四 ན་ na および第九 ལ་ la の二者の後に，それぞれに第十〔の後置字〕-ས་ -s を結合することにより ནས་ nas および ལས་ las という〔文字群〕が成立する．それらは〈あるもの *x* からの別のもの *y* の分離〉や〈あるもの *x* からの別のもの *y* の発生〉を表示するために共通に使用されるので，他の論書では「第五格接辞」として説明される．すなわち〈発生源〉（’byung khungs）〔という意味表示〕の拠り所〔となる語〕である．以上が詩節の意味である．ཏེ་ te という語は残余の導入を意味する[95]．

[221.217.13]

དེ་དག་ཕྲད་རང་དབང་ཅན་ཡིན་པས་སྦྱོར་ཚུལ་རྗེས་འཇུག་གི་ཁྱད་པར་ལ་མི་ལྟོས་པར་མིང་མཐའི་རྗེས་འཇུག་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཐར་ཅི་རིགས་པར་སྦྱར་བར་བྱའོ། །

それらは独立助詞であるので，その結合法については〔直前の語末の〕後置字の違いが考慮されることはなく，全ての語末の後置字の直後に任意に結合されるべきである．

[221.217.14]

འབྱུང་ཁུངས་ཀྱི་དོན་ལ་ཇི་ལྟར་འཇུག་པ་ནི་དཔེར་ན། སངས་རྒྱས་ལས་ཆོས་ཆོས་ལས་འཕགས་པའི་ཚོགས། །ཚོགས་ལས་སྙིང་པོ་ཡེ་ཤེས་ཁམས་ཐོབ་མཐར། །ཞེས་དང་། གསེར་ཁ་ནས་གསེར། རྒྱ་མཚོ་ནས་ནོར་བུ། བ་ལས་འོ་མ། མཁས་པ་ལས་རིག་པ། ལྟ་བུ་དང་།

〈発生源〉の意味での使用法については，例えば སངས་རྒྱས་ལས་ཆོས་ཆོས་ལས་འཕགས་པའི་ཚོགས། །ཚོགས་ལས་སྙིང་པོ་ཡེ་ཤེས་ཁམས་ཐོབ་མཐར། | sangs rgyas **las** chos chos **las** ’phags pa’i tshogs || tshogs **las** snying po ye shes khams thob mthar ||「仏陀から法が生まれ，法から聖者衆が生まれる．聖者衆から智慧の根源という真髄を得た後に…」，གསེར་ཁ་ནས་གསེར་ gser kha **nas** gser「金鉱から金が〔生まれる〕」，རྒྱ་མཚོ་ནས་ནོར་བུ་ rgya mtsho **nas** nor bu「海から宝石〔が生まれる〕」，བ་ལས་འོ་མ་ ba **las** ’o ma「牝牛から乳〔が出る〕」，མཁས་པ་ལས་རིག་པ་ mkhas pa **las** rig pa「賢者から学問を〔習得する〕」など〔の例で理解するべきである〕．

[221.217.15]

འབྱུང་ཁུངས་དངོས་མ་ཡིན་ཡང་སྐབས་དེར་དེ་ལས་བྱུང་བས་འབྱུང་ཁུངས་དང་འདྲ་བ། རྟ་ལས་ལྷུང་། རི་ལས་ལྷུང་། སྐས་ནས་བབས། ཤར་ཕྱོགས་ནས་འོད་སྣང་ལྟ་བུ་རྣམས་སུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

本来の意味での〈発生源〉ではないが，ある条件の下でそこから発生するゆえに〈発生源〉に類似するものは，རྟ་ལས་ལྷུང་ rta **las** lhung「馬から落下する」，རི་ལས་ལྷུང་ ri **las** lhung「山から落下する」，

[94]稲葉 (1986: 338) は「十添後字の第四（ན་）と第九（ལ་）とに〔それぞれ〕第十（ས་）が結合せられたものは「助辭」のあり方であって，」と訳す．

[95]第 16 詩節 d 句末尾の ཏེ་ te 助詞は，第 17 詩節 a 句への接続の働きを持つ．

སྐས་ནས་བབས་ skas **nas** babs「梯子を降りる」，ཤར་ཕྱོགས་ནས་འོད་སྣང་ shar phyogs **nas** ’od snang「東方から光が現れる」などの例で理解するべきである[96].

[221.217.16]

ཡང་དུ་བ་ལས་མེར་ཤེས། ཆུ་སྐྱར་ལས་ཆུར་ཤེས། སྐྱེ་ཞིང་འཇིག་པ་ལས་དངོས་པོར་རྟོགས། ལྟ་བུ་ལས་ཀྱི་སྒྲ་ཁོ་ན་རྒྱུ་མཚན་ལ་འཇུག་པ་ཡོད་ཀྱང་། མེར་ཤེས་པ་སོགས་རྒྱུ་མཚན་ཅན་དེ་དུ་བ་མཐོང་བ་སོགས་ཀྱི་རྒྱུ་མཚན་ལས་བྱུང་བའི་ཕྱིར་འབྱུང་ཁུངས་དང་འདྲ་བའི་རྣམ་དབྱེ་ལྔ་བ་ཉིད་དོ། །

さらに，དུ་བ་ལས་མེར་ཤེས་ du ba **las** mer shes「煙によって火があると知る」，ཆུ་སྐྱར་ལས་ཆུར་ཤེས་ chu skyar **las** chur shes「鷺によって水があると知る」，སྐྱེ་ཞིང་འཇིག་པ་ལས་དངོས་པོར་རྟོགས་ skye zhing ’jig pa **las** dngos por rtogs「発生と消滅によって実在であると知る」などのように，ལས་ las 助詞のみについては〈原因・理由〉の意味を表すために使用されることがある．しかし，その原因・理由と関係している「火の認識」などは「煙の知覚」などという原因・理由から発生しているのであるから，〔それらの例に現れる ལས་ las 助詞を伴った要素は〕〈発生源〉に類似する〔意味を持つ〕第五格に他ならない．

[221.217.2]
[221.217.21]

གཉིས་པ་ནི།

> དགར་དང་སྡུད་པའང་དེ་བཞིན་ཡིན། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第二（それが〈区分〉と〈境界設定〉の意味を表すためにどのように使用されるか）は以下の詩節によって教示されている．

> 〈区分〉と〈境界設定〉もそれと同様である[97]．[17a]

[221.217.22]

བཤད་མ་ཐག་པའི་ལས་ནས་ཀྱི་སྒྲ་དེ་དག་འབྱུང་ཁུངས་ཁོ་ནར་མ་ཟད། རྣམ་དབྱེ་སྦྱོར་གཞི་དེ་ལས་རིགས་དང་བྱ་བ་ཡོན་ཏན་རྣམས་ཀྱི་ཁྱད་པར་གང་ཡང་རུང་བ་ཡོགས་སུ་དགར་བའི་དོན་ལའང་འཇུག་ཅིང་། དེ་ལས་ནས་ཀྱི་སྒྲ་གཅིག་པུ་ནི་ཡུལ་དང་དུས་དང་དངོས་པོ་ལ་སོགས་པ་མཚམས་འཛིན་ཅིང་སྡུད་པའི་དོན་དུའང་དེ་བཞིན་དུ་འཇུག་པ་ཡིན་ནོ། །ཞེས་པའོ། །

直前に説明されたその ལས་ las および ནས་ nas という助詞は〈発生源〉のみならず〈区分〉の意味でも使用される．すなわち，当該の格助詞の適用先となっているものからの〈区分〉であり，種（rigs, *jāti），行為（bya ba, *kriyā），属性（yon tan, *guṇa）のいずれかの限定要素による〈区分〉である．さらに，それらの内，ནས་ nas 助詞に限って言えば，空間・時間・事物などの〈分岐点設定〉や〈境界設定〉〔の意味を表す〕ためにも，それと同様に使用される．以上が詩節の意味である．

---

[96]サンスクリット文法学では奪格の基本的な意味は〈起点〉（apādāna）であるため，むしろここに挙げられる「馬から落下する」などが標準的な奪格の用例であることになるが，チベット文法学で広く用いられる’byung khungs という用語は〈発生源〉を意味するため，ここに見られるような逆転現象が生じている．

[97]稲葉 (1986: 339) は「「比較選擇」と「攝約」と〔の義〕もまた同様である」と訳す．

[221.217.23]

དེ་དག་དབྱེ་བ་དང་བཅས་ཏེ་དཔེར་བརྗོད་ན། རིགས་དང་བྱ་བ་ཡོན་ཏན་རྣམས་ཀྱི་ཁྱད་པར་གྱིས་གཞི་གཅིག་ལས་དགར་བ་ནི། མིའམ་ཅི་ལས་དྲི་ཟ་ཐ་དད་དོ། །བཤེས་གཉེན་ངན་པ་ལ་བཀུར་སྟི་བྱེད་པ་ལས་ལྷ་མཆོད་པ་ཉིད་ལེགས། ཡང་སོས་ལས་ཐིག་ནག་པ་སྡུག་བསྔལ་ཆེ། ལྷ་ཆེན་པོ་ལས་བདེ་བར་གཤེགས་པ་ཡོན་ཏན་དུ་མས་འཕགས་སོ། །ཞེས་པ་ལྟ་བུ་སྟེ་འདི་འདྲའི་རིགས་ལ་ལས་ཀྱི་སྒྲ་ཉིད་འཇུག་གོ །

それらを分類と共に例示すると次の通りである．種，行為，属性という限定要素に基づく，ある一つの被限定要素からの〈区分〉を示すものとして，例えば མིའམ་ཅི་ལས་དྲི་ཟ་ཐ་དད་དོ་ mi'am ci **las** dri za tha dad do「ガンダルヴァ（gandharva）はキンナラ（kiṁnara）とは別の者である」[98]，བཤེས་གཉེན་ངན་པ་ལ་བཀུར་སྟི་བྱེད་པ་ལས་ལྷ་མཆོད་པ་ཉིད་ལེགས་ bshes gnyen ngan pa la bkur sti byed pa **las** lha mchod pa nyid legs「悪い教師に仕えるくらいなら神々を供養する方がましである」[99]，ཡང་སོས་ལས་ཐིག་ནག་པ་སྡུག་བསྔལ་ཆེ་ yang sos **las** thig nag pa sdug bsngal che「等活地獄よりも黒縄地獄の方がより苦しい所である」[100]，ལྷ་ཆེན་པོ་ལས་བདེ་བར་གཤེགས་པ་ཡོན་ཏན་དུ་མས་འཕགས་སོ་ lha chen po **las** bde bar gshegs pa yon tan du mas 'phags so「善逝は多くの功徳の点でマヘーシュヴァラ（大自在天）にまさっている」[101]といった例がある．このような類いのものについては ལས་ las 助詞のみが使用される．

[221.217.24]

དེ་བཞིན་དུ་གཞི་གཉིས་སམ་མང་པོ་ལས་ཀྱང་རུང་། དེ་དག་གི་ནང་ནས་ཕྱུང་བ་ལྟ་བུ་མ་ཡིན་པར་ལོགས་སུ་དགར་བ་ཙམ་གྱི་དོན་ལ་འང་ལས་ཀྱི་སྒྲ་ཉིད་འཇུག་སྟེ། རྟག་པ་དང་དངོས་པོའི་ཆོས་ལས་དེ་བཞིན་ཉིད་གཞན་ནོ། །ཟ་བ་དང་དགོད་པ་དང་སྨྲ་བ་དང་འགྲོ་བ་ལ་སོགས་པ་སྤྱོད་ལམ་ཕལ་བ་རྣམས་ལས་མཆོད་རྟེན་ལ་ཕྱག་དང་སྐོར་བ་བྱེད་པ་ལེགས་སོ། །ཁ་དོག་རྣམས་ལས་དཀར་པོ་ཉིད་མཛེས་སོ། །ལྟ་བུའོ། །

さらに，ལས་ las 助詞のみについて言えば，二つまたはそれ以上の被限定要素からの〈区分〉——それらの内からの発出ということではなく，それらから別個に取り出して区分けすること——の意味を表すためにも使用される．例：རྟག་པ་དང་དངོས་པོའི་ཆོས་ལས་དེ་བཞིན་ཉིད་གཞན་ནོ་ rtag pa dang dngos po'i chos **las** de bzhin nyid gzhan no「真如は恒常的存在および効果的存在とは異なるものである」，ཟ་བ་དང་དགོད་པ་དང་སྨྲ་བ་དང་འགྲོ་བ་ལ་སོགས་པ་སྤྱོད་ལམ་ཕལ་བ་རྣམས་ལས་མཆོད་རྟེན་ལ་ཕྱག་དང་སྐོར་བ་བྱེད་པ་ལེགས་སོ་ za ba dang dgod pa dang smra ba dang 'gro ba la sogs pa spyod lam phal ba rnams **las** mchod rten la phyag dang skor ba byed pa legs so「食べる，笑う，会話する，移動するなどの普通の行動よりも，仏塔への礼拝や右繞の方が優れている」，ཁ་དོག་རྣམས་ལས་དཀར་པོ་ཉིད་མཛེས་སོ་ kha dog rnams **las** dkar po nyid mdzes so「諸々の色の中では白色こそが美しい」．

[221.217.25]

རིགས་སོགས་ཀྱི་ཁྱད་པར་གྱིས་ཚོགས་ཀྱི་ནང་ནས་འབྱིན་པ་ལྟ་བུར་དགར་བ་ནི། མི་རྣམས་ཀྱི་ནང་ནས་རྒྱལ་རིགས་དཔའ། གསེར་དངུལ་གཉིས་ཀྱི་ནང་ནས་གསེར་གོང་ཆེ། རིགས་བཞིའི་ནང་ནས་དམངས་རིགས་དམན། བ་རྣམས་ཀྱི་དཀྱིལ་ནས་ནག་མོ་འོ་མ་མང་། བྱ་བ་རྣམས་ཀྱི་ནང་ནས་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་མཆོད་པ་ནི་ཕུལ་དུ་བྱུང་བའོ། །ལྟ་བུ་སྟེ་འདི་འདྲ་ལ་ནས་ཉིད་འཇུག་གོ །

---

[98] ガンダルヴァとキンナラは共に天界に住む天部の構成員である．当該の例文では，両者が異なった種（rigs, *jāti）に属する天部であることが ལས་ las 助詞の使用により示されている．

[99]「悪い教師への奉仕」と「神々への供養」という二つの行為（bya ba, *kriyā）の区分が ལས་ las 助詞によって示されている．

[100]「苦しみの大きさ」という属性（yon tan, *guṇa）の点での区分が ལས་ las 助詞によって示されている．

[101]「功徳の多さ」という属性（yon tan, *guṇa）の点での区分が ལས་ las 助詞によって示されている．

種などの限定要素に基づく，集合体の中から抽出するような形での〈区分〉は次のものである．例：མི་རྣམས་ཀྱི་ནང་ནས་རྒྱལ་རིགས་དཔའ་ mi rnams kyi nang **nas** rgyal rigs dpa’「人間の中で王族階級は勇猛である」，གསེར་དངུལ་གཉིས་ཀྱི་ནང་ནས་གསེར་གོང་ཆེ་ gser dngul gnyis kyi nang **nas** gser gong che「金と銀の二つの内では金の方が高価である」，རིགས་བཞིའི་ནང་ནས་དམངས་རིགས་དམན་ rigs bzhi’i nang **nas** dmangs rigs dman「四つのヴァルナ（四姓）の中でシュードラ階級は下層に属する」，བ་རྣམས་ཀྱི་དཀྱིལ་ནས་ནག་མོ་འོ་མ་མང་ ba rnams kyi dkyil **nas** nag mo ’o ma mang「牝牛の中で黒牛は多くの乳を出す」，བྱ་བ་རྣམས་ཀྱི་ནང་ནས་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ལ་མཆོད་པ་ནི་ཕུལ་དུ་བྱུང་བའོ་ bya ba rnams kyi nang **nas** sangs rgyas bcom ldan ’das la mchod pa ni phul du byung ba’o「諸々の義務的行為の中でも仏世尊に対する供養は特別にすぐれている」など．このような〔集合体の中からの抽出を表す〕場合には ནས་ nas 助詞のみが使用される．

[221.217.26]

ནས་ཀྱི་སྒྲ་སྡུད་པ་ལ་འཇུག་པ་ནི། ལྷ་ས་ནས་གཞིས་ཀ་རྩེའི་བར། མནར་མེད་ནས་སྲིད་རྩེའི་བར། དེང་ནས་སང་ཉི་མ་མ་ཤར་གྱི་བར། གཟུགས་ནས་རྣམ་མཁྱེན་གྱི་བར། གཅིག་ནས་བརྒྱའི་བར། ལྟ་བུའོ། །

ནས་ nas 助詞は〈境界設定〉の意味を表すために使用される．例：ལྷ་ས་ནས་གཞིས་ཀ་རྩེའི་བར་ lha sa **nas** gzhis ka rtse’i bar「ラサからシカツェまで」，མནར་མེད་ནས་སྲིད་རྩེའི་བར་ mnar med **nas** srid rtse’i bar「無間地獄から有項まで」，དེང་ནས་སང་ཉི་མ་མ་ཤར་གྱི་བར་ deng **nas** sang nyi ma ma shar gyi bar「今日から明日太陽が昇るまで」，གཟུགས་ནས་རྣམ་མཁྱེན་གྱི་བར་ gzugs **nas** rnam mkhyen gyi bar「色から一切相智まで」，གཅིག་ནས་བརྒྱའི་བར་ gcig **nas** brgya’i bar「一から百まで」．

[221.217.27]

དེ་ལྟར་དགར་སྡུད་ལ་འཇུག་པའི་སྒྲ་འདི་རྣམས་ཀྱང་འཕྲད་གཞན་མ་ཡིན་པར་རྣམ་དབྱེ་ལྔ་པའི་ཡན་ལག་ཉིད་དུ་ཤེས་དགོས་ཏེ། དགར་བ་ནི་གང་ལས་དགར་བའི་གཞི་དེ་ལས་ཁྱད་པར་དུ་བྱུང་བ་ལྟར་སྣང་བ་དང་། སྡུད་པ་ནི་ཐོག་མ་གང་ནས་བརྩམས་པ་དེ་ལས་བསྡུ་རྒྱུའི་གནས་སྐབས་ཐམས་ཅད་བྱུང་བ་དང་འདྲ་བའི་ཕྱིར་འབྱུང་ཁུངས་ཀྱི་རྣམ་དབྱེ་སྦྱར་བར་སྣང་བའི་ཕྱིར་རོ། །

ただし，以上のように〈区分〉と〈境界設定〉を表すために使用されるこれらの助詞（ནས་ nas および ལས་ las）は，決して他の接辞ではなく，まさに第五格接辞の支分であると理解せねばならない．なぜなら，〈区分〉とは何らかの区分がなされる基盤があって，そこから（de las）区別されたものとして発生している（byung ba）かのように現れる〔ものを表示する機能〕であり，また，〈境界設定〉とはある起点から始まって，そこから（de las）境界設定されるべき一切の状況が発生している（byung ba）かのような〔事態を表示する機能である〕ので，〈発生源〉を示す格として適用されているように見えるからである．

[221.217.28]

འོ་ན་འབྱུང་ཁུངས་ཉིད་སྨོས་པས་ཆོག་གོ་སྙམ་ན། འབྱུང་ཁུངས་ལ་འཇུག་པར་བསྟན་པ་ནི་འབྱུང་ཁུངས་དངོས་དང་། དེ་དང་ཆ་འདྲ་བ་གཙོ་བོ་རྣམས་སྡུད་པའི་དོན་དང་། དགར་སྡུད་གསུངས་པ་ནི་འབྱུང་ཁུངས་དངོས་དང་ཆ་མཐུན་པ་གཉིས་ཀ་མ་ཡིན་ཡང་ཚིག་སྦྱོར་ཙམ་གྱིས་ཆ་མཐུན་དང་འདྲ་རུང་དུ་ཡོད་པའི་ཕྱིར་ལྔ་པའི་ཡན་ལག་ཕལ་བར་གྱུར་པ་རྣམས་སྡུད་པའི་དོན་ཡིན་པས་སྐྱོན་མེད་དོ། །

（反論：）ならば，〈発生源〉にのみ言及すれば十分ではないか．（答：）〔ནས་ nas と ལས་ las が〕〈発生源〉の意味を表すために使用されると述べたのは，本来の意味での〈発生源〉と，その類似要素の内で主要なものを包含させるためである．その一方で，〈区分〉と〈境界設定〉を〔トゥミが〕

説いておられるのは，二次的な第五格接辞の構成要素となるものを包摂させるためである．なぜなら，それらは本来の意味での〈発生源〉とその類似要素のいずれでもないが，〔先の 221.217.27 に示したように〕言葉の使い方のみを考慮すれば，その類似要素に似ていると言えなくもないからである．以上の理由により過失はない．

[221.217.3]

[221.217.31]

གསུམ་པ་ནི། གཞུང་འདིར་མ་བསྟན་ཀྱང་ནས་ཀྱི་སྒྲ་ནི་མཚམས་སྦྱོར་བའི་ལྷག་བཅས་ལའང་འཇུག་པ། ཕྱག་འཚལ་ནས་བཤད། ལྷ་མཆོད་ནས་ལས་བྱ། ལག་པ་བརྐྱངས་ནས་བཟུང་། མིག་ཕྱེས་ནས་བལྟས། ལྟ་བུ་སྟེ་ལྷག་བཅས་ཀྱི་སྐབས་སུའང་ཕྱོགས་ཙམ་སྨོས་པ་བཞིན་ནོ། །

第三（明示されていない事項の補足と他説に関する若干の考察）．本書では説明されていないが，ནས་ nas 助詞は〔二つの動詞の〕結合による接続（mtshams sbyor ba’i lhag bcas）の意味を表すために使用されることもある．例：ཕྱག་འཚལ་ནས་བཤད་ phyag ’tshal **nas** bshad「敬礼してから講説する」，ལྷ་མཆོད་ནས་ལས་བྱ་ lha mchod **nas** las bya「諸天を供養してから仕事をしよう」，ལག་པ་བརྐྱངས་ནས་བཟུང་ lag pa brkyangs **nas** bzung「手を伸ばしてつかむ」，མིག་ཕྱེས་ནས་བལྟས་ mig phyes **nas** bltas「目を開いて見た」など．〔これについては〕接続助詞の箇所でも部分的に言及したが，その通りに〔理解することができる〕．

[221.217.32]

སྨྲ་སྒོ་ལས།

　　ལས་ནི་རྒྱུ་དང་འབྱུང་ཁུངས་དང་། །དགར་བ་ཡིན་ཏེ་ནས་དེ་བཞིན། །

ཞེས་ལས་ནས་ཀྱི་སྒྲ་དག་རྒྱུ་ལ་འཇུག་པར་བཤད་ཅིང་། འགྲེལ་བར།

　　རྒྱུའི་དོན་ནི་ས་བོན་ལས་མྱུ་གུ་ཞེས་པ་ལྟ་བུའོ། །

ཞེས་འབྱུང་བ།

『言語の門』には

　　「ལས་ las は〈原因〉と〈発生源〉と〈区分〉の意味で使用される．ནས་ nas も同様である．」[102]

とあり，ལས་ las および ནས་ nas という助詞は共に〈原因〉の意味を表すために使用されると説明され，さらに註釈では〈原因〉の意味〔を表す例〕として ས་བོན་ལས་མྱུ་གུ་ sa bon **las** myu gu「種から芽が〔出る〕」[103]というものが挙げられている．

[221.217.32a]

ཁ་ཅིག་གིས་དེ་འདྲ་དེ་འབྱུང་ཁུངས་དངོས་ཡིན་པར་བྱས་ནས། འབྱུང་ཁུངས་ལས་ལོགས་སུ་དབྱེ་བ་མི་འཐད་ཅེས་སྨྲས་ཀྱང་། དེ་འབྱུང་ཁུངས་དངོས་ནི་མ་ཡིན་ཏེ།

ある者はそのような〔例文に現れる las 助詞の意味〕こそが本来の意味での〈発生源〉であると理解した上で，それを〈発生源〉とは別のものとして区分するのは正しくないと論じるが，〔実際にはそれは〕本来の意味での〈発生源〉ではない．

[102] VMĀ D 281a3 からの引用．

[103] VMĀ D 300a3 からの引用．

[221.217.32b]

འབྱུང་ཁུངས་ཀྱི་དོན་གོང་སྨོས་ལྟར། རྒྱ་མཚོ་ནས་ནོར་བུ་ལྟ་བུ་ནོར་བུའི་འབྱུང་ཁུངས་རྒྱ་མཚོ་ཡིན་ཞིང་ནོར་བུ་མིའི་ལག་ཏུ་བྱུང་བའི་ཚེ་རྒྱ་མཚོ་ལས་ཕྱེ་དགོས་པ་དང་། དངོས་སུ་འབྲེལ་བ་ཕྱེ་མི་དགོས་ཀྱང་རིག་པའི་འབྱུང་ཁུངས་མཁས་པ་ཡིན་ཞིང་དེ་ལས་སློབ་མས་རིག་པ་ལོབ་པ་ན་རྒྱུད་ཐ་དད་དུ་གྱུར་པས་ཕྱེ་བར་སྣང་བ་ལྟ་བུ་ཞིག་ཏེ།

先に示した通り，〈発生源〉というのは རྒྱ་མཚོ་ནས་ནོར་བུ་ rgya mtsho **nas** nor bu「海から宝〔が生まれる〕」という例のように，宝の発生源が海であり，宝が人間の手に入る時にそれが必ず海から分離されるということ，また〔མཁས་པ་ལས་རིག་པ་ mkhas pa **las** rig pa「賢者から学問を〔習得する〕」という例のように〕実質的に結合していたものが必ずしも分離されるのではないが，認識の発生源が賢者であり，彼のもとで学生が学問を習得する時に，〔二者の心〕相続が異なっているがゆえに〔学問が賢者から〕分離されるかのように見えるということを意味する．

[221.217.32c]

བརྡ་སྤྲོད་པའི་གཞུང་རྣམས་སུ་འབྱུང་ཁུངས་ཀྱི་དོན་འཆད་པ་ན། གང་ལས་འབྲལ་བའམ། ལེན་པའམ། ཞེས་དང་། ཕྱེ་ཞིང་ལྷུང་བ། ཞེས་དང་། ཨ་པཱ་ད་ན་ངེས་པར་སྦྱིན་པ་ཞེས་བསྒྱུར་ཀྱང་ཨ་པ་འབྲལ་བ་ཨཱ་ད་ན་ལྕུར་ལེན་པ་ཡིན་པས་འབྲལ་བར་ལེན་པ་ཞེས་སོགས་རྒྱས་པར་འབྱུང་ལ། མྱུ་གུ་ནི་ས་བོན་དང་མེད་ན་མི་འབྱུང་གི་འབྲེལ་བར་གྲུབ་ཀྱང་ས་བོན་ཉིད་མྱུ་གུར་འགྱུར་བས་ས་བོན་གྱི་སྐབས་ན་མྱུ་གུ་མེད་ཅིང་མྱུ་གུའི་གནས་སྐབས་ན་ས་བོན་གྱི་གནས་སྐབས་གཏོང་བའི་ཕྱིར་དེ་འདྲའི་འབྱུང་ཁུངས་ཀྱི་དོན་མེད་པས་སོ། །

諸々の文法学書で〈発生源〉の意味を説明する際には，[1] あるものから分離する，もしくは受け取ることであるとか，[2] 分離して落下することであるとか，[3] 分離して受け取ることである——apādana は nges par sbyin pa「確実に与える」と翻訳されるけれども，apa- は「分離」，ādana は「受け取り」を意味するので——などと様々に語られる．しかしながら，芽は種子との間に不可離の関係を持つものとして成立するとはいえ，種子そのものが芽になるのであるから，種子の状態において芽は存在せず，芽が存在する状態において種子の状態は捨てられるので，そのような〈発生源〉の意味はない．以上の理由から〔ས་བོན་ལས་མྱུ་གུ་ sa bon **las** myu gu という例における ལས་ las 助詞が示すものは本来的な〈発生源〉ではない〕．

[221.217.32d]

དེས་ན་དེ་འདྲ་དེ་འབྱུང་ཁུངས་དངོས་མ་ཡིན་ཡང་དེ་ལས་དེ་སྐྱེ་བའམ་འབྱུང་བ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་འབྱུང་ཁུངས་དང་འདྲ་བར་རིགས་པས། གོང་སྨོས་ཤར་ཕྱོགས་ནས་འོད་སྣང་སོགས་དང་ཕྱོགས་མཚུངས་པར་ཤེས་པར་བྱའོ། །

したがって，そのようなものは本来の意味での〈発生源〉ではないが，あるもの x から他のもの y が生まれ，あるいは発生することから，〈発生源〉に類似するというのは正しいので，上述の ཤར་ཕྱོགས་ནས་འོད་སྣང་ shar phyogs **nas** ’od snang「東方から光が現れる」などと部分的に一致するものであると知るべきである．

[221.217.33]

སྐབས་འདིར་འགྲེལ་བྱེད་ཕལ་ཆེར་གྱིས་དགར་སྡུད་ལ་འཇུག་པའི་ལས་ནས་ཀྱི་སྒྲ་དག་རྣམ་དབྱེ་ལྔ་བར་མི་འདོད་པར་སྣང་ཡང་མི་འཐད་དེ། རྒྱུ་མཚན་གོང་དུ་སྨོས་པ་ལྟར་འཐད་པའི་ཕྱིར་ཏེ།

この問題について，ほとんどの註釈者は〈区分〉や〈境界設定〉の意味を表すために使用される ལས་ las 助詞と ནས་ nas 助詞が第五格〔の意味を有する〕とは認めていないように思われるが，それは正しくない．なぜなら，上述のような理由が妥当するからである．そのさらなる根拠は以下

の通りである．

[221.217.33a]

ལེགས་སྦྱར་ལའང་ཚོགས་ཀྱི་ནང་ནས་དགར་བ་ལ། ག་ཝཱཾ་ཀྲྀཥྞཱ་སཾ་པནྣ་ཀྵཱི་རཱ། (བ་རྣམས་ལས་ནག་མོ་འོ་མ་ཕུན་སུམ་ཚོགས།) ལྟ་བུ་དམིགས་བསལ་དུ་དྲུག་པ་འཇུག་ཀྱང་། སྤྱིར་བཏང་དགར་བ་ཙམ་ལ། ཏསྨཱཏ་ཨ་ནྱ་སྨིན། (དེ་ལས་གཞན་དུ།) ཨ་ནྱོ་གྲྀ་ཧཱད་ཝི་ཧཱ་རཿ། (ཁང་པ་ལས་གཞན་དུ་གཙུག་ལག་ཁང་།) ལྟ་བུ་ལྔ་པ་ཉིད་འཇུག་པ་དང་། མཚམས་བཟུང་ནས་སྡུད་པ་ཡའང་། ཨཱ་པཱ་ཊ་ལི་པུ་ཏྲཱད་ཝྲྀ་ཥྚོ་དེ་ཝཿ། (འདི་ནས་སྐྱ་ནར་བུའི་ཡུལ་གྱི་བར་དུ་ལྷས་ཆར་འབེབས་སོ།།) ལྟ་བུ་རྣམ་དབྱེ་སྦྱོར་ཡུལ་སྔ་ཕྱི་ཅུང་ཟད་མི་འདྲ་བ་ལས།དོན་གྱིས་མཚུངས་པར་ལྔ་བ་འཇུག་པའི་ཕྱིར་དང་།

サンスクリット語においても，集団の中からの区分を表すために，例えば gavāṁ kr̥ṣṇā saṁpannakṣirā「牝牛の中で黒い牝牛は上質な乳を出す」というように，特例として第六格接辞が使用されることがあるが，通常は単純な〈区別〉の意味を表すために，tasmāt anyasmin「それとは別の所で」，anyo gr̥hād vihāraḥ「ヴィハーラは家屋とは異なる」のように第五格接辞こそが適用される．また，〈境界設定〉（mtshams bzung nas sdud pa）の意味を表す場合にも，ā pāṭaliputrād vr̥ṣṭo devaḥ「神は〔ここから〕パータリプトラまで雨を降らせている」のように格接辞の適用先の前後の語順が〔チベット語とは〕少し異なるものの，意味的には等しく第五格接辞が使用される．

[221.217.33b]

གནས་བརྒྱད་འགྲེལ་བར་ཡང་

> ལྔ་པའི་དོན་ནི་གང་ཞིག་ལ་གང་གིས་ཡོད་པ་ལས་དེ་གཞི་དེ་ལས་བྱུང་བ་དང་བྲལ་བ་དང་དགར་བ་དང་ཁྱད་པར་དུ་བྱེད་ན་གང་ལས་ཞེས་བྱ་བའི་སྒྲ་ཡོད་དེ།

ཞེས་འབྱུང་བ་ལེགས་བཤད་དུ་སྣང་བའི་ཕྱིར་རོ། །

さらに，『八論点註釈』[104]においても

> 「第五格の意味：ある所 x に存在するもの y，またはあるもの x によって存在するもの y が，その基盤 x から発生する時，その基盤 x から分離される時，その基盤 x から区分される時，その基盤 x から特定される時，『〜から』（gang las）という表現が成立する．」[105]

と説かれる．これも正しい説明であると思われる．以上の二つの理由から〔先に示したような説は正しくない〕．

[221.217.34]

[221.217.34a]

ཡང་ཁ་ཅིག་གིས་ལས་སྒྲ་སྡུད་པའི་དོན་ལ་འཇུག་པར་བཤད་ཅིང་། དཔེར་བརྗོད་དུ་ལས་སོགས་པ་ཞེས་འགོད་པ་དང་། ལ་སོགས་པ་ཞེས་ཀློག་པ་རྒྱུ་མཚན་དུ་མས་འགོག་པར་བྱེད་མོད། ལེགས་བཤད་དུ་མ་མཐོང་སྟེ། དེ་ལྟ་ན་གཟུགས་ལས་སོགས་པ་ལྟ་བུར་སོགས་ཀྱི་སྒྲ་དེ་ངེས་པར་ལས་སྒྲ་ལ་ལྟོས་པ་ཞིག་འདོད་དགོས་པར་འགྱུར་ན་དེའང་མི་ལྟོས་ཏེ་གཟུགས་སོགས་ཤེས་ལས་སྒྲ་མེད་པས་ཀྱང་དོན་དེ་སྟོན་པར་མཚུངས་པའི་ཕྱིར།

104『八大論点本頌』（*Aṣṭamahāpadamūla*, *Gnas brgyad chen po'i rtsa ba*, Tohoku no. 4350）に対する註釈，デルゲ版テンギュル雑部（sna tshogs）の Co 秩に著者不明という形で収録される『言語論』（*Śabdaśāstra*, *Sgra'i bstan bcos*, Tohoku no. 4351）からの引用である．

105 ŚS D 171b3 からの引用．

また，ある者は ལས་ las 助詞が〈境界設定〉の意味を表すために使用されると論じた上で，その具体例として ལས་སོགས་པ་ las sogs pa という表現を提示し，さらに，ལ་སོགས་པ་ la sogs pa という読みについては複数の理由を挙げて〔その正当性を〕否定しているが，それは正しい説明とは思われない[106]．なぜなら，もしそうであるならば，གཟུགས་ལས་སོགས་པ་ gzugs las sogs pa「物質（色・形）など」のように，その སོགས་ sogs という語は必ず ལས་ las 助詞に依存すると認めねばならないが，〔実際には〕それに依存しておらず，གཟུགས་སོགས་ gzugs sogs というように ལས་ las 助詞がなくてもその同じ意味を等しく表示できるからである．

[221.217.34b]

ལ་སོགས་ཞེས་འདོན་པ་མི་འཐད་པའི་སྒྲུབ་བྱེད་དུ་ལ་སྒྲ་དེ་ལ་གཞུང་འདི་དང་སྒྲ་སྒོ་སོགས་ནས་བཤད་པའི་ལ་སྒྲའི་འཇུག་དོན་གྱི་མཚན་ཉིད་ཅིའང་མེད་པའི་རྒྱུ་མཚན་བཀོད་མོད། དེ་ལྟ་ན། ལ་ལ་དག་ཅེས་འདོན་པའང་མི་འཐད་པར་ཐལ། དེ་འདྲའི་ལ་སྒྲ་ལ་གཞུང་འདི་དང་གཞན་ནས་བཤད་པའི་ལ་སྒྲའི་འཇུག་དོན་གྱི་མཚན་ཉིད་ཅིའང་མེད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

ལ་སོགས་ la sogs という読みが正しくないという説の根拠として，〔彼は〕その ལ་ la 助詞は本書（『三十頌』）や『言語の門』などに説かれる ལ་ la 助詞の用法および意味の特質を全く持たないから，という理由を提示している．しかしながら，もしそうであるならば，ལ་ལ་དག་ la la dag「ある者達」という読みも正しくないことになってしまう．なぜなら，そのような〔表現に含まれる〕ལ་ la という語は本書や他の論書に説かれる ལ་ la という語の用法および意味の特質を全く持たないからである．

[221.217.34c]

གཞུང་འདིར། དགར་དང་སྡུད་པའང་དེ་བཞིན་ཡིན། །ཞེས་གསུངས་པས་ཀྱང་དགར་སྡུད་གཉིས་ལ་ལས་ནས་ཀྱི་འཇུག་པ་ཁྱབ་མཉམ་དུ་བསྒྲུབ་མི་ནུས་ཏེ། དེ་དག་ལ་རྣམ་པ་ཀུན་ཏུ་མཚུངས་པར་འཇུག་པ་མ་ཡིན་པ་གོང་སྨོས་ལྟར་གྱི་ཕྱིར་དང་། ལས་ནས་གཉིས་དགར་སྡུད་ལ་འཇུག་པ་ཡོད་དོ་ཞེས་གསུངས་པས་དེ་གཉིས་སོ་སོ་ནས་དོན་དེ་གཉིས་གང་རུང་ལ་འཇུག་པ་ཡོད་པས་ཆོག་གི་ཁྱབ་མཉམ་དུ་སྟོན་ག་ལ་དགོས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

本書の当該箇所に「〈区分〉と〈境界設定〉もそれと同様である」と説かれるからといって，〈区分〉と〈境界設定〉の二つの意味領域で ལས་ las と ནས་ nas の使用が完全に等しく起こるということを証明することはできない．なぜなら，それらの意味を表すために完全に等しく使用されるのではないことは上に示した通りだからであり，また，「ནས་ nas と ལས་ las の二者は〈区分〉と〈境界設定〉の意味領域で起こることがある」[107]と説かれるので，その二者はそれぞれその二つの内のいずれかの意味を表すために使用されることはあり得るが，完全に等価のものとして説明せねばならない必然性はないからである．

[221.217.34d]

[106] タティ・リンチェン・トンドゥプがこれに近いことを述べている．*Pra ti sum rtags* 47.5ff.: gong du | dgar dang sdud pa'ang de bzhin no || zhes nas las gnyis thun mong du sdud pa'i don la 'jug par bshad pa dang | sngon gyi mdo rgyud bstan bcos kyi yig rnying phal mo cher las sogs pa dang | las stsogs pa zhes pa sha stag byung | 'di dag sdud pa'i skabs su yang la sogs pa dang | la stsogs pa zhes la dang sa'i bar na tsheg bar med pa mtha' yas pa mthong bas las sdud pa'i don la 'jug pa nyid 'thad pa'i phyir |（「先に『〈区分〉と〈境界設定〉もそれと同様である』というように，nas 助詞と las 助詞の両者は共に〈境界設定〉の意味で使用されると説かれ，〔実際に〕昔のほとんどの顕密の古論書には las sogs pa や las stsogs pa という表現のみが現れる．また，これら〔の表現〕が〈境界設定〉の意味を表示する時には〔lasogs pa，lastsogs pa というように〕la sogs pa や la stsogs pa の la と sa の中間のツェクを置かない形〔で現れる事例〕も無数に見られるので，las 助詞が〈境界設定〉の意味で使用されるということは実に理に叶っている．」）

[107] 典拠不明である．

དེ་བཞིན་དུ་གསུང་རབ་རྙིང་བ་ལ། ལ་སྩོགས། ཞེས་བར་ཚེག་མེད་པ་ཡོད་པས་ཀྱང་ལ་སོགས་ཞེས་ཀློག་པ་མི་འཐད་པར་བསྒྲུབ་མི་ནུས་ཏེ། གསུང་རབ་རྙིང་པ་རྣམས་སུ། རལ་གྱི་སོགས་དང་། མྱེ་དང་མྱི་སོགས་དང་། སྩོགས་སོགས་ཡོད་པས་རལ་གྲི་དང་མེ་དང་མི་དང་སོགས་ལ་སོགས་པ་རྣམས་མ་དག་པར་བསྒྲུབ་མི་ནུས་པ་ལྟ་བུའི་ཕྱིར་རོ། །

また，古代の文献に ལ་སྩོགས་ la stsogs という，中間のツェク記号がない〔表記〕が存在するからという理由によっても，ལ་སོགས་ la sogs という読みが正しくないとは論証できない．なぜなら，古代の文献にも རལ་གྱི་ ral gyi「剣」，མྱེ་ mye「火」，མྱི་ myi「人」，སྩོགས་ stsogs「など」など〔の表記〕が現れるが，だからと言って རལ་གྲི་ ral gri，མེ་ me，མི་ mi，སོགས་ sogs など〔の表記〕が正しくないとは論証できないのと同じだからである．

[221.217.35]

ཡང་ཁ་ཅིག་གིས་དགར་སྒྲའི་སྐབས་སུ་རྫས་དགར་བའི་དཔེར་བརྗོད་དུ། བུམ་པ་ལས་གསེར་བུམ། ཞེས་དང་། ལ་ལས། ལྷའི་ནང་ནས་རྡོ་རྗེ་རྩེ་བརྒྱ་འཛིན་པ་ནི་བརྒྱ་བྱིན་ནོ། །ཞེས་བཀོད་མོད། ཤིན་ཏུ་མི་འཐད་དེ། དེ་གཉིས་ཀ་རིགས་སམ་དངོས་པོ་བཀར་བ་ཉིད་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཏེ་སྔ་མ་ནི་དགར་གཞི་དང་དགར་བྱ་གཉིས་ཀ་བུམ་པ། དགར་བྱེད་དམ་ཁྱད་པར་འབྱེད་བྱེད་ནི་གསེར་ཡིན་པ་དང་། ཕྱི་མ་ནི་དགར་གཞི་ལྷ་རྣམས་དགར་བྱ་བརྒྱ་བྱིན། ཁྱད་པར་འབྱེད་བྱེད་རྡོ་རྗེ་ཐོགས་པ་ཡིན་པས་དེ་དག་གི་དགར་བྱ་རིགས་ཙམ་དུ་ངེས་པའི་ཕྱིར།

さらに，ある者は〈区分〉を表す語について，所有物（rdzas, *dravya）[108]〔という限定要素〕による区分の例として བུམ་པ་ལས་གསེར་བུམ་ bum pa **las** gser bum「壺の中で金製の壺は…」というものを提示し，またある者は ལྷའི་ནང་ནས་རྡོ་རྗེ་རྩེ་བརྒྱ་འཛིན་པ་ནི་བརྒྱ་བྱིན་ནོ་ lha'i nang **nas** rdo rje rtse brgya 'dzin pa ni brgya byin no「神々の中で百の尖端部のついた金剛を手にしているのはシャクラ神である」というものを提示するが，全く正しくない．なぜなら，それらは共に種（rigs, *jāti）または実在（dngos po, *vastu）〔という限定要素〕による区分に他ならないからである．というのも，第一の例で区分基盤と区分対象は共に「壺」，区分要素もしくは限定要素は「金」であり，第二の例で区分基盤は「神々」，区分対象は「シャクラ神」，限定要素は「金剛を手に持つこと」であるので，それらの例で区分されるべき対象は種のみであると決定されるからである．

[221.217.36]

སྤྱིར་ཡང་དགར་བ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་རིགས་དང་བྱ་བ་ཡོན་ཏན་གང་ཡང་རུང་བ་དགར་བ་ཡིན་གྱི་རྫས་རྐྱང་བ་དགར་བ་མི་སྲིད་དེ། རྫས་ནི་རྫས་གཞན་ལྡན་པ་བརྗོད་པ་ཡིན་པས་དབྱུག་གུ་ཅན་ལས་ཕྲེང་བ་ཅན་མཛེས་ལྟ་བུ་ནི་ཕྲེང་བའི་རྫས་དང་ལྡན་པའི་གང་ཟག་ལྟ་བུ་རིགས་དགར་བར་སོང་། དབྱུག་གུ་ཐོགས་པ་ལས་འཕྲེང་བ་ཐོགས་པ་ལེགས། ལྟ་བུ་ནི་འཕྲེང་བ་ཐོགས་པའི་བྱ་བ་དགར་བར་སོང་། དེས་ན་དེས་རིགས་བསྒྲེས་ཏེ་ལེགས་པར་བསམས་པས་རྫས་རྐྱང་བ་དགར་བ་མི་རྙེད་པའི་ཕྱིར་དང་། བརྡ་སྤྲོད་པའི་བསྟན་བཅོས་ཆེན་པོ་རྣམས་སུའང་འཕགས་ཡུལ་གྱི་མཁས་པ་དག་གིས་རྫས་དགར་བ་མ་བཤད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

さらに，一般的に〈区分〉とは種と行為と美質のいずれかの区分であって，純粋に所有物のみ〔に基づく〕区分はあり得ない．なぜなら，所有物〔に基づく区分〕とは異なる所有物を持つ〔二者〕についての表現であるが，論理に基づいて比較し良く検討すれば，純粋に所有物のみに基づく区別は見出されないからである——というのは，དབྱུག་གུ་ཅན་ལས་ཕྲེང་བ་ཅན་མཛེས་ dbyug gu can **las** phreng

108 ここで rdzas（Skt. dravya）は所有物（object of possession）を意味する．ダンディンは所有物に関する本質描写（svabhāvokti）について以下の例文を与える．KĀ II 12: kaṇṭhekālaḥ karasthena kapālenenduśekharaḥ | jaṭābhiḥ snigdhatāmrābhir āvir āsīd vṛṣadhvajaḥ ||（「首の所が青黒く，手にした鉢に特徴付けられ，月を冠とし，艶々して赤みがかった髷に特徴付けられた，雄牛を旗印とする者（シヴァ神）がはっきりと姿を現した．」）

ba can mdzes「杖を持つ者よりも念珠を持つ者の方が美しい」という例文は「念珠という所有物を持つ人」という種に基づく区別をするものとなっており，一方，དབྱུག་གུ་ཐོགས་པ་ལས་འཕྲེང་བ་ཐོགས་པ་ལེགས་ dbyug gu thogs pa **las** ’phreng ba thogs pa legs「杖を持つより念珠を持つの方が良い」という例文は「念珠を持つ行為」を区分するものとなっているからである．また，諸々の大文法書の中で聖地（インド）の学者達が所有物に基づく区分について語ることはないからである．

[221.217.37]

དེས་ན་འདི་དག་གི་དཔེར་བརྗོད་ཚུལ་བཞིན་འགོད་པར་འདོད་ན་ཐོག་མར་རིགས་སོགས་བཞི་པོ་དེ་ཅི་ལ་ཟེར་མནོ་བསམ་ཞིབ་མོར་བཏང་ན་མཛེས་སོ། །

それゆえ，これらの〔ལས་ las と ནས་ nas という二つの助詞を用いた〕例文を正確に提示しようと思うならば，まずはその種などの四つが何を意味するかについて精緻に熟考すると良い．

[221.217.38]

སྨྲས་པ།

> མཁས་བླུན་མང་པོའི་གཏམ་དག་འདྲེས་པའི་ཚང་ཚིང་སྡུག་ལྡན་འབྲོག་དགོན་དུ། །
> རྣམ་དཔྱོད་རྟུལ་པོས་འཇུག་པར་རློམ་ཡང་གཞུང་དོན་ལམ་བཟང་ག་ལ་རྙེད། །
> འདི་ན་དེ་དག་སོ་སོར་འབྱེད་པའི་ལེགས་བཤད་རིགས་པའི་འཕྲུལ་ཡོད་པས། །
> གཟུར་གནས་གང་དག་བདེར་འཇུག་འདོད་རྣམས་ཐབས་འདི་གེགས་མེད་བསྟེན་མཛོད་ཅིག །

〔ここで次のことを〕言っておこう．

> 多くの愚者達や賢者達の学説が入り混じった密林がある辺境の荒地の中へ，〔我こそは〕鈍い分析によって立ち入ろう，などという思い上がりを抱いたところで，論書の真意への近道は見出されない．しかし，本書の中には，それらを弁別する妙説の論理という幻術がある．だから，公明正大な者達が〔その荒地の中に〕簡単に分け入ろうと望むならば，どうか彼らには，何者にも妨害されることなく，この道筋を頼りにして頂きたい．

略号と文献

前稿（班青東周・根本 2023）で既に示した文献を省略し、新出文献のみを挙げる。

(1) 一次資料

(1-1) インド撰述文献

KĀ *Kāvyādarśa* (Daṇḍin): O. Böhtlingk ed. *Daṇḍin’s Poetik (Kāvjādarça)*. Leipzig: Verlag von H. Haessel. 1890.

KĀ$_S$ *Kāvyādarśa* (Daṇḍin): *Snyan ngag me long ma zhes bya ba skad gnyis shan sbyar*. In *Ta’i si tu pa kun mkhyen chos kyi ’byung gnas bstan pa’i nyin byed kyi bka’ ’bum*, cha. Sansal: Palpung sungrab nyamso khang. 1990.

VMĀ D *Vacanamukhāyudhopama* (Smr̥tijñānakīrti): Tibetan Sde dge ed. Sgra mdo. She. Tohoku No. 4295.

VMĀV D *Vacanamukhāyudhopama-nāma-vr̥tti* (Smr̥tijñānakīrti): Tibetan Sde dge ed. Sgra mdo. She. Tohoku No. 4296.

(1-2) チベット撰述文献

Bstan pa'i sgron me *Sum cu pa'i 'grel pa bstan pa'i sgron me* (Nam mkha' bzang po). In *Bod kyi brda sprod phyogs bsgrigs*. Pod dang po sum rtags skor (pp. 98–117). Chengdu: Si khron bod yig dpe rnying bsdu sgrig khang. 2014.

Pra ti sum rtags *Bod kyi brda'i bstan bcos sum cu pa zhes bya ba'i rnam bshad kun tu bzang po'i dgongs pa rab tu gsal bar byed pa'i rgyan* (Pra ti rin chen don grub). S.l.: Gser thang bla rung lnga rig nang bstan slob gling. N.d.

Blo gsal 'jug ngogs *Blo gsal 'jug ngogs* (Dmu dge bsam gtan). Chengdu: Si khron mi rigs dpe skrun khang. 1998.

(2) 二次資料

(2-1) 欧文資料

Abhyankar, Kashinath Vasudev
1986 *A Dictionary of Sanskrit Grammar*. Baroda: Oriental Institute.

Cardona, George
1997 *Pāṇini: His Word and Its Traditions. Volume One: Background and Introduction*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.

Deshpande, Madhav M.
1975 *Critical Studies in Indian Grammarians I: The Theory of Homogeneity (Sāvarṇya)*. Ann Arbor: University of Michigan Center for South Asia Studies.

Laufer, Berthold
1898 "Studien zur Sprachwissenschaft der Tibeter Zamatog." In *Sitzungsberichte der philosophisch-philologischen und der historischen Classe der k. b. Akademie der Wissenschaften zu München*. Erster Band (pp. 519–594). Munich: Verlag der k. Akademie.

Negi, J. S.
1998–2005 *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. Vols. 1–16. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

Paṇ chen don grub
2019 "The Meaning of the Case-affix *la* in Classical Tibetan Grammar." *The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic* 16: 135–141.

(2-2) 和文資料

津曲真一
2010 「『バシェ』訳註（1）——マシャン・ドムパキェの失脚——」『四天王寺大学紀要』50: 429–462.

班青東周
2019 「一体性（de nyid）を意味する la don 助詞について」『哲学』71: 135–150.
2021 「チベット語の音声論について」『印度學佛教學研究』69-2: 178 (801)–181 (798).
2022 「シトゥによるチベット語第五格の解釈」『日本西蔵学会々報』67: 1–11.

（パンチェン・トンドゥプ，広島大学大学院修了［インド哲学］・ねもと　ひろし，広島大学［インド哲学］）

Si tu's Commentary on the *Sum cu pa*: Case-related Particles, Adjunctive-adversative Conjunctions, Adjunctive-explicative Conjunctions, Disjunctive-and-interrogative Conjunctions

Paṇ CHEN DON GRUB, NEMOTO Hiroshi

The current study, following our previous paper, seeks to clarify the Tibetans' comprehension of the Tibetan script and language, with a specific focus on the perspective of Si tu chos kyi 'byung gnas. This paper explores the theory of particles (*tshig phrad*) expounded in verses 9c–17a of Thu mi's *Sum cu pa*. These particles encompass the *la* particles, genitive markers, ergative-instrumental markers, adjunctive-adversative particles (*kyang*, etc.), adjunctive-explicative particles (*ste*, etc.), disjunctive-and-interrogative conjunctions (*gam*, etc.), and ablative case markers.

Si tu was undeniably an innovative grammarian. His profound knowledge of Sanskrit grammar led him to formulate a unique system of Tibetan grammar, characterized not as descriptive but as normative grammar. Nevertheless, previous studies have not adequately examined Si tu's originality as a commentator in interpreting individual verses in the *Sum cu pa*. This paper takes a closer look at verses 9c–11 of the *Sum cu pa*, revealing Si tu's critical analysis and new interpretations, particularly based on his critique of Rnam gling paṇ chen's ideas.

As a result of our investigation, it becomes evident that Si tu's new interpretations excel in many respects compared to previous ones. He was fully aware of problems in earlier interpretations, and concurrently, he strongly believed that the *Sum cu pa* was written in accordance with the scholar's method of composition (*mkhas pa'i bstan bcos kyi lugs*). Ensuring that Thu mi's statements in the *Sum cu pa* make sense and providing a rational interpretation are crucial principles in Si tu's commentary.

The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic 21 (2024): 135–190.
email: 1760838295@qq.com, nemoto@hiroshima-u.ac.jp